山口県埋蔵文化財センター調査報告　第77集

東禅寺・黒山遺跡Ⅵ

（とうぜんじ　くろやまいせき）

2011

財団法人　山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、南若川流域治水対策河川工事に伴い、山口県防府土木建築事務所から委託を受け、山口県ひとづくり財団が実施した山口市鋳銭司に所在する東禅寺・黒山遺跡発掘調査の記録をまとめたものです。

調査の結果、周防鋳銭司に関連すると考えられる古代の集落跡等を確認することができ、当地域の歴史を知るうえで貴重な成果をおさめることができました。

本書が文化財保護に対する理解を深め、教育ならびに学術研究や郷土史理解の資料として広く活用されることを期待するものであります。

最後になりましたが、当発掘調査の実施・報告書の作成にあたり、ご指導・ご協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成23年３月

財団法人　山口県ひとづくり財団

理事長　　藤　井　俊　彦

例　言

1　本書は平成22年度に実施した、東禅寺・黒山遺跡（山口県山口市大字鋳銭司地内）の発掘調査報告書である。

2　調査は財団法人山口県ひとづくり財団が山口県防府土木建築事務所の委託を受けて実施した。
（契約名：南若川流域治水対策河川工事に伴う調査業務委託第１工区）

3　調査組織は次のとおりである。

調査主体　財団法人山口県ひとづくり財団　山口県埋蔵文化財センター

調査担当　主任調査研究員　小　南　裕　一
文化財専門員　石　川　　彰
文化財専門員　米　澤　昭　信
調　　査　　員　山　田　圭　子

4　調査にあたっては、山口県教育委員会、山口市教育委員会、山口県防府土木建築事務所ならびに地元関係各位から協力・援助を得た。

5　本書の図１は国土地理院発行の２万５千分の１地形図「小郡」「台道」を複製使用した。図２は山口県防府土木建築事務所提供の地図を元に作成した。

6　本書で使用した方位は、国土座標（世界測地系）の北で示し、掘立柱建物跡以外の個別遺構に関しては磁北で示している。また、標高は海抜高度（m）である。

7　本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell 方式による。

8　図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。

9　本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＫ：土坑　　ＳＰ：柱穴
ＳＤ：溝状遺構　　ＳＸ：性格不明遺構

10　古代銭の成分分析については、財団法人元興寺文化財研究所に依頼し、その成果を付編として掲載した。

11　本書の作成・執筆は、小南・石川・米澤・山田が共同で行い、編集は小南が行った。

本文目次

Ⅰ　遺跡の位置と環境…… 1
Ⅱ　調査の経緯と概要…… 3
Ⅲ　調査の成果…… 5
　1　基本層序…… 5
　2　遺構…… 5
　3　遺物……23
Ⅳ　まとめと考察……43
付編　東禅寺・黒山遺跡出土金属製品の分析……45

挿図目次

図１　遺跡の位置と周辺の遺跡…… 1
図２　調査区設定図…… 3
図３　基本土層図…… 5
図４　Ｘ地区検出遺構…… 6
図５　Ⅺ地区遺構配置図…… 9
図６　Ⅺ地区検出遺構（１）……11
図７　Ⅺ地区検出遺構（２）……12
図８　Ⅺ地区検出遺構（３）……13
図９　Ⅺ地区検出遺構（４）……14
図10　Ⅺ地区検出遺構（５）……15
図11　Ⅺ地区検出遺構（６）……16
図12　Ⅺ地区検出遺構（７）……17
図13　Ⅻ地区検出遺構……18
図14　ⅫⅠ地区遺構配置図……20
図15　ⅫⅠ地区検出遺構（１）……21
図16　ⅫⅠ地区検出遺構（２）……22
図17　Ｘ地区出土遺物（１）……23
図18　Ｘ地区出土遺物（２）……24
図19　Ⅺ地区出土遺物（１）……25
図20　Ⅺ地区出土遺物（２）……26
図21　Ⅺ地区出土遺物（３）……27
図22　Ⅺ地区出土遺物（４）……28
図23　Ⅺ地区出土遺物（５）……29
図24　Ⅺ地区出土遺物（６）……30
図25　Ⅻ地区出土遺物（１）……31
図26　Ⅻ地区出土遺物（２）……32
図27　ⅫⅠ地区出土遺物（１）……33
図28　ⅫⅠ地区出土遺物（２）……34
図29　各地区出土金属製品・石製品……35
図30　冨田式暗渠工事方法……44

表目次

表１　掘立柱建物跡一覧表……19
表２　出土土器・土製品観察表……36
表３　出土石製品観察表……42

図版目次

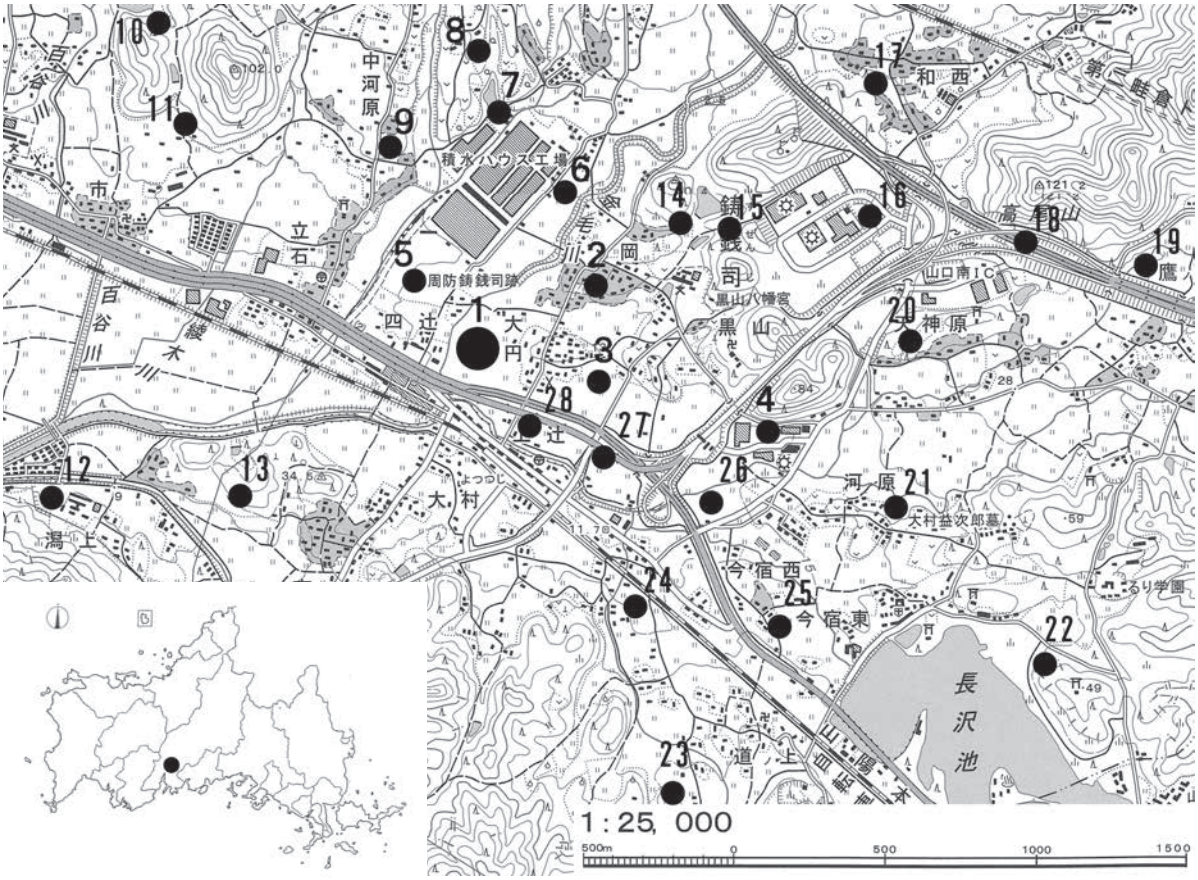
図版１　調査区遠景
図版２　調査区全景
図版３　Ⅸ地区全景
　　Ⅹ地区全景
図版４　Ⅺ地区全景
図版５　Ⅻ地区全景
　　ⅩⅢ地区全景
図版６　Ⅸ地区東壁土層断面
　　Ⅹ地区南壁土層断面
図版７　ＳＢ１・ＳＢ２完掘状況
　　ＳＰ６上層遺物出土状況
　　ＳＰ６下層遺物出土状況
　　ＳＰ６完掘状況
　　ＳＤ１土層断面
　　ＳＤ１完掘状況
　　Ⅹ地区暗渠１土層断面
図版８　Ⅺ地区東半部掘立柱建物群
　　Ⅺ地区西半部掘立柱建物群
図版９　ＳＰ30遺物出土状況
　　ＳＰ258遺物出土状況
　　ＳＰ301遺物出土状況
　　ＳＰ361遺物出土状況
　　ＳＰ352遺物出土状況
　　ＳＰ352玦状耳飾出土状況
　　ＳＰ702遺物出土状況
　　ＳＰ756遺物出土状況
図版10　ＳＫ１遺物出土状況
　　ＳＫ１完掘状況
　　ＳＫ14土層断面
　　ＳＫ14遺物出土状況
　　ＳＫ15土層断面
　　ＳＫ15完掘状況
　　ＳＫ16遺物出土状況
　　ＳＫ21遺物出土状況
図版11　ＳＤ２検出状況
　　ＳＤ２遺物出土状況
　　Ⅺ地区包含層遺物出土状況
　　ＳＰ429遺物出土状況
　　ＳＰ462遺物出土状況
図版12　ＳＰ475遺物出土状況
　　ＳＰ484遺物出土状況
　　ＳＤ７・ＳＤ８・ＳＤ９完掘状況
　　ＳＤ７底面
　　ＳＤ７排水口出土状況
図版13　ＳＤ８・ＳＤ９完掘状況
　　ＳＤ10・ＳＤ11検出状況
　　Ⅻ地区包含層石斧出土状況
　　ＳＤ10・ＳＤ11杭列出土状況
　　ＳＰ585遺物出土状況
　　ＳＰ606遺物出土状況
図版14　ＳＰ621遺物出土状況
　　ＳＰ665遺物出土状況
　　ＳＰ680遺物出土状況
　　ＳＰ698遺物出土状況
　　ＳＫ34遺物出土状況
　　ＳＫ34完掘状況
　　ⅩⅢ地区暗渠検出状況
図版15　ＳＫ33遺物出土状況
　　ＳＫ33遺物出土状況
図版16　出土遺物①
図版17　出土遺物②
図版18　出土遺物③
図版19　出土遺物④
図版20　出土遺物⑤
図版21　出土遺物⑥
図版22　出土遺物⑦
図版23　出土遺物⑧
図版24　出土遺物⑨
図版25　出土遺物⑩
図版26　出土遺物⑪
図版27　出土遺物⑫
図版28　出土遺物⑬

Ⅰ　遺跡の位置と環境

東禅寺・黒山遺跡は、山口市の鋳銭司地区に位置する遺跡である。鋳銭司地区は山口湾に流入する椹野川河口一帯に発達した吉南平野の北東部にあり、西は椹野川を隔てて山口市小郡地区に、北は黒河内山を中心とした山口山地を境として山口市平川地区に、東は南若川上流の谷中分水帯を通じて防府市大道地区に、南は火ノ山・陶ヶ岳のある秋穂山地を隔てて山口市秋穂二島地区に接している。本遺跡は、山口山地から南流する金毛川の左岸に位置し、標高７～８ｍの洪積段丘の中位段丘下位面に広がっており、平安前期の海進期には、汀線が６～７ｍの位置にあったと考えられていることから、遺跡の南側にほぼ当時の海岸線は接していたと思われる。現在、遺跡周辺は水田地帯となっており、南西部の近世干拓地へとつながっている。

本遺跡周辺の生活の痕跡を見てみると、もっとも古いものとして、縄文時代の遺物が出土する鋳銭司地区東部の長沢池周辺にある長沢池遺跡がある。長沢池は慶安４（1651）年に作られた県内第２のため池であるが、その周辺や湖底から縄文土器をはじめ石鏃・石匙・石錘など、多数の遺物や遺構が発見されており、狩猟とともに漁労も行われていたことが推察される。ところが、弥生時代から古墳時代の遺物や遺構の発見は著しく少ない。

奈良時代になると、本遺跡のある鋳銭司地区に西隣する陶地区に、須恵器を生産する大窯業地帯が



１．東禅寺・黒山遺跡　２．東禅寺・黒山遺跡（岡上ノ原・後子庵地区）　３．東禅寺・黒山遺跡（東大円・上徳田地区）
４．東禅寺・黒山遺跡（河原地区）　５．周防鋳銭司跡　６．上北田遺跡　７．八ケ坪遺跡　８．糸根遺跡
９．下糸根遺跡　10．友輪窯跡　11．鋳銭坊遺跡　12．潟上遺跡　13．稲富窯跡　14．舟木遺跡　15．伊表山遺跡
16．桐ヶ浴・尾口山遺跡　17．和西遺跡　18．壷（壱）窯遺跡　19．弥市原遺跡　20．天神原遺跡　21．河原遺跡
22．長沢池遺跡　23．道ノ上遺跡　24．藪河内遺跡　25．今宿東遺跡　26．今宿西遺跡　27．鋳銭司大歳遺跡　28．上辻遺跡

図１　遺跡の位置と周辺の遺跡

発達する。陶窯跡は奈良時代から平安時代にかけての須恵器の窯跡であり、小郡地区につながる丘陵地に50基以上の窯が存在したと考えられ、「陶窯跡」は国指定史跡となっている。これは、丘陵の傾斜地が登り窯の構築に適していたこと、洪積段丘の丘陵地が、陶土として最適な良質の粘土から形成されていたためであると考えられる。また古代の当地域は、八千駅がおかれ古代山陽道に面し、前述のように汀線が山口湾の奥まで広がっていたこともあり、海陸交通がともに発達していたこともこの地に窯業が発達した要因であるといえる。こうした立地条件もあって、９世紀には周防鋳銭司が成立する。周防鋳銭司では、皇朝十二銭のうち「富壽神寶」から「乾元大寶」までの８種類を鋳造しており、昭和48（1973）年に「周防鋳銭司跡」として国指定史跡となった。

周防鋳銭司の北側の八ヶ坪遺跡、下糸根遺跡、本遺跡の南東にある上辻遺跡、鋳銭司大歳遺跡、今宿西遺跡、また本遺跡の平成７～11・14・20年度調査でも、古代から中世にかけての掘立柱建物跡や土坑などの遺構や緑釉陶器、坩堝、鞴羽口、銅滓などの遺物が出土しており、周防鋳銭司関連の遺跡と考えられている。このことから、奈良時代から平安時代にかけて、周防鋳銭司跡や陶窯跡などの生産遺跡の発展とともに、それらの施設で働く職人集団の集落や関連遺跡が当地域一帯に展開していたものと推察される。

中世以降になると、多くのため池の築造とともに灌漑による水田化が進行し、古代の臨海工業地域的な様相から、農村的な様相へ変化する。また、南に位置する秋穂浦が、山口に本拠を構える大内氏の外港であったため、山陽道と秋穂街道が四辻で交差し、大変に賑わったとされている。従来低地にあった集落は、平安時代後期から室町時代にかけて微高地へ移動した。さらに、中世の海退期や近世萩藩による干拓事業により低地の水田化が進み、享保13（1728）年に作成された『地下上申絵図』にも描かれているように、現在のような水田地帯となった。

ところで、東禅寺･黒山遺跡の名称は、本遺跡のある鋳銭司地区の小字名に由来する。大内氏時代、実際にこの地に「東禅寺」という寺院があったと伝えられているが、現在その遺構は未確認である。また、黒山地区には鋳造に関わる黒山神を祀る「黒山八幡宮」が現存している。このことからもこの地域が古来より、深く鋳造に関わってきた地域であったことをうかがわせる。

参考文献

山口県教育委員会文化課編『弥市原・東禅寺』建設省山口工事事務所・山口県教育委員会　1982年
山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センター編『上辻・鋳銭司大歳・今宿西』
山口県教育委員会・建設省山口工事事務所　1984年
山口県教育財団『東禅寺・黒山遺跡Ⅰ・Ⅱ』 1996・1997年
山口県埋蔵文化財センター『東禅寺・黒山遺跡Ⅲ～Ⅴ』 1998～2000年
山口県埋蔵文化財センター『東禅寺・黒山遺跡（東大円・上徳田地区）』 2003年
山口県埋蔵文化財センター『東禅寺・黒山遺跡（岡上ノ原・後子庵地区）』 2009年
山口市教育委員会『周防鋳銭司跡』 1978年
山口市教育委員会『八ヶ坪遺跡』 1992年
山口市教育委員会『東禅寺・黒山遺跡』 2000年
山口市教育委員会『下糸根遺跡』 2000年
山口市史編集委員会編 『山口市史』山口市　1982年
下中邦彦　日本歴史地名大系『山口県の地名』平凡社　1980年
竹内理三　角川日本地名大事典『山口県』角川書店　1988年

Ⅱ　調査の経緯と概要

東禅寺・黒山遺跡が位置する山口市鋳銭司地区は、地形的な要因により、たびたび水害に見舞われてきた。そこで県は、この地域に調整池を建設する工事を計画し、これに伴い、平成７年度より当該地区の埋蔵文化財発掘調査が実施されている。この発掘調査は山口県埋蔵文化財センターによって平成11年度まで継続して実施されてきたが、その後、諸般の事情により工事計画の実施が延びたため、調査も一時中断していた。

こうした状況下、平成21年度に山口県山口土木建築事務所（当時）より南若川流域治水対策河川工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査（東禅寺・黒山遺跡）の実施依頼が山口県教育委員会社会教育・文化財課を通じて財団法人山口県ひとづくり財団・山口県埋蔵文化財センターにあり、協議の結果、平成22年度の事業として実施されるはこびとなった。

発掘調査の委託契約は平成22年４月６日をもって、山口県防府土木建築事務所（平成22年度より山口土木建築事務所と統合）と財団法人山口県ひとづくり財団・山口県埋蔵文化財センターとの間で締結され、以後、発掘調査のための事前準備が進められることとなった。関係機関との打ち合わせ、地元自治会へのあいさつ等を行い、５月下旬には調査事務所の設置や、調査区の草刈り等を実施し、現地調査開始の準備を整えた。

本年度の発掘調査対象面積は3640㎡であり、調査区を５つに分けⅨ～ⅩⅢ地区とそれぞれ命名し（図２）、調査を開始した。遺構面確認のためのトレンチ掘削と重機による表土除去作業を６月１日より開始し、その後人力による本格的な遺構検出作業に入った。基本的な層序は、客土や水田耕作土の下

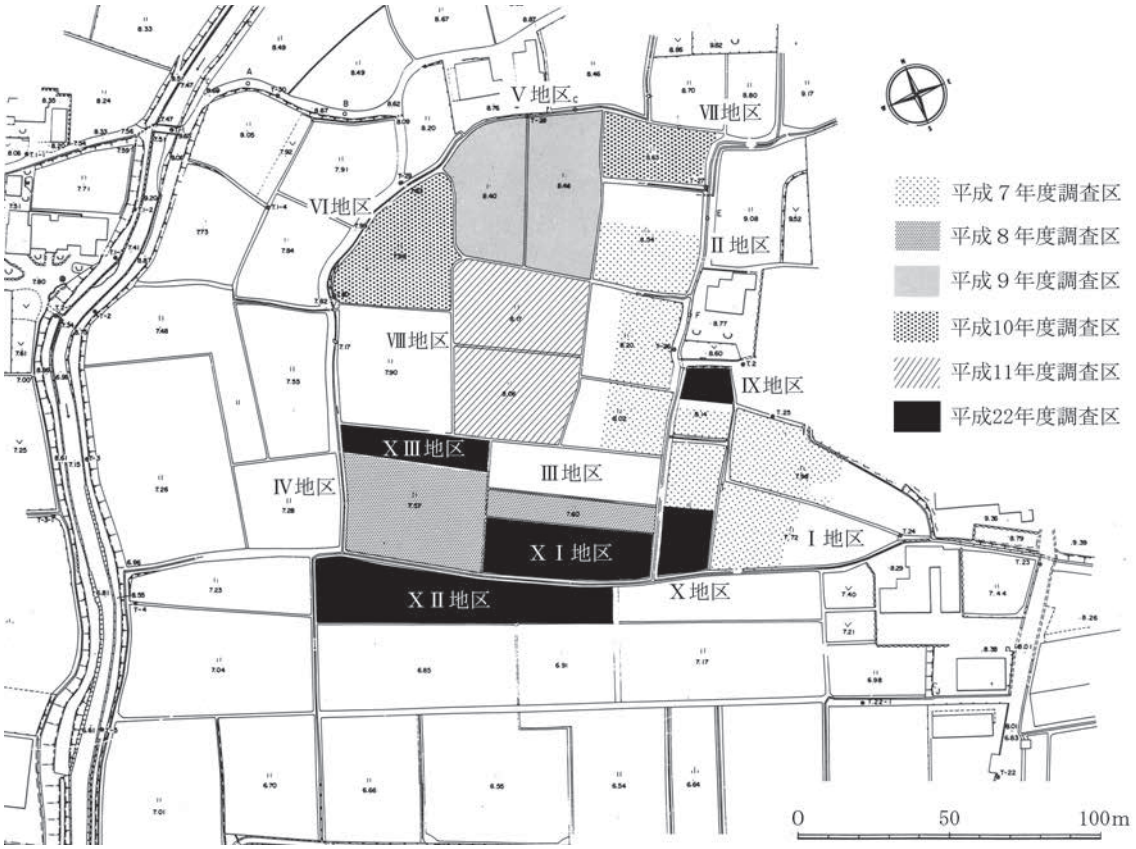


図２　調査区設定図

に灰色系の遺物包含層があり、その下が遺構面であるが、遺物包含層が存在しない地区もあり、地表面から遺構面までの深さは一様ではない。遺構の密度はⅪ地区とⅫ地区が高く、特にⅪ地区は面積も広いため、まずこの地区から優先的に作業を進めていくことにした。しかし、本格的な作業開始が梅雨時であったことや、調査区自体の水はけの悪さなどにより、作業は難航した。なお、Ⅸ地区に関しては、遺構がほとんど存在しないことや、常時帯水状態にある危険性を考慮し、図面作成と写真撮影が終了した７月９日に埋め戻しを行った。

表土除去

調査風景

現地説明会

その後、個別遺構の掘り込みや、包含層掘削作業に移り、図面作成や写真撮影を随時行い、調査を進めていったが、その過程で８月５日には山口市潟上中学校生徒、８月19日には山口市内小学校児童（山口市文化財教室）、９月16日には山口市平川中学校生徒を受け入れ、体験発掘などを行った。暑い中ではあったが、児童・生徒らは真面目に作業に取り組み、先人が遺した文化財の大切さを認識することができたようである。

９月に入ると天候も安定し、調査は順調に進み、古代～中世の掘立柱建物跡や土坑などが次々に確認され、掘り込みが進められていった。遺物についてもⅪ地区の柱穴から縄文時代の玦状耳飾が出土し、Ⅻ地区では土坑から良好な土器群と延喜通寶の共伴関係を確認するなど、大きな成果を得ることができた。そして10月22日には空中写真撮影および測量作業を実施し、10月30日には調査成果を公表するために現地説明会を開催した。この現地説明会には地元住民を中心として約60名の参加があり、盛会のうちに終了することができた。

その後、最終確認のためのトレンチ掘削や、図面の補足作業等を行い、11月５日には調査事務所の撤去等を行い、５ヶ月に及ぶ現地調査を無事終了することができた。現地撤収後は山口県埋蔵文化財センターにおいて、図面記録の整理や出土遺物の図化等を行い、この報告書を作成した。

Ⅲ　調査の成果

１　基本層序

今回は調査区をⅨ～ⅩⅢ区の５地区に分け、発掘を実施したが、各調査区で、客土や水田耕作土の厚さが異なるため､遺構面までの深さは一定ではない。図３に示したのは､Ⅸ地区（左）とＸ地区（右）の土層図であるが、Ⅸ地区については遺構面として捉えられる４層上面で遺構がほとんど検出できなかったため、全体的に深掘りを行ったが、遺構、遺物ともに確認できなかった。Ｘ地区については、１層が客土、２・３層が水田耕作土、４層が遺物包含層、５層以下が遺構面であり、西に隣接するⅪ地区もほぼ同じ層序を示している。４層には主に中世後半期の遺物が多く含まれており、調査区南端のⅫ地区でもその存在が認められる。いっぽう、ⅩⅢ地区ではこうした遺物包含層は存在せず、水田耕作土の直下が遺構面となっている。

２　遺構

今回の発掘調査区中、遺構の密集度が高いのはⅪ地区とⅩⅢ地区であり、特にⅪ地区は面積も広いため、多くの遺構を確認することができた。いっぽう、Ⅸ地区では遺構がほとんど存在しなかったが、これは過去の隣接地区における調査成果からみても十分に予測できることであった。すなわち、Ⅸ地区および隣接する西側と南側は遺構密度が薄いエリアであり、集落内における空閑地として捉えることが可能である。また、全体調査区の南端にあたるⅫ地区も遺構密度が薄いが、これは地形的にこの地区が他地区よりも標高が低くなっていることが主たる原因である。

今回の調査では、掘立柱建物33棟、土坑34基のほか、溝状遺構や性格不明遺構などを検出することができた。以下、地区ごとに遺構の説明を行いたい。

（１）Ｘ地区検出の遺構

掘立柱建物

ＳＢ１（図４　図版７）　Ｘ地区の東側に位置する建物跡で、桁行２間（4.8m）×梁行２間（4.4m）、床面積21.12㎡を測る。棟方向はＮ63°Ｗ。５つの柱穴で柱痕が認められ､SP３からは土師器の椀（１）が、SP10からは土師器の坏（２）が出土した。中世の掘立柱建物と考えられる。

ＳＢ２（図４　図版７）　Ｘ地区の東側に位置する建物跡で、桁行２間（4.6m）×梁行１間（1.3m）、床面積5.98㎡を測る。棟方向はＮ72°Ｗ。建物の時期については不明である。

柱穴

ＳＰ６(図４　図版７)

中央やや西側で検出された。古代末期の土器群が一括の状態で出土しており、建物廃絶後の地鎮行為によるものと考えられる。

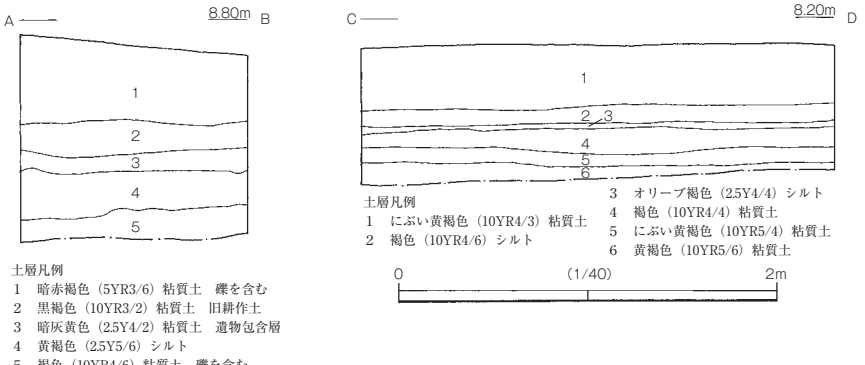


図３　基本土層図

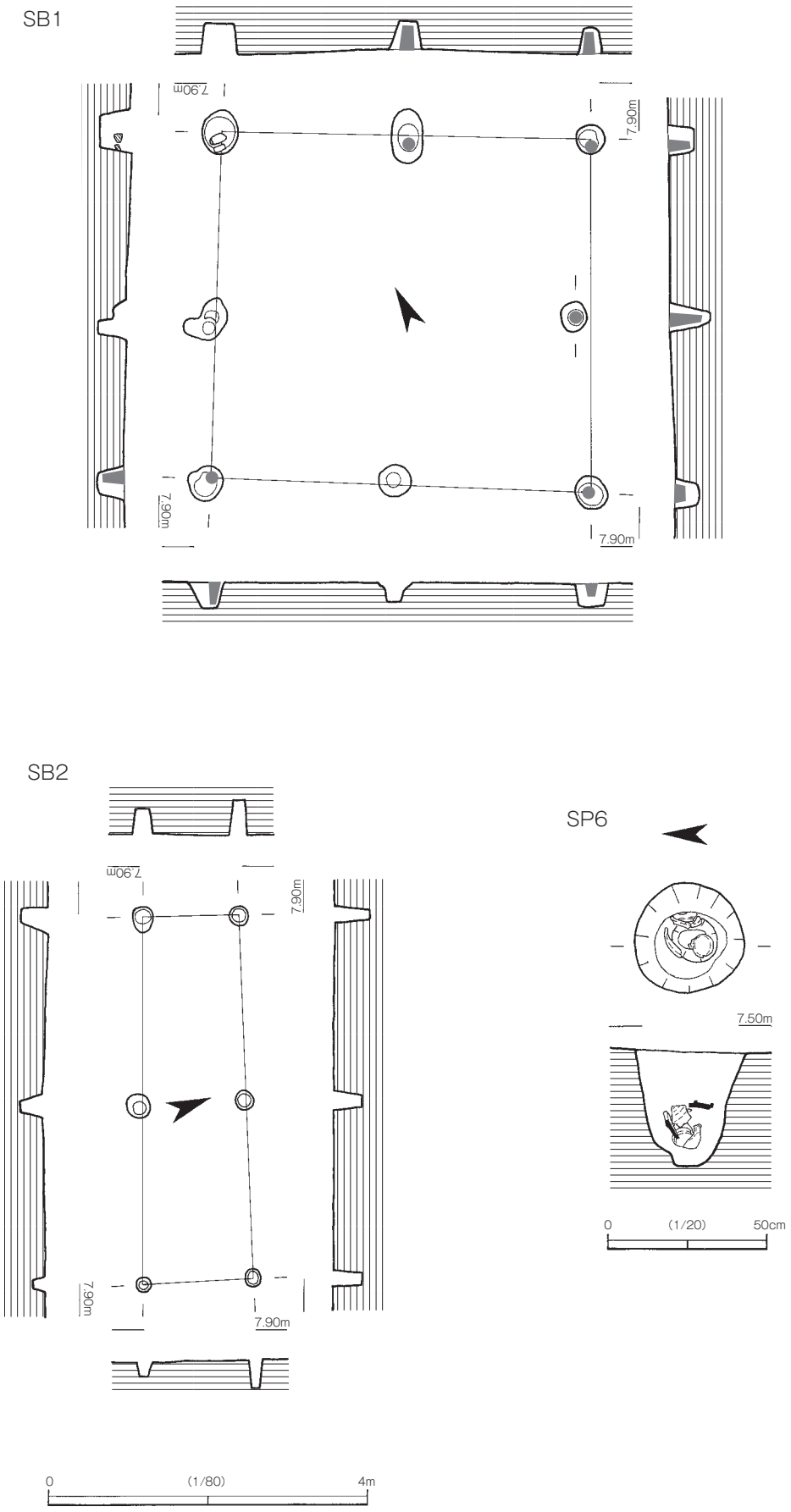

SB1
7.90m
7.90m
7.90m
7.90m
SB2
7.90m
7.90m
7.90m
7.90m
SP6
7.50m
0
(1/20)
50cm
0
(1/80)
4m

図４　X地区検出遺構

（２）XI地区検出の遺構

ＳＢ５（図６　図版８）　XI地区中央部の北側に位置する建物跡で、桁行２間（3.6m）×梁行１間（2.1m）、床面積7.56㎡を測り、規模としては小型の部類に属する。棟方向はＮ64°Ｗで、重複するSB９とほぼ同じである。建物東南隅に位置するSP27では柱痕が認められ、土師器の坏と埦（32・33）が出土した。中世の建物である可能性が高い。

ＳＢ６（図６）　XI地区中央部の北側に位置する建物跡で、桁行３間（7.2m）×梁行１間（2.7m）、床面積19.44㎡を測る。棟方向はＮ73°Ｗ。建物北面に所在するSP290では柱痕が認められた。時期については出土遺物が小片であるため、判断することが難しい。

ＳＢ７（図６　図版８）　XI地区の東端に位置する建物跡で、桁行３間（7.5m）×梁行１間（3.0m）、床面積22.50㎡を測る。棟方向はＮ22°Ｅ。SB20と重複する。構成柱穴には柱抜き取りの痕跡を留めるものが多く認められる。SP730からは瓦質の足鍋（35）が、SP144からは土師器の皿（36・37）と土師質の器台（38）が出土した。中世後半期の建物である。

ＳＢ８（図７　図版８）　XI地区東半部の南側に位置する建物跡で、桁行２間（4.7m）×梁行２間（3.9m）、床面積18.33㎡を測る。棟方向はＮ21°Ｅ。詳細な時期は不明である。

ＳＢ９（図７　図版８）　XI地区東半部の北側に位置する建物跡で、桁行３間（6.9m）×梁行２間（4.6m）、床面積31.74㎡を測る。SB５・SB13と重複する。棟方向はＮ67°Ｗで、SB ５や隣接するSB４とほぼ同じである。SP52から土師器の坏（39）が出土した。時期を限定することは難しいが、中世の建物である可能性が高い。

ＳＢ12（図８）　XI地区中央部に位置する建物跡で、桁行２間（4.0m）×梁行２間（3.6m）、床面積14.40㎡を測る。棟方向はＮ73°Ｗ。平面形態がほぼ正方形を呈する掘立柱建物跡であり、詳細な時期については不明。

ＳＢ13（図８　図版８）　XI地区東半部の北側に位置する建物跡で、桁行４間（5.4m）×梁行２間（3.8m）、床面積20.52㎡を測り、棟方向はＮ71°Ｗ。南面に庇（1.6m）をもつ。ただし、調査区外に建物の一部が広がる可能性があるため、規模や構造等については確実なものではない。建物北面に位置する柱穴は、残存する径、深さともに規模が大きいが、これは柱が抜き取られていることに起因する。SB４・SB９と重複しており、SB９とは切り合い関係にある。土師器の坏（64）が出土したSP167は、この建物を構成する柱穴の１つとなる可能性があり、この他の構成柱穴から出土した土器片と併せて判断すると、この建物の時期は古代末期ごろである可能性が高い。

ＳＢ14（図９　図版８）　XI地区中央部の南側に位置する建物跡で、桁行５間（11.7m）×梁行２間（5.2m）、床面積60.84㎡を測り、今回検出された建物跡の中では最大規模である。棟方向はＮ59°Ｗ。SP361・SP702から須恵器の坏（42・43）が出土しており、また土師器・須恵器・土師質土器（93～96・100）が出土したSK22とSK28は、この建物を構成する柱穴となる可能性がある。これらの遺物から判断して、この建物の所属時期は古代末期である可能性が極めて高い。また、建物の北西面中央で検出されたSP352からは玦状耳飾（222）が出土しているが、これは混入品であると考えられる。

ＳＢ16（図10　図版８）　XI地区西半部の北側に位置する建物跡で、桁行３間（5.7m）×梁行２間（3.6m）、床面積20.52㎡を測る。棟方向はＮ21°Ｅで、隣接するSB15とほぼ同じである。SB17と重複し、

一部の柱穴が切り合い関係にあるが、先後関係については判断できなかった。SP332からは土師器の坏（46）が、SP388からは白磁の碗（47）が出土しており、中世前半期の建物であると考えられる。東接するSB15も規模や棟方向、出土遺物などから、時期的に近いものと判断できる。

ＳＢ17（図10　図版８）　XI地区西半部の北側に位置する総柱の建物跡で、桁行２間（5.4m）×梁行２間（5.1m）、床面積27.54㎡を測る。棟方向はＮ69°Ｗで、重複するSB16、隣接するSB15にほぼ直交する。柱穴からは、土師器の小片などが出土しているが、これらによって建物の時期を判断することは難しい。

ＳＢ19（図11　図版８）　XI地区の西端に位置する総柱の建物跡で、現状では桁行３間（8.0m）×梁行２間（4.3m）、床面積34.40㎡を測るが、北西側の柱穴が調査区外に所在するため、正確な規模は不明である。いずれにしろ、かなり規模の大きな建物跡であると考えられる。棟方向はＮ12°Ｅ。構成柱穴であるSP323からは土師器の埦（48）が、SP349からは土師器の甕（49）が出土しており、こうした遺物から、古代末期の建物であると考えられる。

土坑

ＳＫ１（図12　図版10）　XI地区西半部、SB14の西側に位置する。平面形は直径約42㎝の円形土坑を主体として、東側に柱穴状の張り出しをもつような形を呈する。深さは24㎝。断面形は袋状を呈し、底部は最大で61㎝の幅をもつ。埋土は３層に分かれ、上層のにぶい黄褐色粘質土、オリーブ褐色粘質土から、古墳時代の土師器甕（101）が押し潰されたような状態で出土した。出土状況から考えて、この土師器は、ほぼ完形の状態で埋置されていたものと考えられる。

ＳＫ14（図12　図版10）　XI地区西半部の北側に位置する。平面形は長軸73㎝、短軸62㎝の不整楕円形を呈するが、南側を柱穴によって切られている。深さは12㎝。埋土は単層で、暗赤褐色粘質土層から土師器の皿（88・89）と焼土塊が出土した。中世の遺構であると考えられる。

ＳＫ15（図12　図版10）　XI地区西半部の北側、SK14の西隣に位置する。平面形は長軸111㎝、短軸82㎝の不整長円形を呈する。深さは25㎝。埋土は上層が炭や赤色焼土粒を含む灰色粘質土で、下層が炭を多量に含むオリーブ黒色粘質土である。土師器の埦（90）をはじめ多くの土器片が出土したが、小片のため図化していない。

ＳＫ16（図12　図版10）　XI地区西半部の北側、SK14・SK15の西側に位置する。平面形は長軸84㎝、短軸60㎝の不整楕円形を呈する。深さは13㎝。埋土は単層で、赤色土器粒、マンガン粒、木炭を含む赤灰色粘質土である。埋土上層から土師器の坏（91）が出土しており、この遺物から中世前半期の遺構であると判断できる。

ＳＫ21（図12　図版10）　XI地区の西端に位置する。平面形は直径約105㎝の不整円形を呈する。深さは10㎝。床面にピットが複数認められるが、本土坑に関係するものであるかどうかは不明である。埋土は単層で、３～５㎜大の炭粒やマンガンを含む褐灰色粘質土から、土師器の埦（92）が伏せられた状態で出土した。この遺物から、本土坑の年代は古代後期に比定することができる。

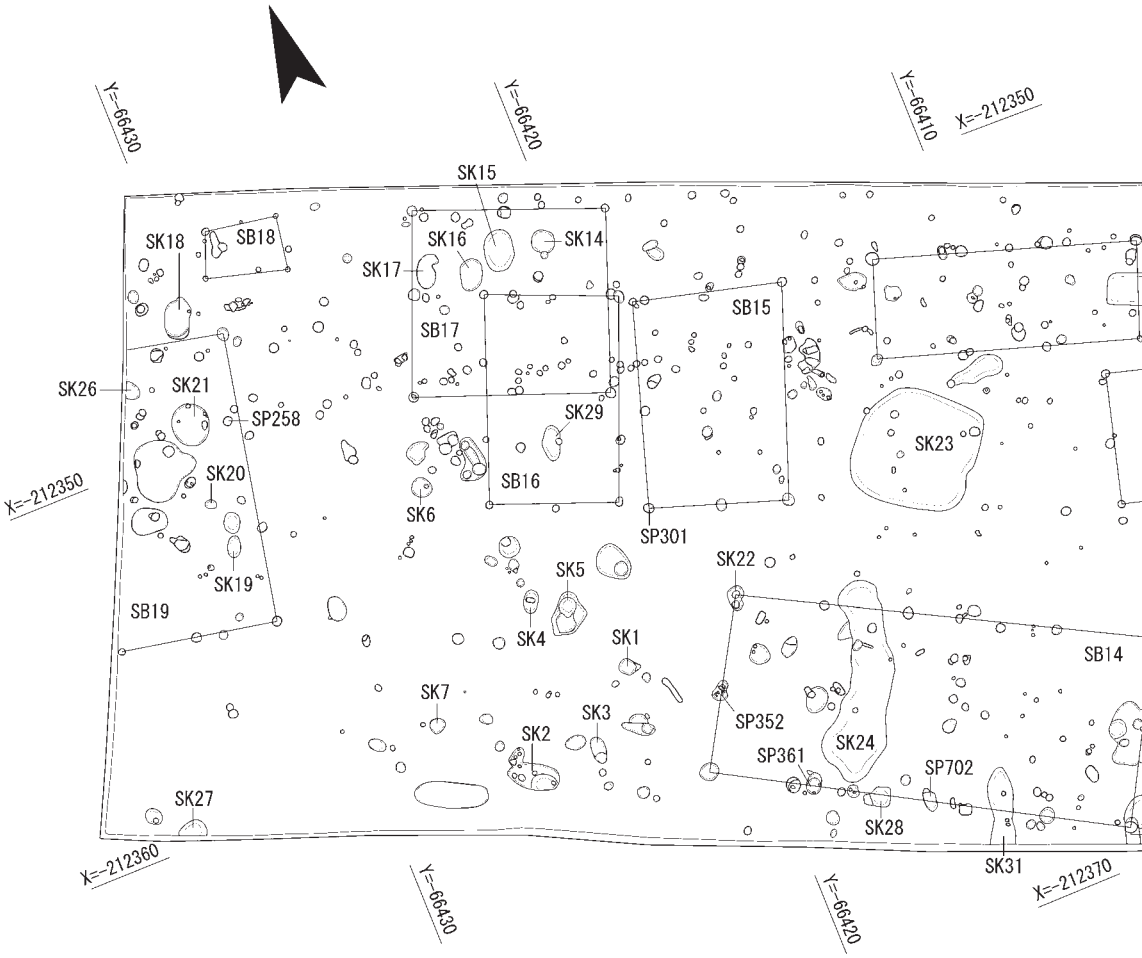
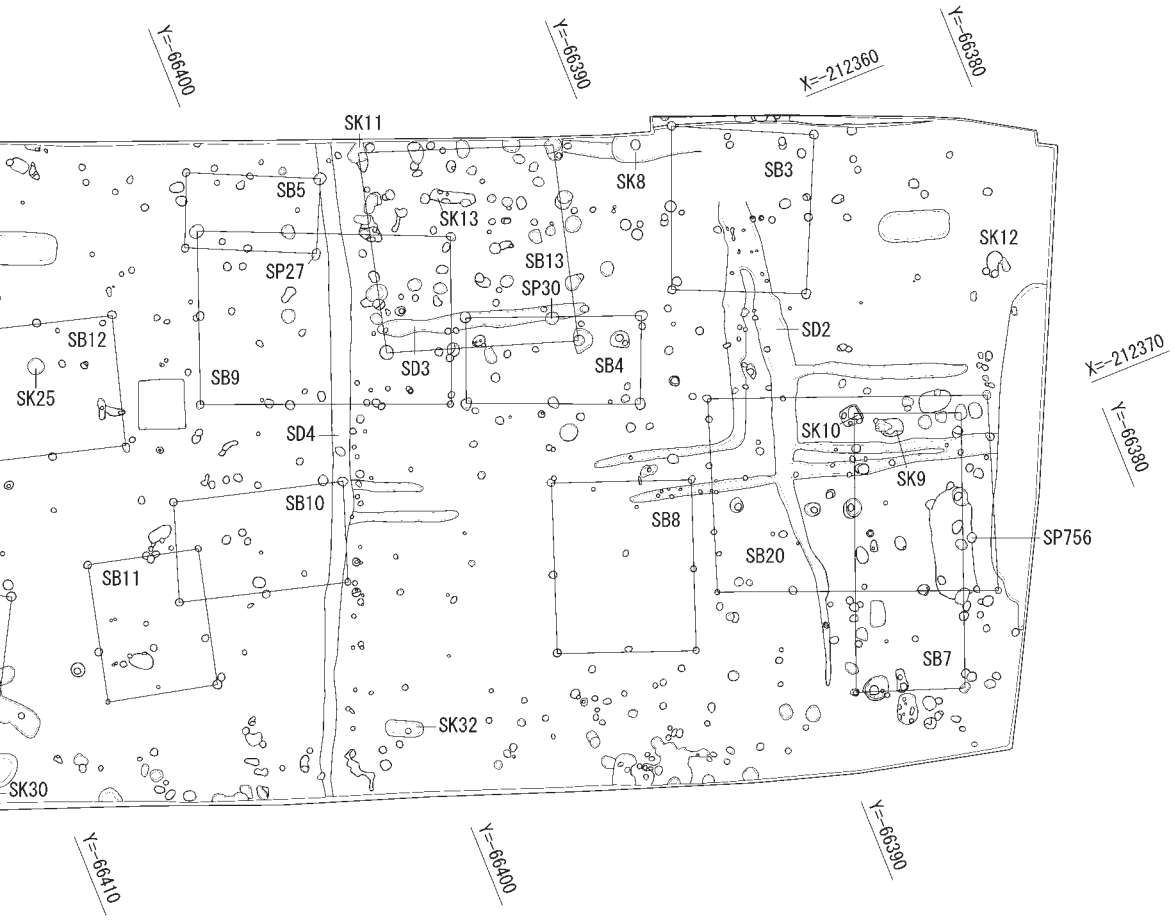

Y=-66430
Y=-66420
Y=-66410
X=-212350
SK15
SK18
SB18
SK16
SK14
SK17
SB15
SB17
SK26
SK21
SP258
SK29
SK23
SK20
SB16
X=-212350
SK6
SP301
SK5
SK22
SK19
SB19
SK4
SK1
SB14
SK7
SK3
SP352
SK2
SP361
SK24
SP702
SK27
SK28
SK31
X=-212360
Y=-66430
Y=-66420
X=-212370

図５　XI地区



0 (1/200) 10m

区遺構配置図

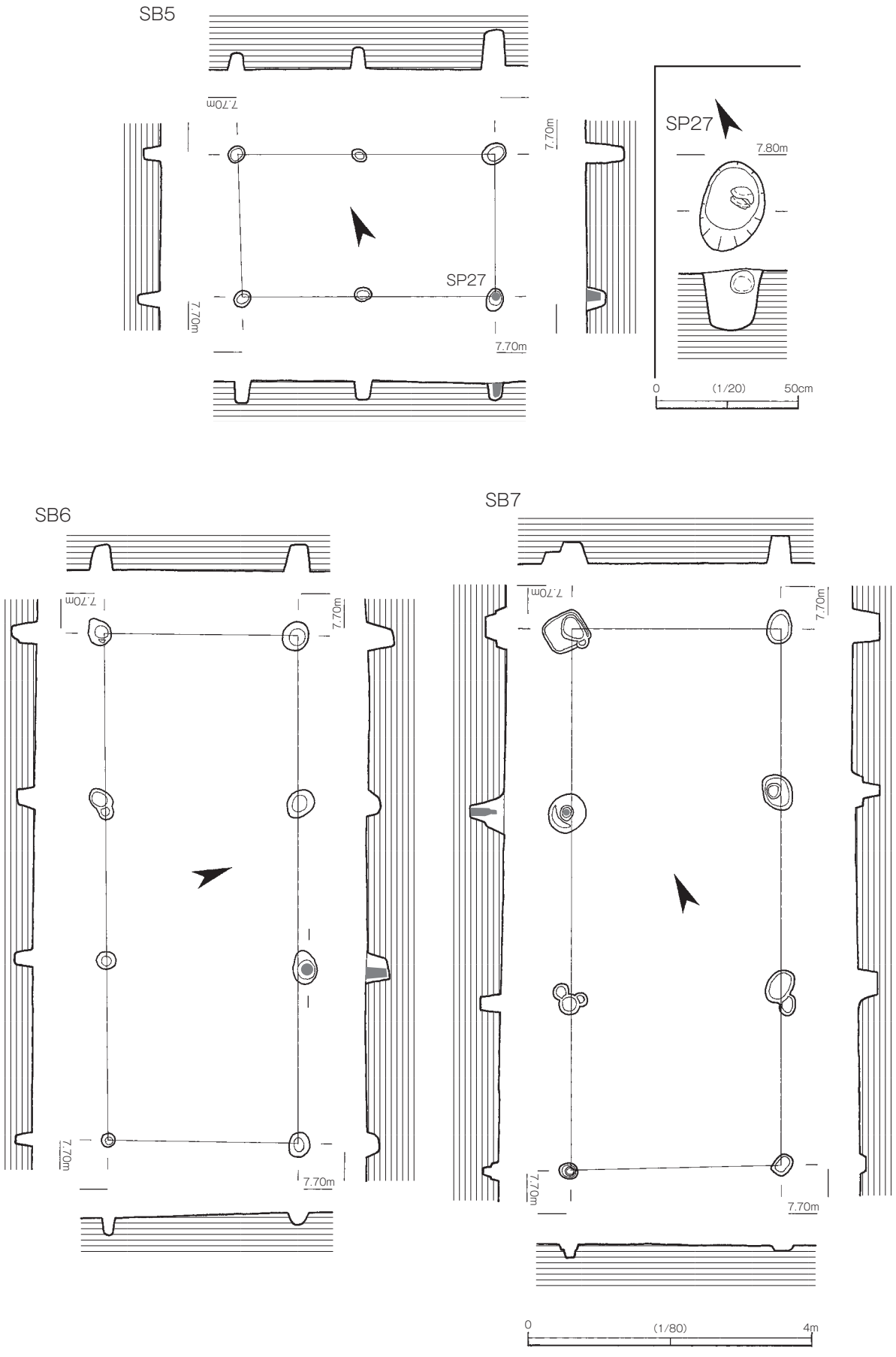


図６　Ⅺ地区検出遺構（１）

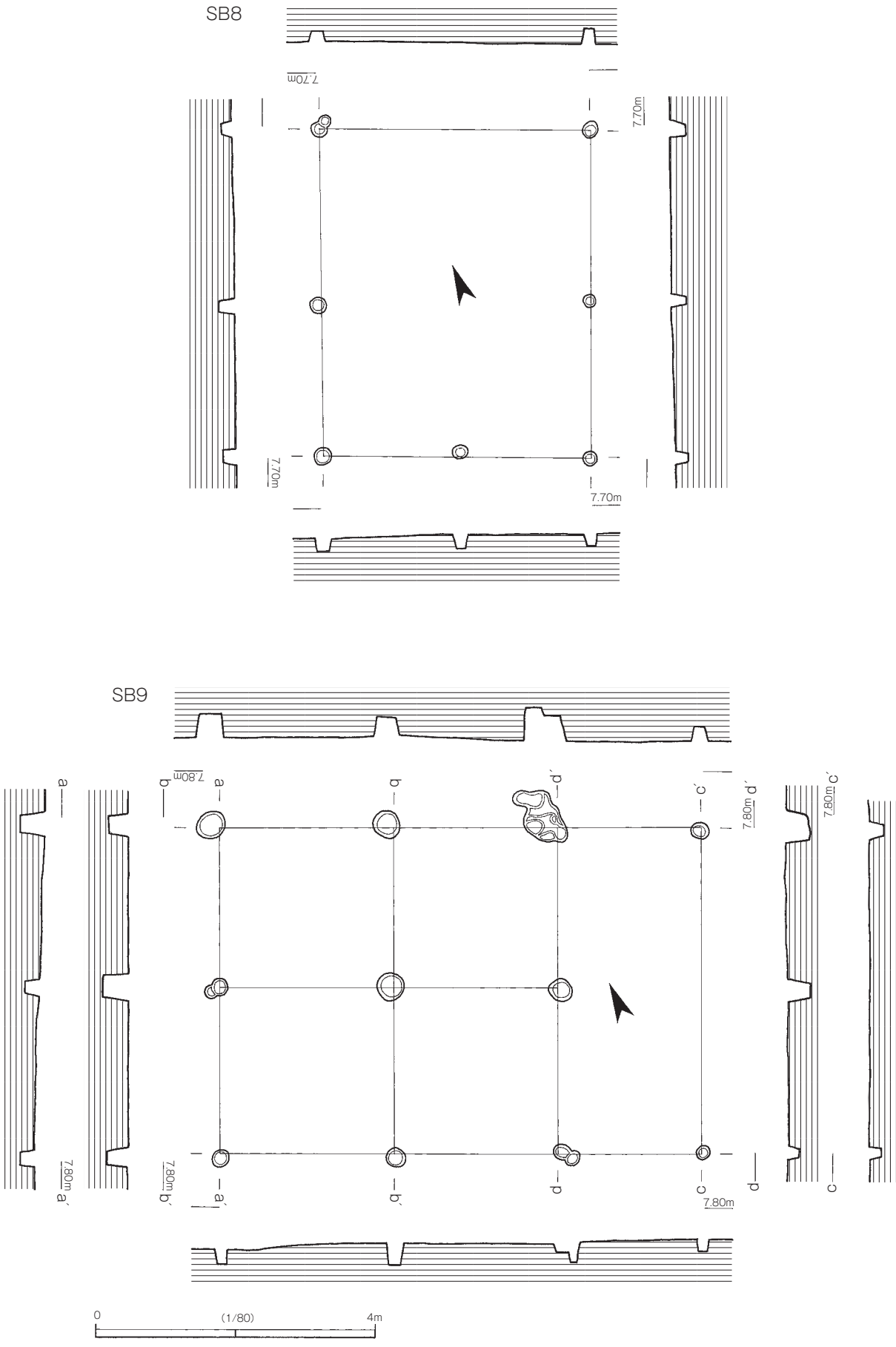

SB8
7.70m
7.70m
7.70m
7.70m
SB9
7.80m
a
a´
b
b´
c
c´
d
d´
7.80m
7.80m
7.80m
7.80m
7.80m
7.80m
0
(1/80)
4m

図７　Ⅺ地区検出遺構（２）

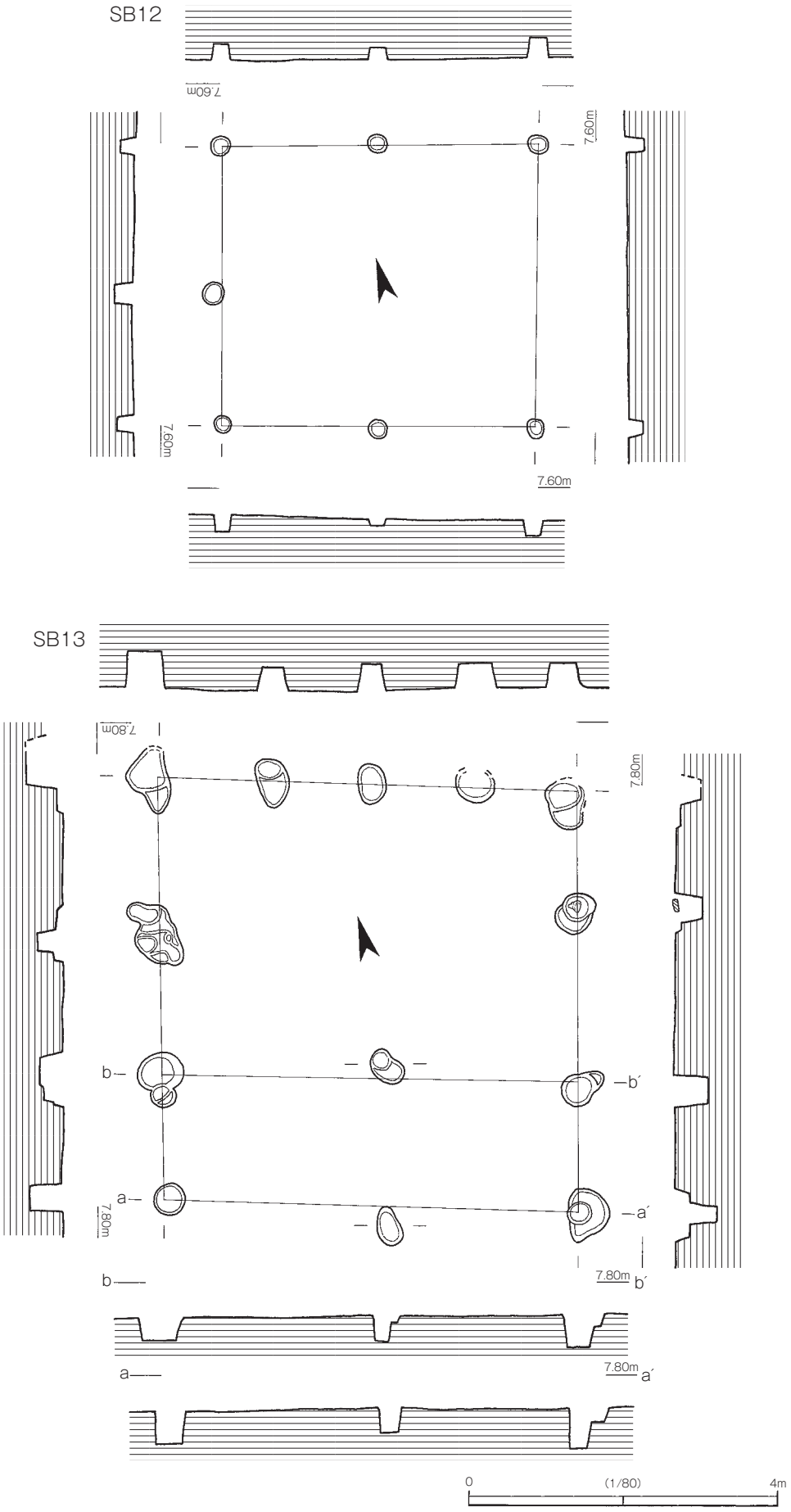

SB12
7.60m
7.60m
7.60m
7.60m
SB13
7.80m
7.80m
b
b´
a
a´
7.80m
b
7.80m
b´
a
7.80m
a´
0
(1/80)
4m

図８　Ⅺ地区検出遺構（３）

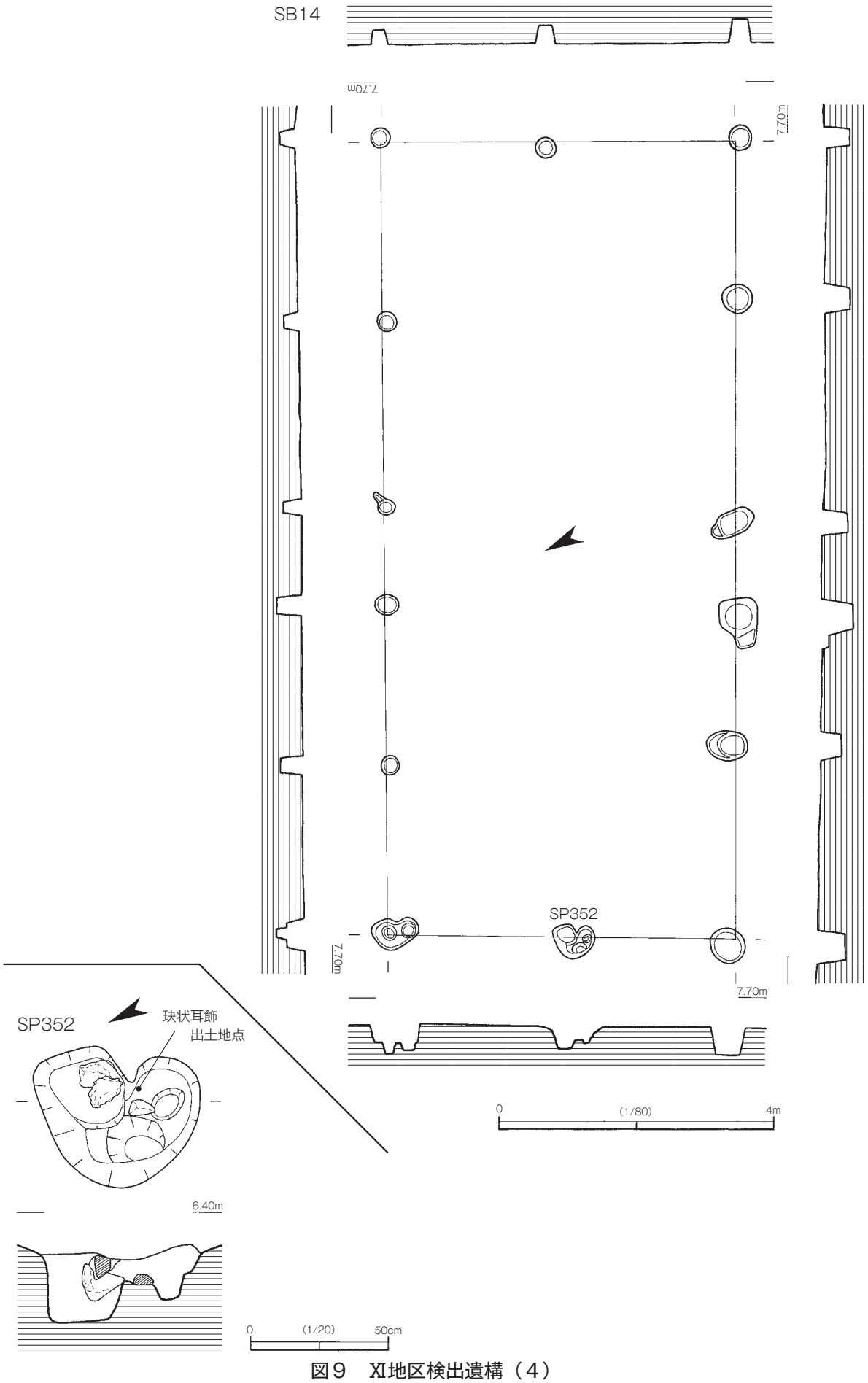


図９　XI地区検出遺構（４）

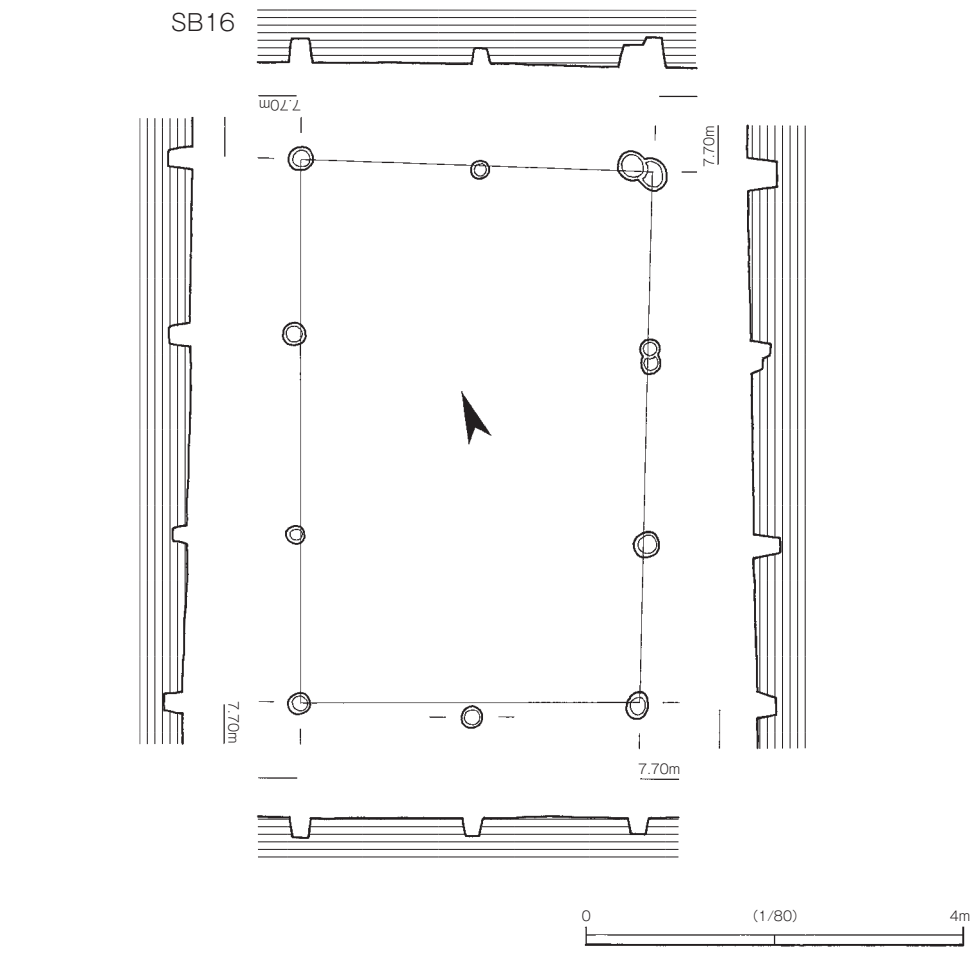


図10　XI地区検出遺構（5）

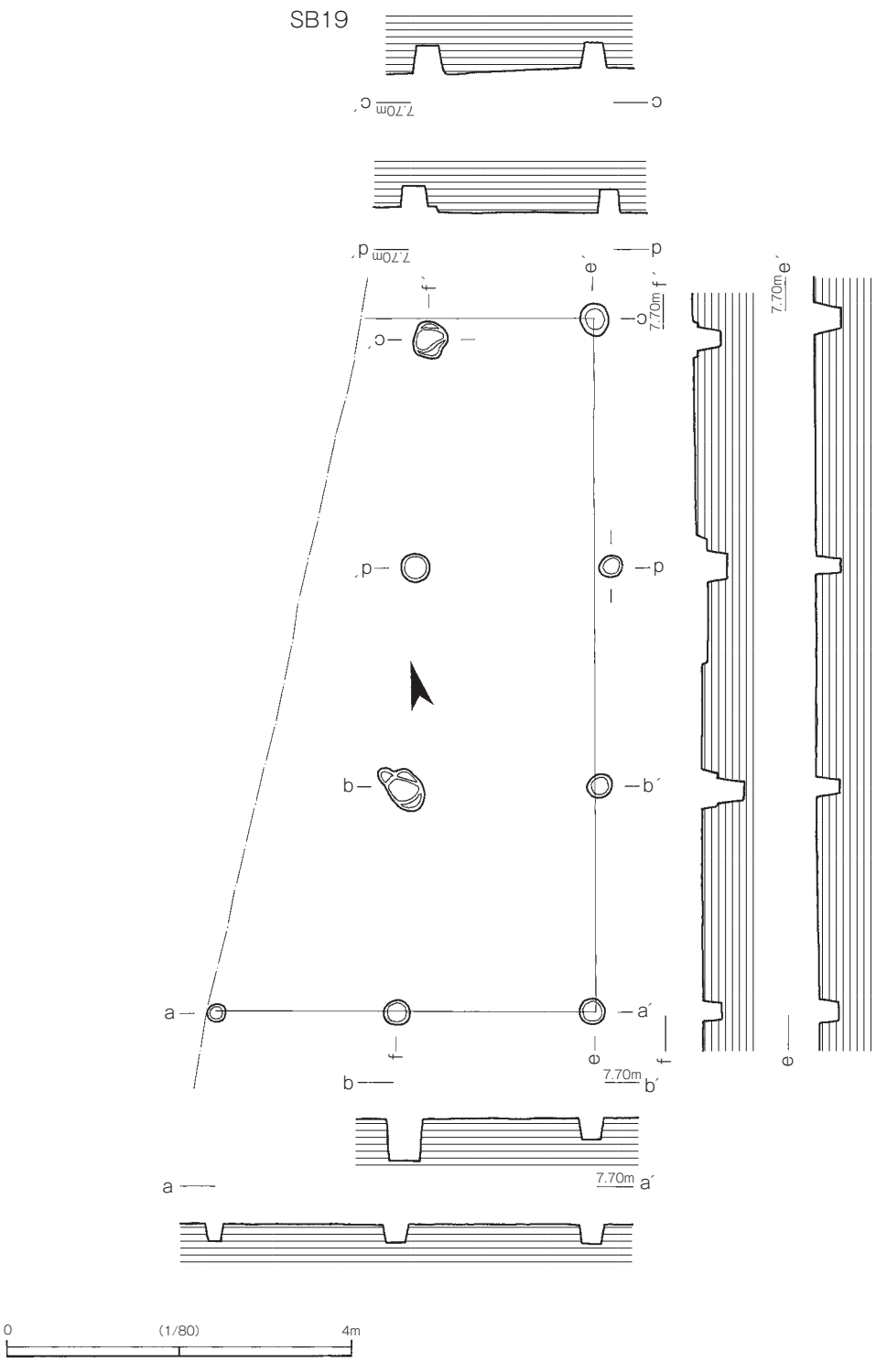


図11　Ⅺ地区検出遺構（6）

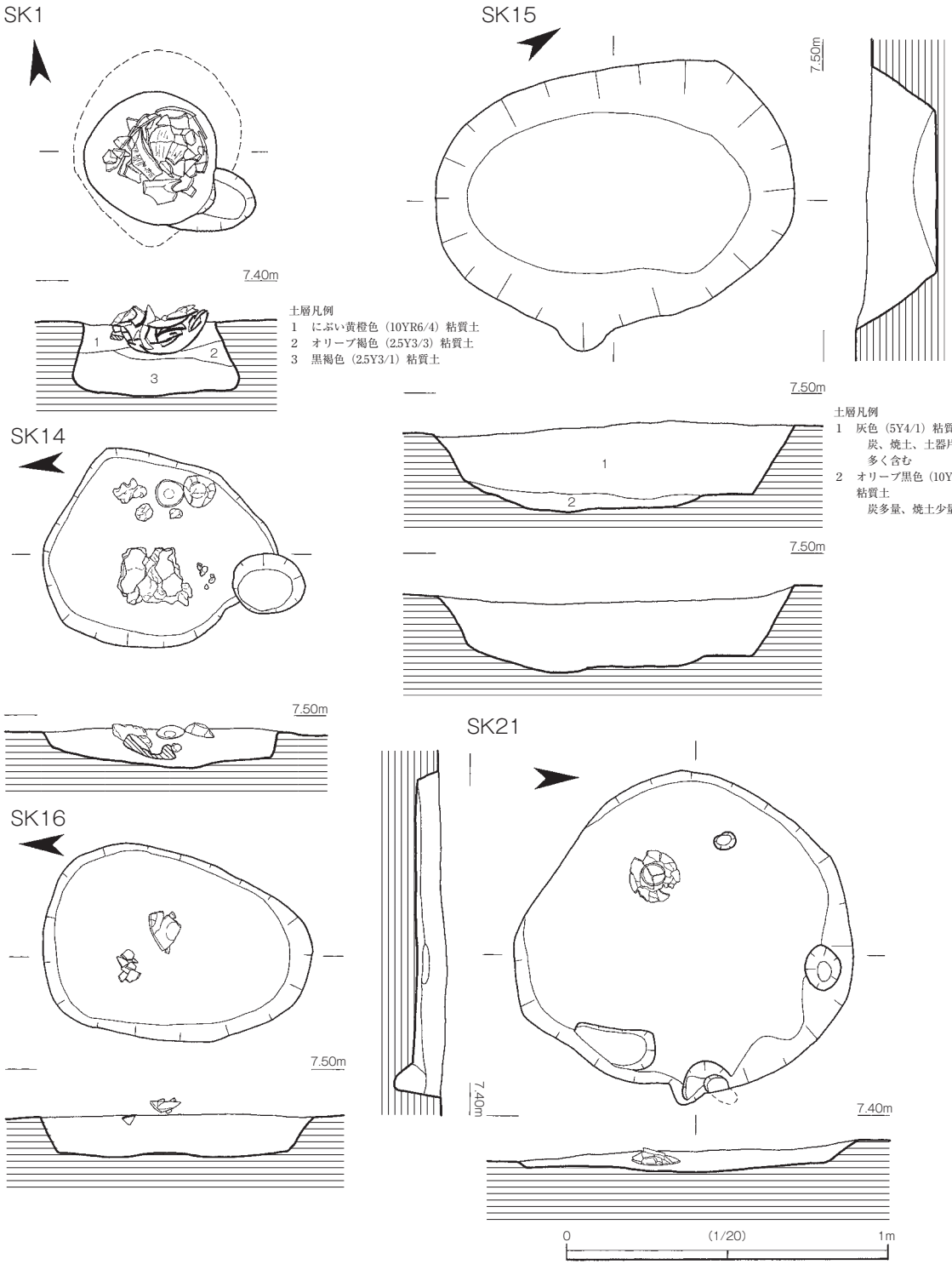


図12　Ⅺ地区検出遺構（7）

（3）Ⅻ地区

堀立柱建物

ＳＢ21（図13） Ⅻ地区中央部の南側に位置する建物跡で、桁行２間（5.0m）×梁行１間（1.9m）、床面積9.50㎡を測る。棟方向はＮ68°Ｗである。構成柱穴であるSP429からは土師器の皿（142）と埦（143）が出土した。これらの遺物から判断して、この建物は古代末～中世前半期に位置付けられよう。

（4）ⅩⅢ地区

掘立柱建物

ＳＢ27（図15） ⅩⅢ地区中央部に位置する総柱の建物跡で、桁行２間（4.6m）×梁行２間（4.2m）、床面積19.32㎡を測る。棟方向はＮ64°Ｗで、重複するSB28～SB30、近接するSB31･SB32とほぼ同じである。構成柱穴からは土師器の埦や坏（171･174～176）、土師質土器の鍋（172･173）が出土しており、これらの遺物から判断して、本掘立柱建物の年代は中世前半期と考えることができる。

ＳＢ28（図15） ⅩⅢ地区中央部に位置する建物跡で、桁行２間（3.8m）×梁行１間（2.5m）、床面積9.50㎡を測る。棟方向はＮ64°Ｗで、SB27･SB29と重複する。構成柱穴からは土器片等が出土しており、これらの遺物からみて、本建物の所属時期は中世後半期まで降ることはないと判断できるが、詳細な年代を絞り込むことは困難である。

ＳＢ29（図15） ⅩⅢ地区中央部に位置する建物跡で、桁行２間（5.3m）×梁行１間（1.9m）、床面積10.07㎡を測る。棟方向はＮ63°Ｗで、SB27･SB28と重複する。構成柱穴からは、土器片等が出土しているが、建物の年代を決定できるようなものは確認できなかった。

ＳＢ32（図15） ⅩⅢ地区の西側に位置する建物跡で、桁行２間（4.7m）×梁行１間（2.4m）、床面積11.28㎡を測る。棟方向はＮ68°Ｗ。構成柱穴からは、土師器片などが出土しているが、建物の年代を絞り込むことはできない。

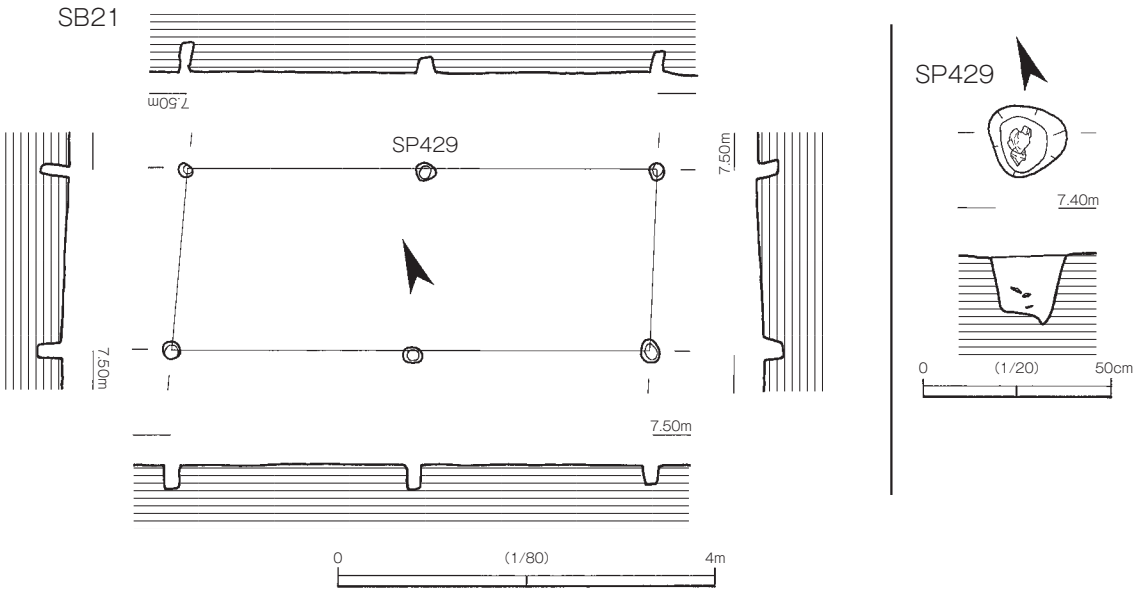


図13　Ⅻ地区検出遺構

土坑

ＳＫ33（図16　図版15）　Ⅻ地区の西半部南端に位置する。平面形は長軸165㎝、短軸116㎝の不整楕円形を呈する。深さは最大で15㎝。埋土には焼土が多く含まれており、その中から土師器の坏（193～195）、埦（196～203）、土師質の甕（204～206）、三叉トチン（207～209）等が大量に出土した。古代後期の廃棄土坑であると考えられる。

ＳＫ34（図16　図版14）　Ⅻ地区のほぼ中央に位置する。平面形は直径約55㎝の円形を呈する。深さは35㎝。埋土は褐灰色粘質土の単層で、遺構面に近い埋土上層から、土師器の埦（210･211）、延喜通寶（213）が出土しているが、その下から遺物は確認されていない。

遺構番号	地区	規模（間）	棟方向	柱間		面積（㎡）	出土遺物	備考
				桁行	梁行			
				建物の南東隅から（m）	建物の南東隅から（m）			
SB 1	X	2 × 2	N63° W	4.8(2.5・2.3)	4.4(2.2・2.2)	21.12	土師器	中世
SB 2	X	2 × 1	N72° W	4.6(2.2・2.4)	1.3	5.98		
SB 3	Ⅺ	2 × 1	N25° E	4.3(2.1・2.2)	3.6	15.48	緑釉陶器・土師器	古代
SB 4	Ⅺ	2 × 1	N67° W	4.7(2.3・2.4)	2.4	11.28	黒色土器・土師器	
SB 5	Ⅺ	2 × 1	N64° W	3.6(1.9・1.7)	2.1	7.56	土師器	中世
SB 6	Ⅺ	3 × 1	N73° W	7.2(2.5・2.3・2.4)	2.7	19.44	土師器・須恵器	
SB 7	Ⅺ	3 × 1	N22° E	7.5(2.5・2.7・2.3)	3.0	22.50	土師器・瓦質土器	中世
SB 8	Ⅺ	2 × 2	N21° E	4.7(2.3・2.4)	3.9(1.9・2.0)	18.33	土師器	
SB 9	Ⅺ	3 × 2	N67° W	6.9(2.5・2.2・2.2)	4.6(2.3・2.3)	31.74	土師器	柱間北西隅から　中世
SB10	Ⅺ	2 × 1	N70° W	4.6(2.2・2.4)	2.7	12.42	土師器	中世
SB11	Ⅺ	1 × 2	N15° E	2.4	2.9(1.4・1.5)	6.96	土師器・須恵器	南面に庇(1.3m)　中世
SB12	Ⅺ	2 × 2	N73° W	4.0(2.0・2.0)	3.6(1.7・1.9)	14.40	土師器・黒色土器	柱間南西隅から
SB13	Ⅺ	4 × 2	N71° W	5.4(1.2・1.3・1.3・1.6)	3.8(1.5・2.3)	20.52	土師器・瓦質土器	柱間北東隅から 南面に庇(1.6m)　古代
SB14	Ⅺ	5 × 2	N59° W	11.7(2.3・3.2・1.5・1.8・2.9)	5.2(2.8・2.4)	60.84	須恵器	古代
SB15	Ⅺ	2 × 2	N20° E	5.9(2.9・3.0)	3.8(1.8・2.0)	22.42	土師器	中世
SB16	Ⅺ	3 × 2	N21° E	5.7(1.7・2.1・1.9)	3.6(1.8・1.8)	20.52	土師器・白磁	中世
SB17	Ⅺ	2 × 2	N69° W	5.4(2.6・2.8)	5.1(2.7・2.4)	27.54	土師器・緑釉陶器	
SB18	Ⅺ	2 × 1	N79° W	2.0(1.0・1.0)	1.3	2.60	土師器	柱間北西隅から
SB19	Ⅺ	(3 × 2)	N12° E	8.0(2.6・2.5・2.9)	4.3(2.3・2.0)	34.40	土師器・緑釉陶器	調査区外に続く　古代
SB20	Ⅺ	4 × 3	N69° W	7.5(2.0・1.9・1.6・2.0)	5.2(1.6・1.8・1.8)	39.00		柱間南西隅から
SB21	Ⅻ	2 × 1	N68° W	5.0(2.5・2.5)	1.9	9.50	土師器	中世
SB22	Ⅻ	2 × 2	N23° E	4.2(1.9・2.3)	3.8(2.0・1.8)	15.96		
SB23	Ⅻ	(2 × 1)	N70° W	4.5(2.4・2.1)	1.4	6.30	土師器	柱間北東隅から 調査区外に続く可能性
SB24	Ⅻ	3 × 2	N72° W	7.4(2.6・2.6・2.2)	3.9(2.1・1.8)	28.86		柱間北東隅から
SB25	Ⅻ	2 × 2	N69° W	4.8(2.5・2.3)	4.3(2.1・2.2)	20.64		柱間南西隅から
SB26	ⅩⅢ	2 × 2	N68° W	3.2(1.9・1.3)	3.1(1.5・1.6)	9.92	土師器	
SB27	ⅩⅢ	2 × 2	N64° W	4.6(2.2・2.4)	4.2(2.1・2.1)	19.32	土師器	中世
SB28	ⅩⅢ	2 × 1	N64° W	3.8(2.1・1.7)	2.5	9.50	土師器・瓦質土器	
SB29	ⅩⅢ	2 × 1	N63° W	5.3(2.8・2.5)	1.9	10.07	土師器	
SB30	ⅩⅢ	2 × 2	N65° W	3.5(1.7・1.8)	2.7(1.8・0.9)	9.45	土師器	柱間北東隅から
SB31	ⅩⅢ	2 × 1	N65° W	4.2(2.0・2.2)	1.8	7.56	土師器	
SB32	ⅩⅢ	2 × 1	N68° W	4.7(2.3・2.4)	2.4	11.28	土師器	
SB33	ⅩⅢ	2 × 1	N69° W	3.9(2.3・1.6)	3.0	11.70		

※規模（　）は残存規模

表１　掘立柱建物跡一覧表

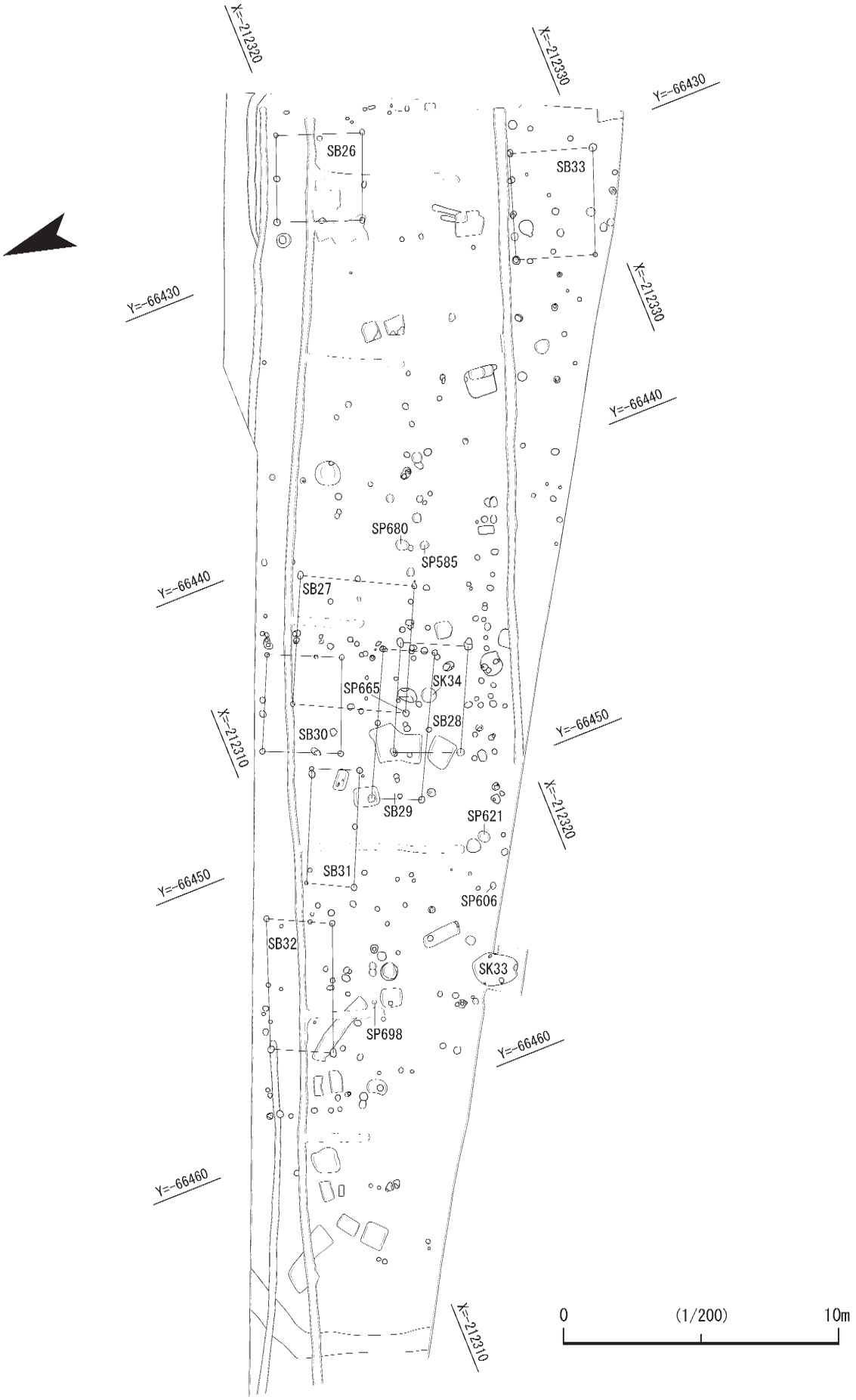


図14　畑地区遺構配置図

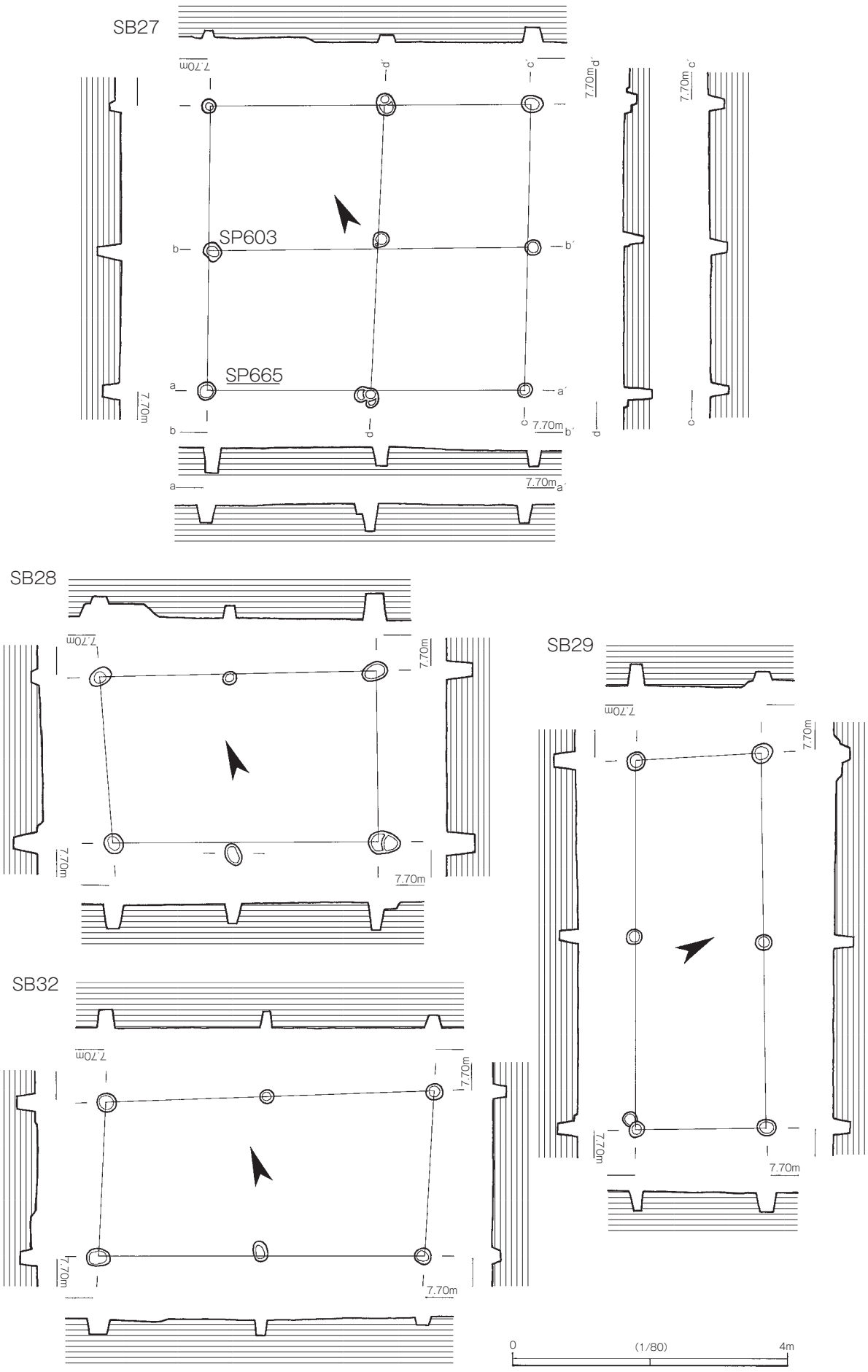


図15　Ⅻ地区検出遺構（1）

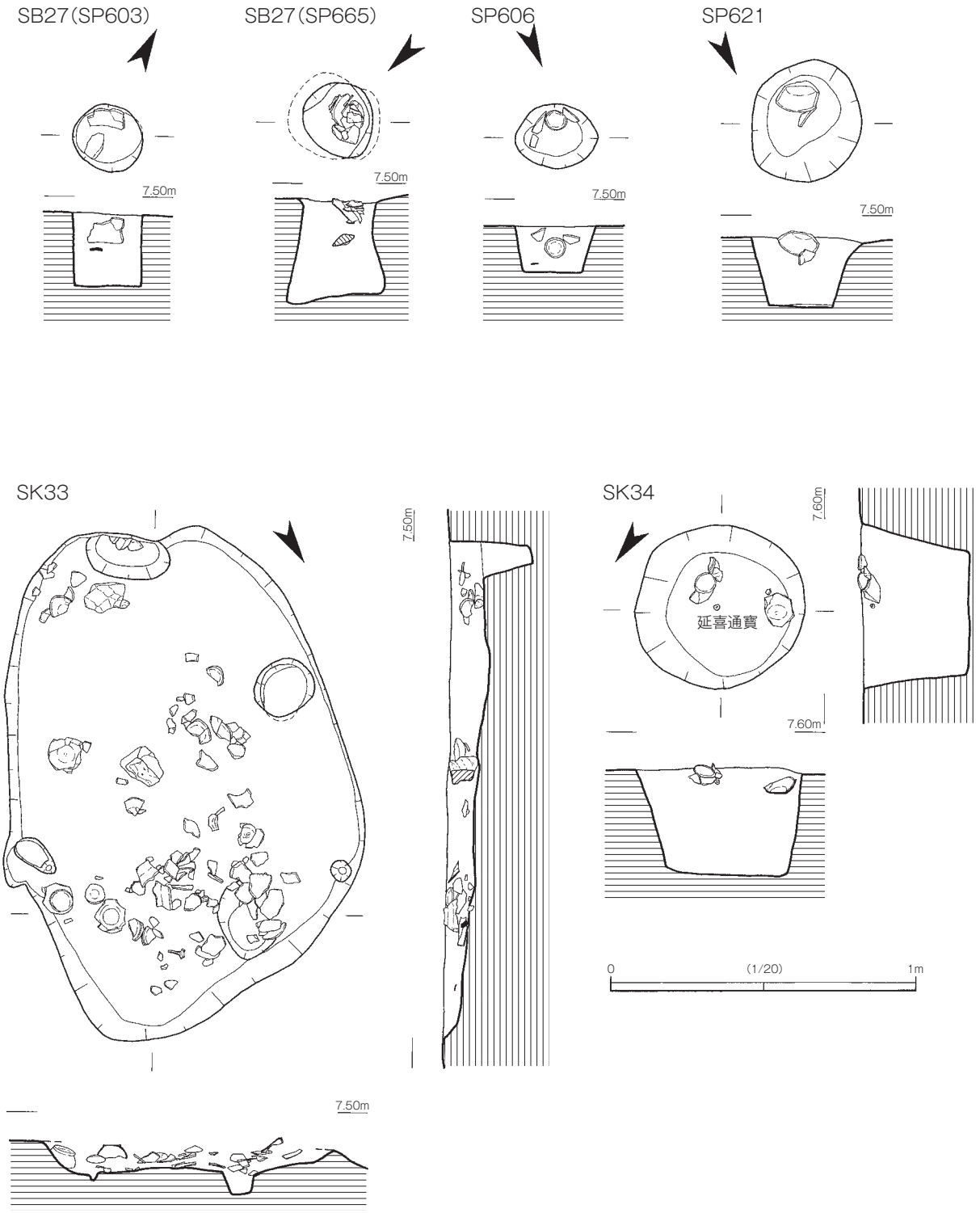


図16　Ⅻ地区検出遺構（2）

３　遺物

今回の調査では、古代～中世を中心とする遺物を得ることができた。ここでは調査区ごとにその概要について説明を行う。

（１）Ｘ地区出土遺物

１・２はSB １の各柱穴から出土したもので、１は土師器埦、２は坏であるが、口縁部分が残存しない。３～８はSP ６から出土した一括資料である。３・４は土師器埦でいずれも灰白色系の色調を呈する。５は坏であり、体部は直線的に立ち上がる。７は須恵器鉢と考えられるが、底部がほとんど残存しないため、復元した器形には疑問も残る。６・８は土師器甕で、６は口縁部が受け口状の形態を呈し、褐色系の色調であるのに対して、８は口縁部がゆるやかに外反し、灰白色系の色調を呈する。

９～30は包含層出土の土器・土製品である。９は須恵器坏身であるが、焼成不良で土師質に近い。10は青磁褐彩片で水注の胴部片になると考えられる。長沙窯系の可能性がある。11は青磁盤で、内面には条線状の彫り込みが認められる。12は青磁碗で口縁部がなめらかに外反する形態を呈す。13･14は玉縁状口縁を呈する白磁碗、15は緑釉陶器である。16は灰釉陶器の平埦で、内底面には圏線状の釉溜まりが認められる。17は須恵質の羽釜と考えられ、形態や胎土などから搬入品である可能性も否定できない。18は柱状高台の土師器埦、19は土師器埦である。20は瓦質の擂鉢、21～23は足鍋の口縁～胴部で、いずれも瓦質焼成。24～27は足鍋脚部で、24･27は瓦質、25･26は土師質である。28は瓦質の捏鉢、29は瓦質足鍋の口縁部と考えられる。30は土錘で、孔径は約0.3cm である。

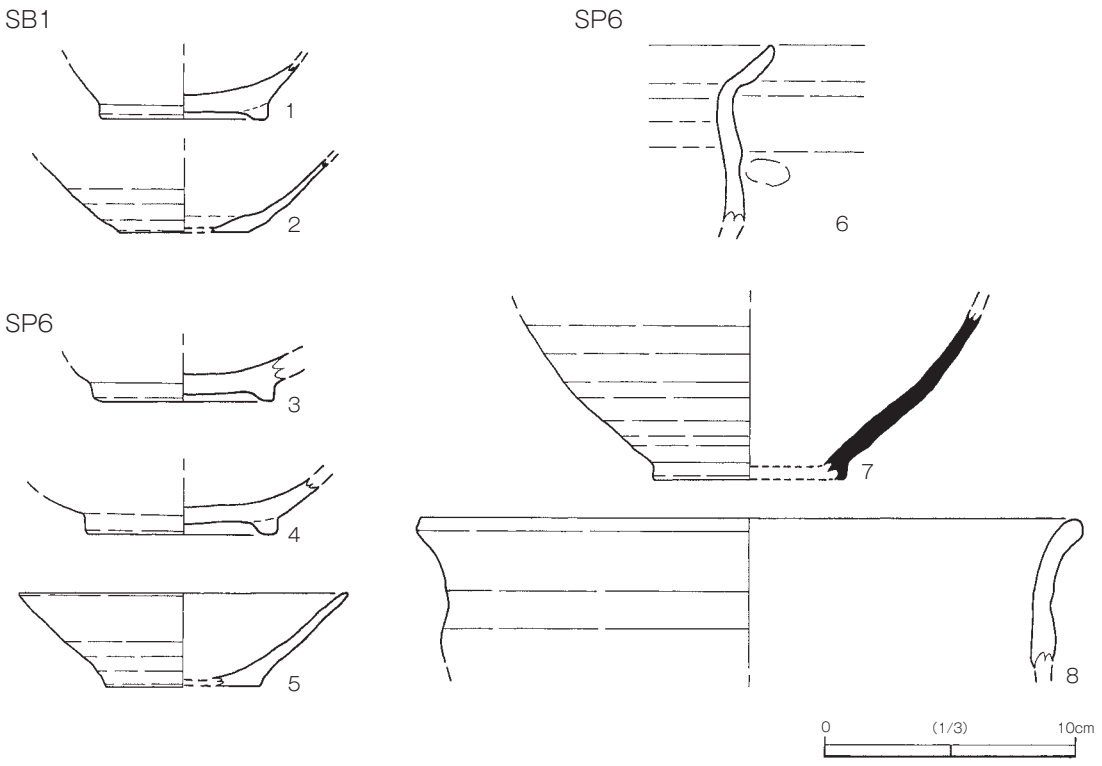


図17　Ｘ地区出土遺物（１）

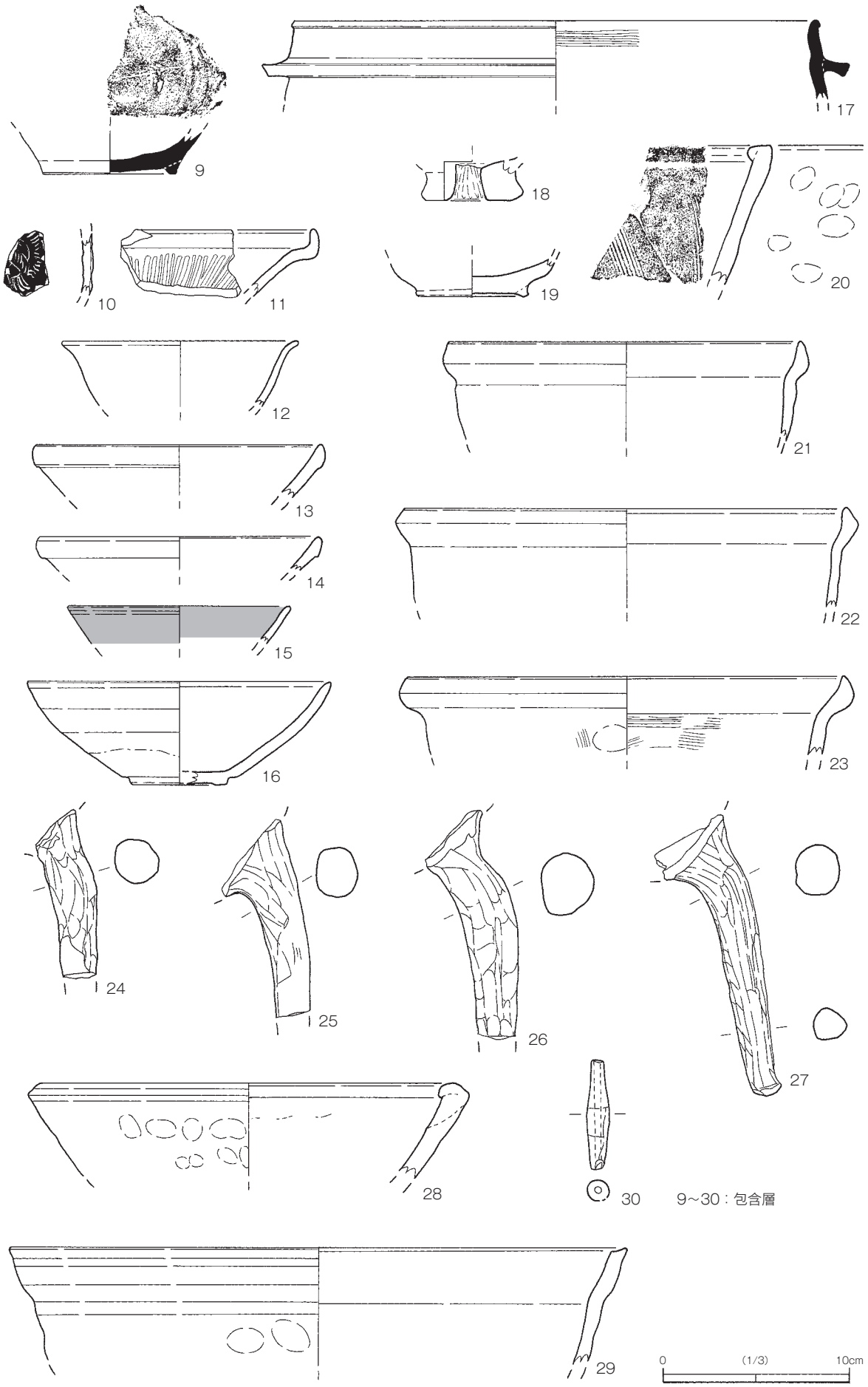


図18　X地区出土遺物（2）

（2）Ⅺ地区出土遺物

31～49は各掘立柱建物から出土した遺物である。31はSB 3から出土した緑釉陶器の皿、34はSB 4から出土した黒色土器の埦である。35～38はSB 7から出土した土器群であり、35は足鍋口縁部片で瓦質焼成、36･37は橙色系の土師器皿、38は土師質の器台口縁部と考えられる。41はSB11から出土した土師器埦で、灰白色系の色調を呈す。42･43はSB14から出土。ともに須恵器坏身で、43は口縁部がなめらかに外反する。44･45はSB15から出土したもので、44は橙色系の土師器皿、45は灰白色を呈する土師器坏である。46･47はSB16から出土。46は灰白色系の土師器坏､47は白磁碗の高台部である。48･49はSB19から出土したもので、48は土師器埦、49は土師質の甕である。

50～84は各柱穴から出土した遺物である。52･53はSP96から出土したもので、53は黒色土器埦。54･55はSP98から出土。54は橙色系の土師器坏、55は土師質の羽釜である。56･57はSP109から出土した土師器皿で両者とも灰白色を呈する。58･59はSP119から出土したもので、59は瓦質の足鍋。64はSP167から出土した土師器坏で、色調は褐灰色を呈す。68･69はSP210から出土したもので、68は灰釉陶器皿、69は土師器埦であり灰白色系の色調を呈する。73はSP265から出土した土師器坏で、灰白色系の色調を呈す。74はSP350から出土したもので、須恵器の鉢である。78～82はSP700から出土

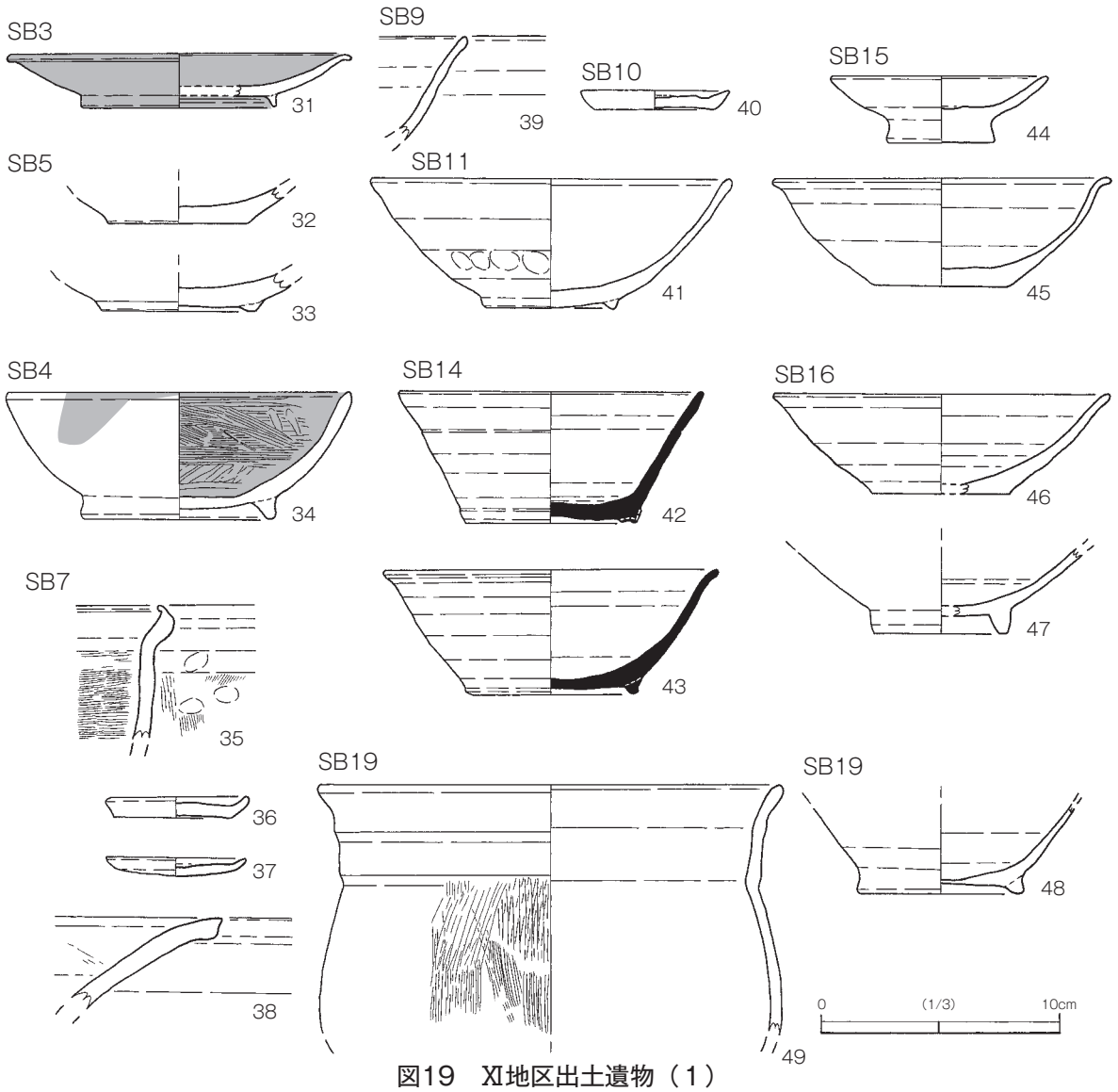


図19　Ⅺ地区出土遺物（1）

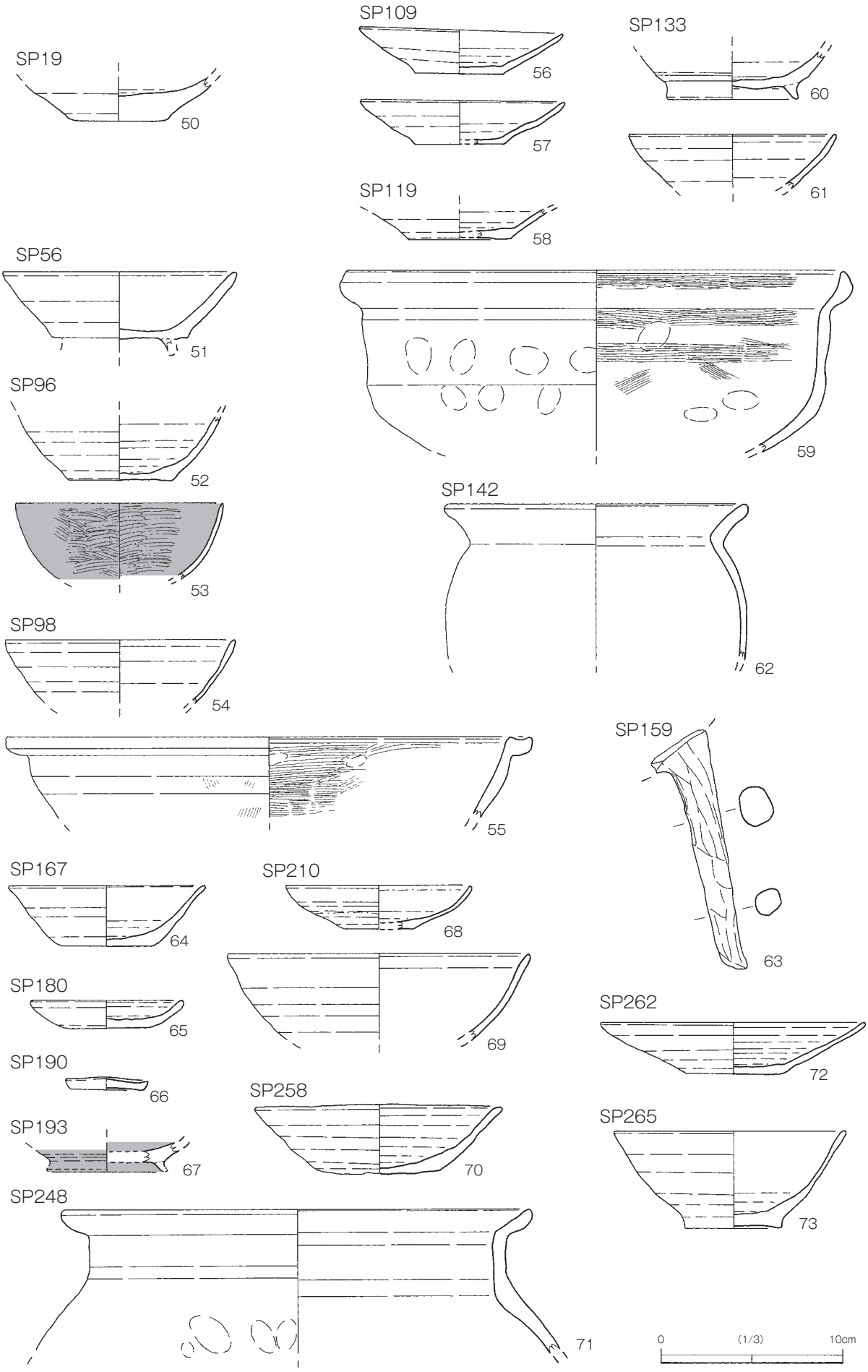


図20　Ⅺ地区出土遺物（2）

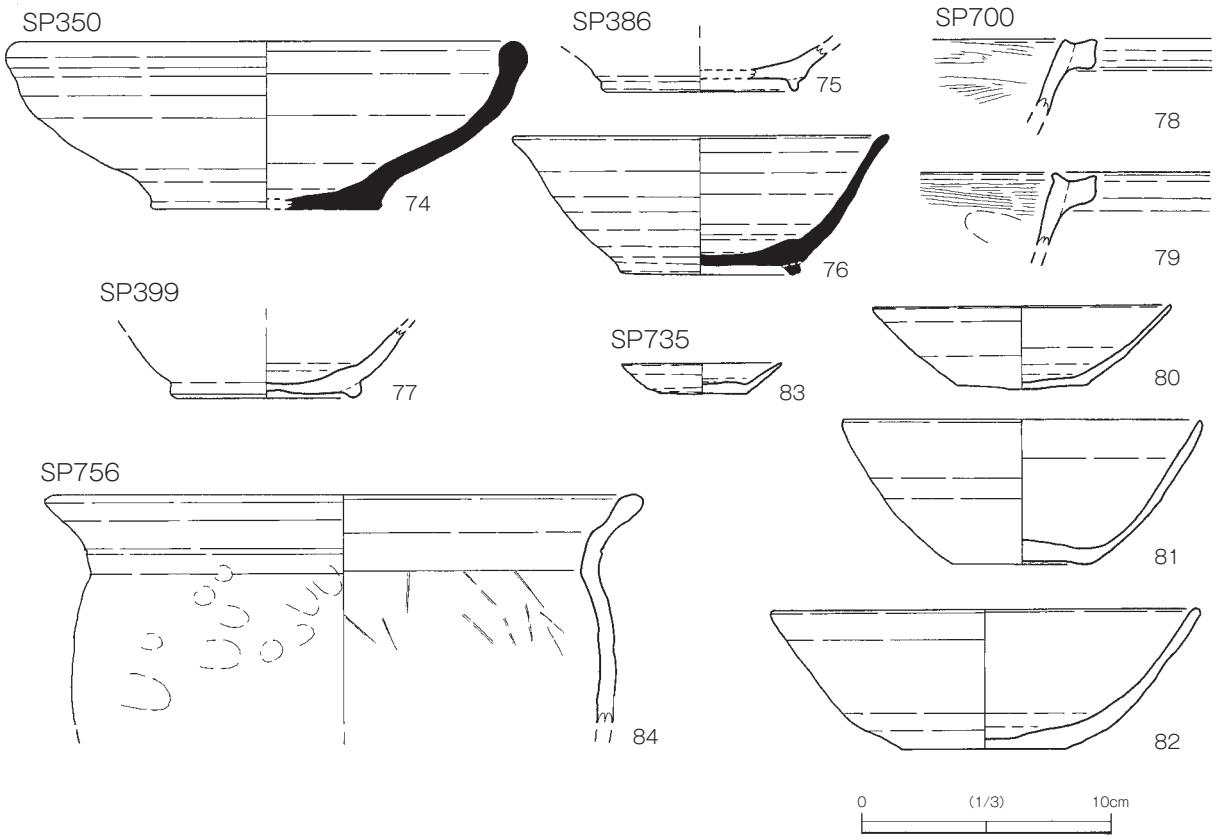


図21　XI地区出土遺物（3）

した一括資料で、80～82は灰白色系の坏であり、いずれも器壁が薄く仕上げられている。

85～101は各土坑から出土した土器である。85はSK 2から出土した灰白色系の坏。86は須恵器坏身でSK 3とSK 7から出土した破片が接合した事例である。88･89はいずれもSK14から出土した土師器皿で色調は黄橙色を呈す。93～96はSK22から出土した一括資料であり、93は土師器埦の底部、94は須恵器坏身であり、95は須恵器壺の肩部であると考えられる。98･99はSK24出土の土師器、100はSK28から出土した須恵器耳皿である。101はSK 1から出土した古墳時代の土師器甕であり、外面には刷毛目調整､内面にはケズリ痕跡が認められ､肩部付近に3条1単位のヘラ記号が施されている。

102～119は溝状遺構や性格不明遺構から出土した遺物である｡107～109の擂鉢はいずれも瓦質焼成。112は緑釉陶器の埦と考えられる。114は須恵器の小壺、118･119の羽釜はいずれも瓦質土器である。

120～141は包含層から出土した遺物である。125～127は緑釉陶器で、127は内・外底面ともにトチンの接地痕が確認される。135は土師質の鉢と考えられるが、形態や胎土などから在地のものではない可能性もある。138は支脚状土製品､139は柱状高台付皿である。140は土錘で､孔径約0.3cmを測る。足鍋は136が土師質で、137は瓦質である。141は土師質の大型鍋で復元口径53.6cmを測る。

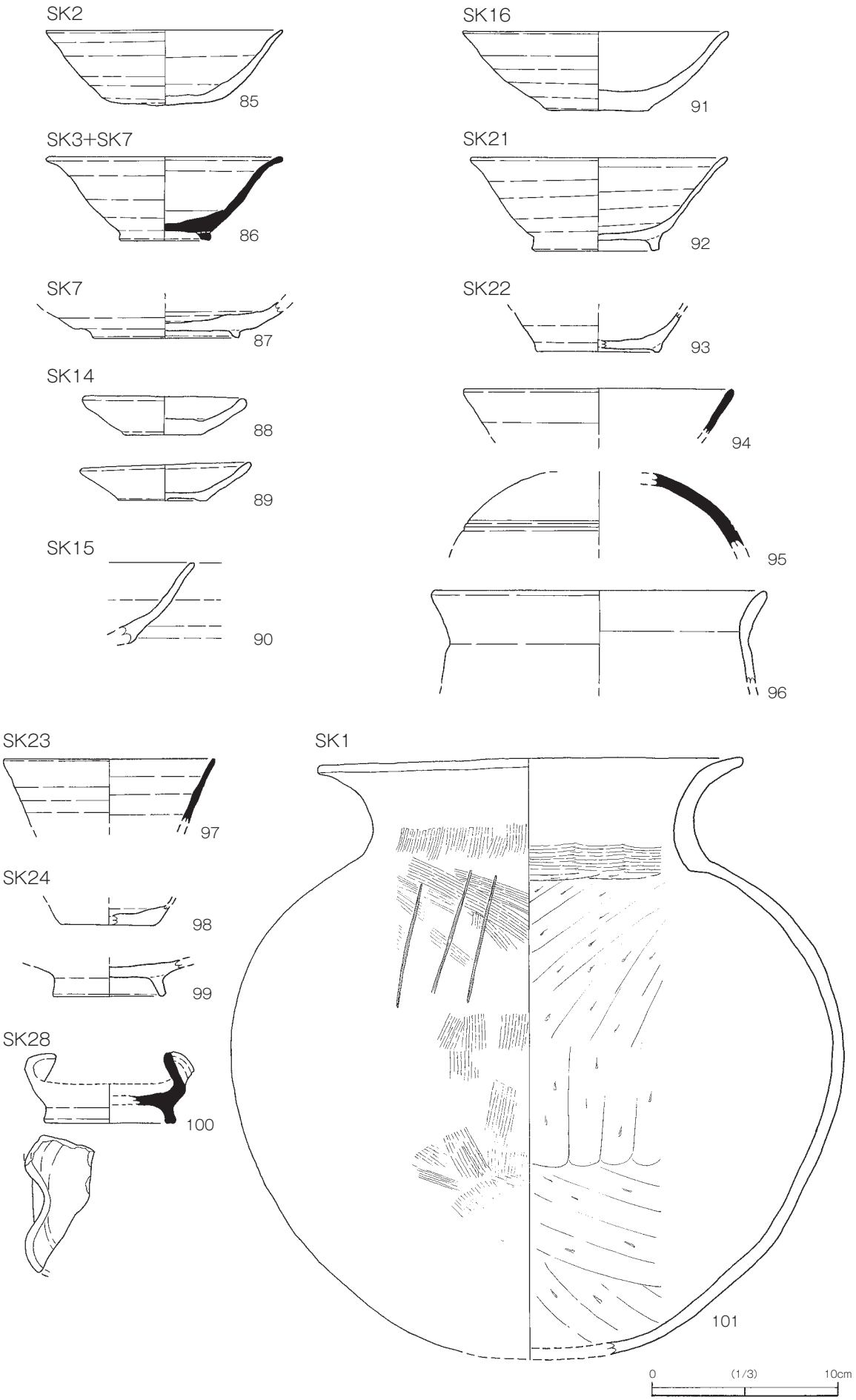


図22　Ⅺ地区出土遺物（4）

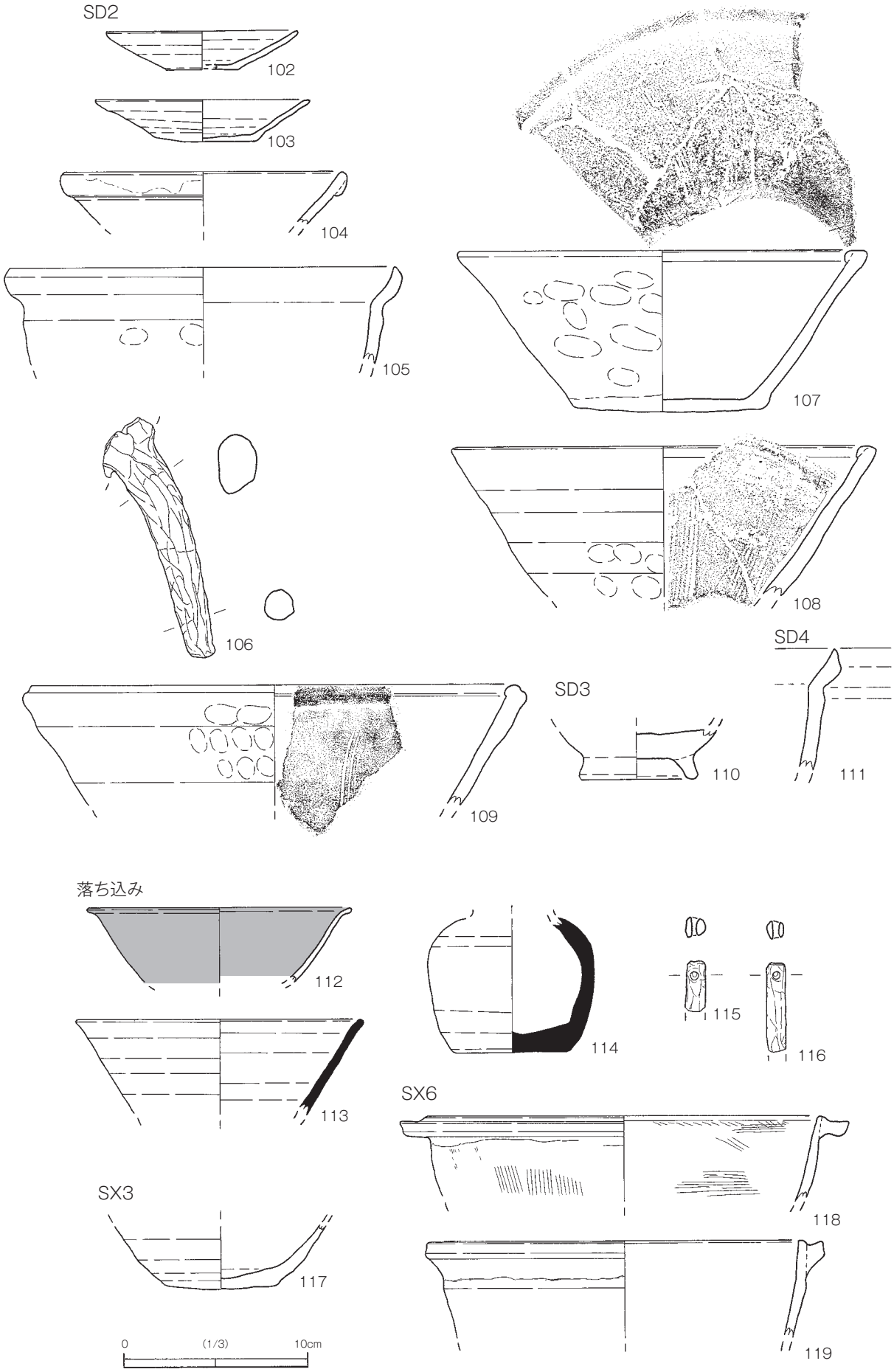


図23　Ⅺ地区出土遺物（5）

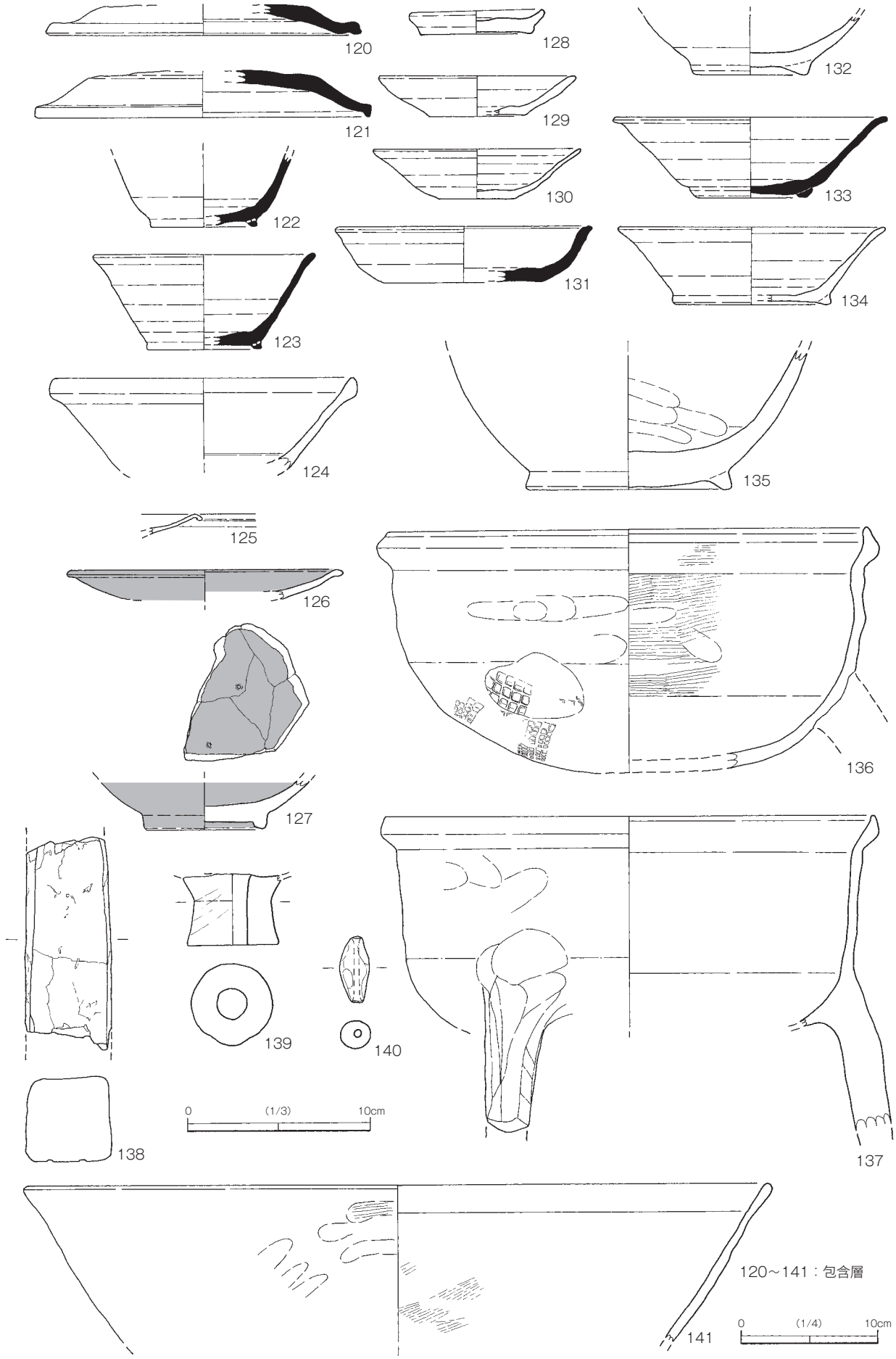


図24　XI地区出土遺物（6）

（3）Ⅻ地区出土遺物

142･143はSB21を構成する柱穴から出土した土師器である。142は橙色系の色調を呈する皿で器壁が比較的厚い。143は橙色系の色調を呈し、口縁部はなめらかに外反する。底部を欠くが、埦と考えられる。

144はSP403から、145はSP492から出土した土師器皿であり、いずれも浅い黄橙色を呈する。146はSP435から出土した足鍋脚部で、土師質である。147はSP462から出土した土師器坏の底部で、色調は灰白色を呈する。148～150はSP475から出土した一括資料で、いずれも橙色系の色調を呈する土師器坏である。

151～163は溝状遺構から出土した遺物である。153は龍泉窯系の青磁片であり、152の土師器坏とともにSD 7から出土した。154･159は須恵器で、154は甕の頸部、159は大甕の口縁部である。156は土師器埦で、内外面ともに灰色系の色調を呈し、内面には丁寧なミガキ痕跡が認められる。

164～170は包含層出土の遺物である。166は瓦質土器の甕口縁部で、内面には平行タタキの痕跡がわずかに認められる。167は備前系甕の口縁部、168は土師質の足鍋である。169･170は土錘で、169は孔径約0.4cm、170は孔径0.4～0.5cmを測る。

（4）Ⅻ地区出土遺物

171～176はSB27の各柱穴から出土した遺物である。171は土師器埦と考えられ、172･173は土師質の鍋である。174･175は土師器坏で、若干橙色味を帯びた色調を呈す。176は橙色系の土師器埦である。

177～192は各柱穴から出土した遺物である。177～179はSP565から出土したもので、179は東播系の鉢である。180･181はSP566より出土したもので、前者は橙色系、後者は灰白色系の色調を呈す。186･187はSP621から出土。186は土師器坏で橙色系の色調を呈し、187は灰白色系の土師器埦である。188はSP649から出土した土師質の羽釜であり、191はSP698から出土した灰白色系の土師器埦である。

193～209はSK33出土の遺物である。193～195は土師器坏で、いずれも淡橙色系の色調を呈するが、195は外底面に炭素が吸着しており、黒色化している。197～202は埦の底部で、いずれも外側へ強く張り出す高台形状である。203は全形が窺える資料で、内湾気味に立ち上がる体部形態を呈し、灰白

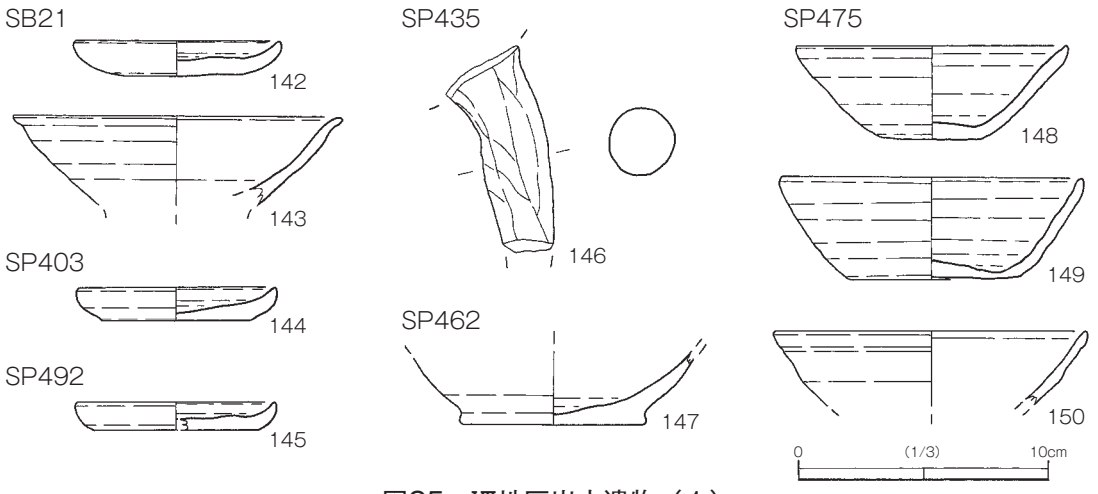


図25　Ⅻ地区出土遺物（1）

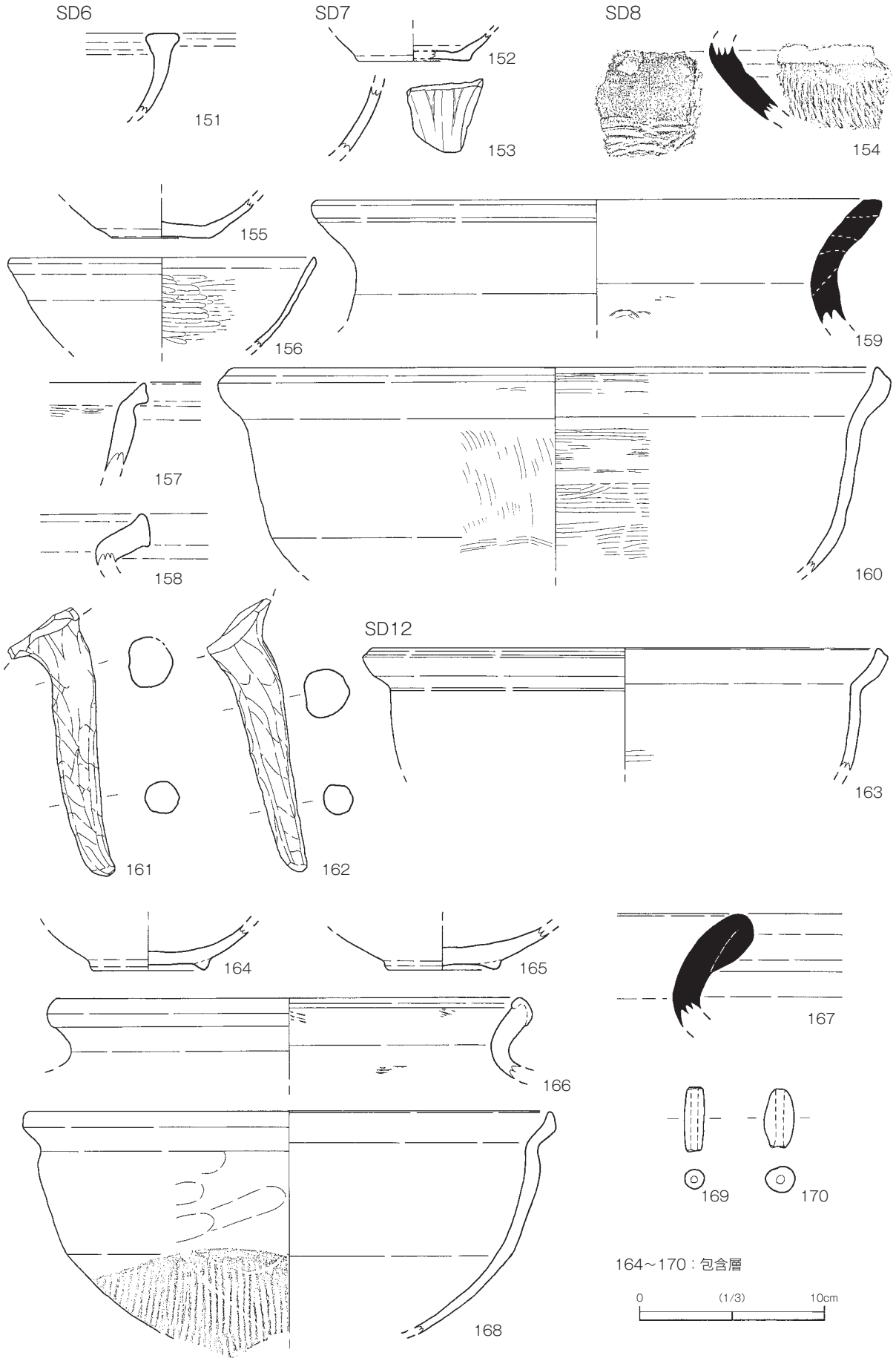


図26　Ⅻ地区出土遺物（2）

色系の色調である。204～206は土師質の甕で、205の口縁部付近には緑釉が付着しており、色見の可能性もある。207～209は三叉トチンで、いずれも先端部に緑釉が付着している。210･211はSK34から出土した土師器埦であり、両者とも淡灰色系の色調を呈する。なお、これらの土器は図29－213に示した延喜通寶と共伴した。212はSD14から出土した瓦質土器の鍋である。

（5）各地区出土の金属・石製品

213はⅫ地区SK34から出土した延喜通寶（初鋳:907年）である。214は残存状態が悪く、文字も判読できないが、大きさからみて延喜通寶であると考えられる。Ⅻ地区のSP555から出土した。215～217は輸入銭で、いずれも遺物包含層から出土した。215は紹聖元寶、216は皇宋元寶、217は永楽通寶である。218～221は煙管。

222は縄文時代の玦状耳飾で、SB14の構成柱穴であるSP352より出土した。淡緑色の色調を呈し、石材は翡翠の可能性もある。223も玦状耳飾の可能性が高い。Ⅻ地区包含層からの出土で、滑石製である。224は石帯の一部で黒色粘板岩製。Ⅺ地区包含層から出土した。225は弥生時代の扁平片刃石斧、226は縄文時代の所産と考えられる磨製石斧、227は磨石である。228･229は滑石製の石鍋。

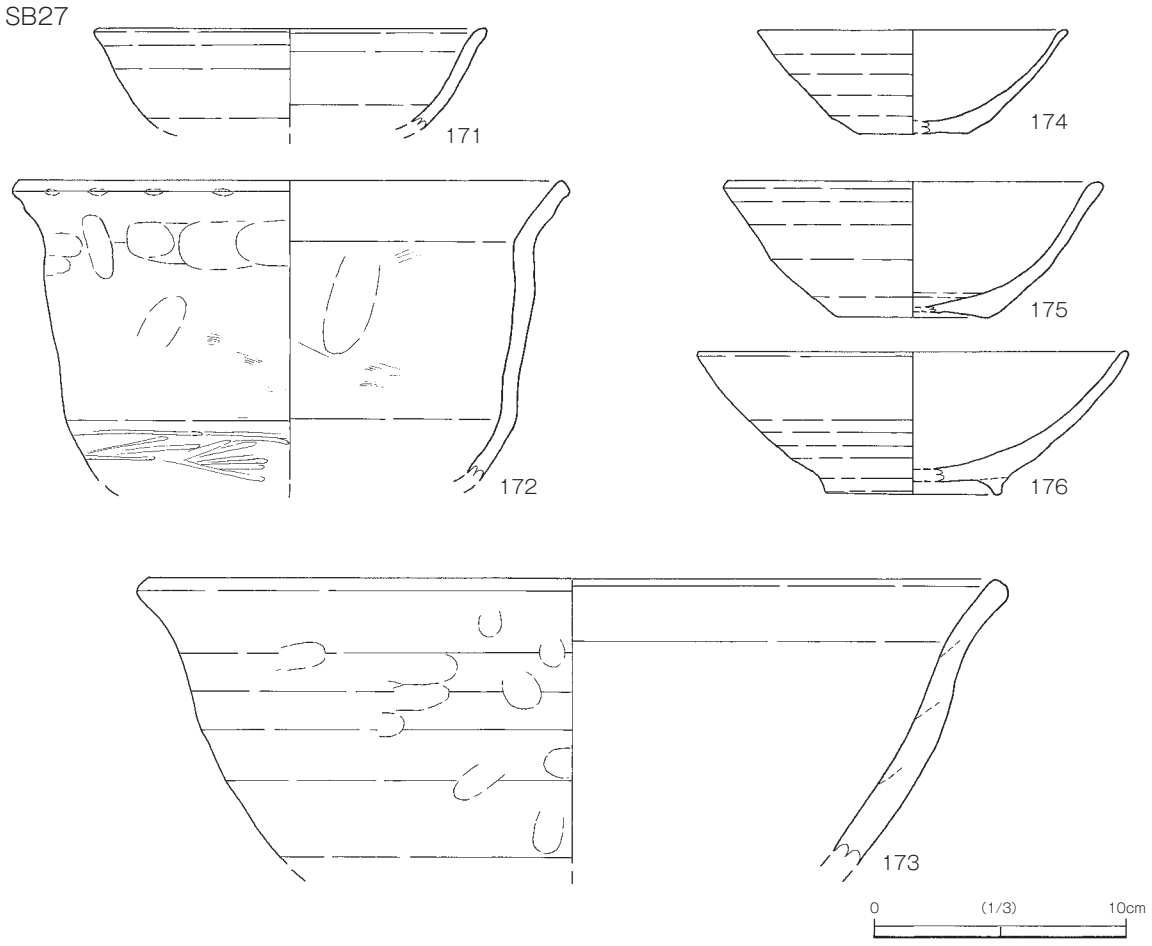


図27　Ⅻ地区出土遺物（1）

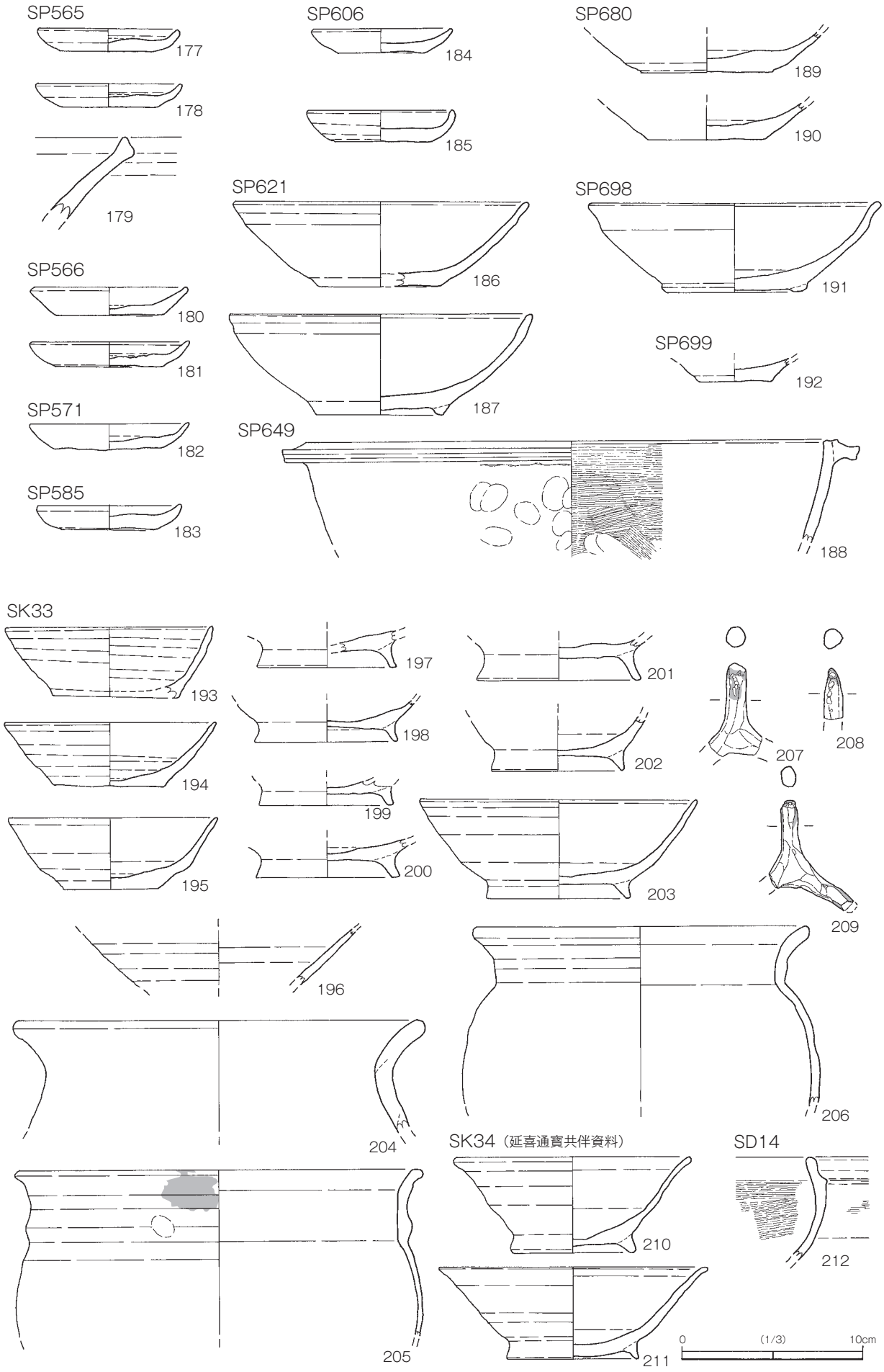
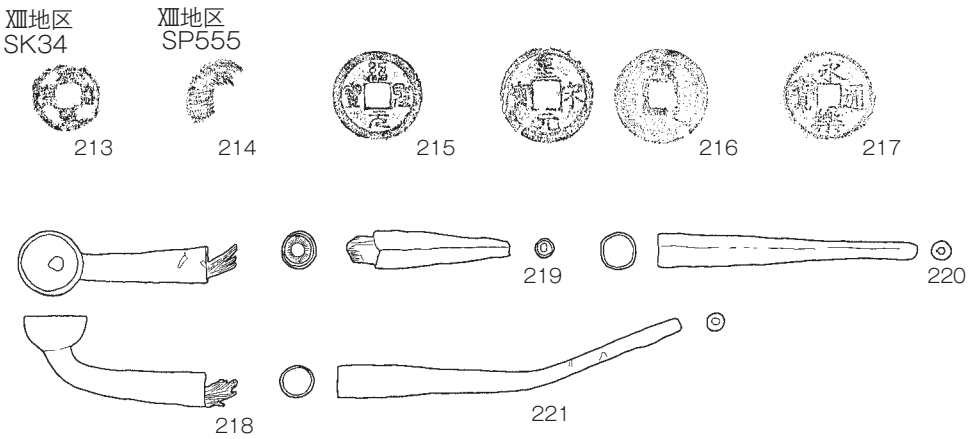
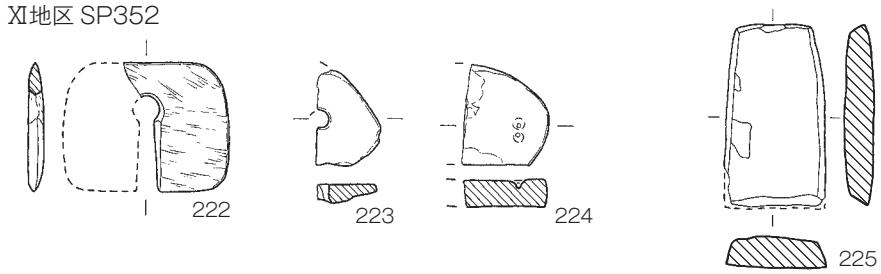


図28　Ⅻ地区出土遺物（2）





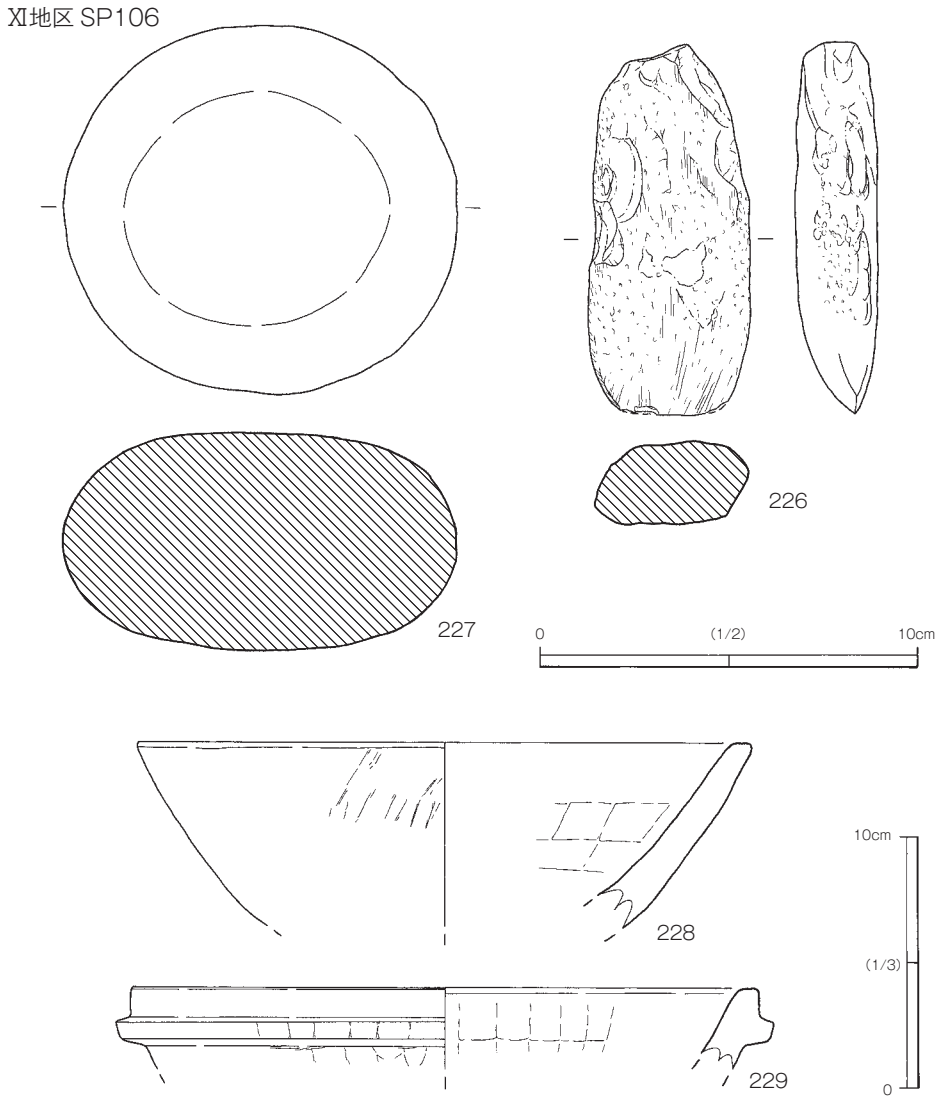


図29　各地区出土金属製品・石製品

表２　出土土器・土製品観察表

番号	地区	遺構	種別	器種	法量(cm)(復元値)			胎土		焼成	色調		調整	
					口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面	内面	外面
1	X	SB 1 (SP 3)	土師器	埦	−	2.2残	6.6	密	少量	軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
2	X	SB 1 (SP10)	土師器	坏	−	2.9残	(5.0)	密	多量	やや硬質	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ
3	X	SP 6	土師器	埦	−	1.9残	7.0	密	多量	やや硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ後 横ナデ	回転ナデ
4	X	SP 6	土師器	埦	−	2.3残	7.4	密	多量	軟質	浅黄橙色	灰白色	回転ナデ後 横ナデ	磨滅
5	X	SP 6	土師器	坏	(13.0)	3.7	(6.0)	やや粗い	多量	やや硬質	灰白色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ
6	X	SP 6	土師器	甕	−	7.0残	−	粗い	極多量	硬質	明褐灰色	赤灰色	ナデ、 ヘラ削り	横ナデ
7	X	SP 6	須恵器	鉢？	−	6.7残	(7.4)	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
8	X	SP 6	土師器	甕	(26.0)	5.9残	−	やや密	多量	やや硬質	灰白色	灰白色	横ナデ	横ナデ
9	X	包含層	須恵器	坏	−	2.3残	(7.2)	やや粗い	多量	やや硬質	灰赤色	黄灰色	回転ナデ	回転ナデ
10	X	包含層	青磁褐彩	水注	ー	3.3残	−	密	含まない	やや硬質	灰黄色	黒褐色	回転ナデ	型押し文様
11	X	包含層	青磁	盤	(20.8)	3.5残	−	密	少量	硬質	暗オリーブ色	暗オリーブ色	回転ナデ、 ヘラ削り	回転ナデ
12	X	包含層	青磁	碗	(12.6)	5.5残	−	やや粗い	少量	硬質	胎土 灰白色	釉 オリーブ灰色	回転ナデ	回転ナデ
13	X	包含層	白磁	碗	(15.2)	2.8残	−	やや粗い	含まない	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
14	X	包含層	白磁	碗	(15.2)	1.8残	−	やや粗い	含まない	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
15	X	包含層	緑釉陶器	埦	(11.9)	2.0残	−	やや粗い	少量	やや硬質	胎土 灰白色	釉 灰白色	回転ナデ	回転ナデ
16	X	包含層	灰釉陶器	埦	(17.0)	(11.0)	(4.6)	粗い	少量	硬質	胎土 灰白色	釉 オリーブ黄色	回転ナデ	回転ナデ
17	X	包含層	須恵器	羽釜	(28.0)	4.3残	−	やや粗い	やや多い	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、 ハケ目	回転ナデ、 ナデ
18	X	包含層	土師器	柱状高台埦	−	2.1残	4.5	密	多量	やや硬質	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ
19	X	包含層	土師器	埦	−	2.0残	6.0	密	含まない	軟質	浅黄橙色	灰白色	丁寧なナデ	回転ナデ、 糸切り後ナデ
20	X	包含層	瓦質土器	擂鉢	−	7.4残	−	やや粗い	多量	硬質	青灰色	青灰色	ナデ、 7条擂目	ナデ
21	X	包含層	瓦質土器	足鍋	(18.6)	5.2残	−	粗い	多量	硬質	灰色	にぶい黄褐色	横ナデ	横ナデ
22	X	包含層	瓦質土器	足鍋	(23.8)	5.2残	−	粗い	やや多い	硬質	灰色	灰色	横ナデ	横ナデ
23	X	包含層	瓦質土器	足鍋	(23.2)	4.1残	−	粗い	多量	硬質	灰白色	灰白色	横ハケ後 ナデ	ハケ後ナデ
24	X	包含層	瓦質土器	足鍋(脚)	−	9.0残	−	密	多量	やや硬質	灰白色	灰白色	指ナデ	指ナデ
25	X	包含層	土師質土器	足鍋(脚)	−	11.0残	−	密	多量	硬質	にぶい橙色	褐灰色	指ナデ	指ナデ
26	X	包含層	土師質土器	足鍋(脚)	−	12.2残	−	密	多量	硬質	浅黄色	灰黄色	指ナデ	指ナデ
27	X	包含層	瓦質土器	足鍋(脚)	−	15.1残	−	粗い	多量	硬質	灰白色	灰色	指ナデ	指ナデ
28	X	包含層	瓦質土器	捏鉢	(12.2)	5.0残	−	やや粗い	やや多い	硬質	灰色	灰色	丁寧なナデ	指圧え後 横ナデ
29	X	包含層	瓦質土器	足鍋	(33.0)	6.2残	−	やや粗い	多量	やや硬質	暗灰色	暗灰色	横ナデ	横ナデ
30	X	包含層	土製品	土錘	径1.2	長さ5.8	孔径0.3	密	含まない	硬質	灰白色	灰白色	−	丁寧なナデ
31	XI	SB 3 (SP725)	緑釉陶器	皿	(14.6)	2.2	(8.3)	密	少量	硬質	胎土 灰白色	釉 緑色	回転ナデ	回転ナデ
32	XI	SB 5 (SP27)	土師器	坏	−	1.5残	5.8	密	多量	やや硬質	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ、 ナデ	回転ナデ、 回転糸切り
33	XI	SB 5 (SP27)	土師器	埦	−	1.7残	6.5	密	多量	やや硬質	褐灰色	明褐灰色	回転ナデ、 丁寧なナデ	回転ナデ
34	XI	SB 4 (SP30)	黒色土器	埦	(14.3)	5.4	8.0	やや粗い	多量	硬質	黒色	灰白色	回転ナデ後 ミガキ	磨滅

番号	地区	遺構	種別	器種	法量(cm)(復元値)			胎土		焼成	色調		調整	
					口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面	内面	外面
35	XI	SB 7 (SP730)	瓦質土器	足鍋	−	5.6残	−	やや粗い	少量	硬質	灰白色	灰白色	横ハケ、横ナデ	縦ハケ後ナデ
36	XI	SB 7 (SP144)	土師器	皿	5.8	0.9	4.9	密	少量	硬質	淡橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、糸切り後ナデ
37	XI	SB 7 (SP144)	土師器	皿	(5.8)	0.8	(4.8)	密	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ、糸切り、板目圧痕
38	XI	SB 7 (SP144)	土師質土器	器台？	−	(3.9)	−	粗い	多量	硬質	灰褐色	にぶい橙色	ハケ後ナデ	横ナデ、ナデ
39	XI	SB 9 (SP52)	土師器	坏？	−	4.3残	−	やや粗い	極多量	硬質	褐灰色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
40	XI	SB10(SP371)	土師器	皿	(6.2)	0.8	(5.0)	やや粗い	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、回転糸切り
41	XI	SB11(SP359)	土師器	埦	(15.1)	5.4	(5.4)	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、丁寧なナデ	指圧え後回転ナデ
42	XI	SB14(SP361)	須恵器	坏身	(12.8)	5.5	7.2	やや粗い	やや多い	硬質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ
43	XI	SB14(SP702)	須恵器	坏身	(14.1)	5.2	7.3	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
44	XI	SB15(SP301)	土師器	皿	(9.2)	2.8	4.5	密	多量	極めて硬質	浅黄橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
45	XI	SB15(SP301)	土師器	坏	14.2	4.6	5.4	密	少量	やや硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
46	XI	SB16(SP332)	土師器	坏	(14.0)	4.2	(5.8)	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
47	XI	SB16(SP388)	白磁	碗	−	3.6残	(5.8)	密	少量	硬質	胎土灰白色	釉灰白色	回転ナデ	ヘラ削り
48	XI	SB19(SP323)	土師器	埦	−	3.8残	6.8	やや粗い	少量	硬質	明褐灰色	明褐灰色	回転ナデ	回転ナデ、糸切り後ナデ
49	XI	SB19(SP349)	土師質土器	甕	(19.4)	10.4残	−	やや粗い	少量	やや硬質	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	横ナデ、ナデ	縦ハケ、横ナデ
50	XI	SP19	土師器	坏	−	2.4残	(5.4)	密	少量	軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、板目圧痕
51	XI	SP56	土師器	埦	(12.8)	4.4残	−	密	多量	硬質	灰白色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ
52	XI	SP96	土師器	坏	−	3.6残	5.6	やや密	多量	やや硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
53	XI	SP96	黒色土器	埦	(11.4)	4.1残	−	密	やや多い	硬質	黒色	黒色	密なヘラミガキ	密なヘラミガキ
54	XI	SP98	土師器	坏	(12.6)	3.5残	−	やや粗い	含まない	硬質	にぶい橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ
55	XI	SP98	土師質土器	羽釜	(28.8)	4.5残	−	やや粗い	少量	硬質	にぶい橙色	にぶい赤褐色	横ハケ	縦ハケ後ナデ
56	XI	SP109	土師器	皿	11.0	2.5	4.8	密	極少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ ナデ	回転ナデ、糸切り、板目圧痕
57	XI	SP109	土師器	皿	11.0	2.5	4.8	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ ナデ	回転ナデ、回転糸切り
58	XI	SP119	土師器	皿	−	1.7残	(5.6)	やや粗い	やや多い	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ ナデ	回転ナデ、糸切り、板目圧痕
59	XI	SP119	瓦質土器	足鍋	(27.0)	9.9残	−	粗い	やや多い	硬質	灰色	灰白色	横ハケ後横ナデ	指圧さえ、ナデ
60	XI	SP133	土師器	埦	−	2.6残	7.1	やや粗い	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ ナデ	回転ナデ
61	XI	SP133	土師器	坏？	(11.3)	2.9残	−	やや粗い	やや多い	極めて硬質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ
62	XI	SP142	土師質土器	甕	(16.6)	8.5残	−	粗い	極多量	硬質	明褐灰色	灰白色	ナデ	ナデ
63	XI	SP159	土師質土器	足鍋(脚)	−	12.5残	−	粗い	やや多い	硬質	浅黄橙色	褐灰色	指ナデ	指ナデ
64	XI	SP167	土師器	坏	(10.8)	3.3	5.0	やや粗い	多量	硬質	褐灰色	褐灰色	回転ナデ	回転ナデ、糸切り後ナデ
65	XI	SP180	土師器	皿	(8.4)	1.6	4.8	密	極少量	硬質	灰白色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
66	XI	SP190	土師器	皿	4.6	0.7	4.1	やや粗い	やや多い	硬質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
67	XI	SP193	緑釉陶器	埦	−	1.6残	(6.6)	密	極少量	硬質	胎土灰白色	釉緑色	回転ナデ	回転ナデ
68	XI	SP210	灰釉陶器	皿	(10.2)	2.4残	(3.8)	密	少量	硬質	胎土灰白色	釉灰黄色	回転ナデ	回転ナデ

番号	地区	遺構	種別	器種	法量(cm)(復元値)			胎土		焼成	色調		調整	
					口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面	内面	外面
69	XI	SP210	土師器	埦	(16.6)	4.7残	−	密	少量	やや硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
70	XI	SP258	土師器	坏	13.6	3.8	6.8	密	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、糸切り、板目
71	XI	SP248	土師質土器	甕	(25.5)	7.9残	−	粗い	多量	硬質	灰白色	灰褐色	指ナデ、ヘラナデ	ナデ、指圧さえ後ナデ
72	XI	SP262	土師器	皿	(14.5)	2.8	5.3	極密	やや多い	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、糸切り後ナデ
73	XI	SP265	土師器	坏	(12.7)	5.3	5.3	やや粗い	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、糸切り後ナデ
74	XI	SP350	須恵器	鉢	(19.6)	6.6	(8.8)	密	少量	硬質	灰色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
75	XI	SP386	土師器	埦	−	1.8残	(7.4)	やや粗い	やや多い	やや硬質	灰黄色	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ、ナデ
76	XI	SP386	須恵器	坏身	(14.8)	5.5	7.1	やや粗い	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、ナデ
77	XI	SP399	土師器	埦	−	2.8残	7.0	やや粗い	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
78	XI	SP700	土師質土器	羽釜	−	2.9残	−	密	極少量	硬質	灰白色	灰黄褐色	横ハケ	横ナデ
79	XI	SP700	土師質土器	羽釜	−	3.0残	−	密	極少量	硬質	灰黄褐色	褐灰色	横ハケ後ナデ	ナデ
80	XI	SP700	土師器	坏	(11.7)	3.3	(5.2)	密	少量	硬質	にぶい橙色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、糸切り、板目圧痕
81	XI	SP700	土師器	坏	(14.1)	5.7	5.4	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
82	XI	SP700	土師器	坏	(16.8)	5.5	(6.4)	密	少量	硬質	黄灰色	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ、糸切り後ナデ
83	XI	SP735	土師器	皿	6.3	1.2	3.5	密	極少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、糸切り、板目
84	XI	SP756	土師質土器	甕	(23.6)	9.0残	−	密	極多量	硬質	明褐灰色	灰白色	ナデ、ヘラナデ	ナデ、指圧さえ後ナデ
85	XI	SK 2	土師器	坏	(12.6)	4.0	6.5	やや密	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、ナデ、板目圧痕
86	XI	SK 3 ・ 7	須恵器	坏身	(12.6)	5.5	(4.8)	極密	やや多い	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ削り
87	XI	SK 7	土師器	皿？	−	1.9残	(7.8)	密	多量	硬質	にぶい褐色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ、ナデ
88	XI	SK14	土師器	皿	8.7	2.1	4.1	密	少量	硬質	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
89	XI	SK14	土師器	皿	9.1	2.1	4.6	密	多量	硬質	浅黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、糸切り、板目圧痕
90	XI	SK15	土師器	埦？	−	4.3残	−	やや粗い	多量	やや硬質	灰白色	明褐灰色	回転ナデ	回転ナデ
91	XI	SK16	土師器	坏	(14.1)	5.2	5.4	密	少量	硬質	浅黄橙色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
92	XI	SK21	土師器	埦	13.6	5.0	6.7	密	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、板目圧痕
93	XI	SK22	土師器	埦	−	2.2残	(6.6)	やや粗い	多量	やや硬質	灰白色	明褐灰色	回転ナデ	回転ナデ、ナデ
94	XI	SK22	須恵器	坏身	(14.3)	2.4	−	やや粗い	多量	硬質	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ、沈線
95	XI	SK22	須恵器	壺？	−	4.0残	−	密	少量	硬質	灰白色	灰色	回転ナデ	回転ナデ
96	XI	SK22	土師質土器	甕	(17.6)	5.0残	−	やや粗い	多量	硬質	にぶい赤橙色	にぶい橙色	横ナデ	横ナデ
97	XI	SK23	須恵器	坏	(11.2)	3.4残	−	密	やや多い	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
98	XI	SK24	土師器	坏	−	1.1残	(4.9)	密	少量	やや硬質	黄灰色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
99	XI	SK24	土師器	埦	−	2.0残	(6.0)	密	やや多い	やや硬質	暗灰色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、ナデ
100	XI	SK28	須恵器	耳皿	(9.0)	3.7	(7.0)	やや粗い	多量	硬質	明青灰色	青灰色	回転ナデ	回転ナデ
101	XI	SK 1	土師器	甕	22.5	31.8残	−	密	多量	硬質	橙色	にぶい橙色	横ナデ、ケズリ	縦ハケ、ヘラ記号

番号	地区	遺構	種別	器種	法量(cm)(復元値)			胎土		焼成	色調		調整	
					口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面	内面	外面
102	XI	SD 2	土師器	皿	(10.2)	2.05	(3.9)	やや粗い	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、糸切り、板目
103	XI	SD 2	土師器	皿	11.5	2.25	5.5	密	やや多い	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、板目圧痕
104	XI	SD 2	白磁	碗	(14.9)	2.9残	−	やや粗い	含まない	硬質	胎土 灰白色	釉 灰白色	回転ナデ	回転ナデ、ヘラナデ
105	XI	SD 2	土師質土器	足鍋	(20.6)	5.2残	−	密	多量	硬質	灰黄褐色	灰黄褐色	丁寧なナデ	指圧さえ後ナデ
106	XI	SD 2	瓦質土器	足鍋(脚)	−	13.4残	−	密	多量	硬質	灰白色	灰色	指圧え、指ナデ	指圧さえ、指ナデ
107	XI	SD 2	瓦質土器	擂鉢	(22.0)	8.6	10.4	粗い	多量	やや硬質	灰白色	灰白色	丁寧なナデ、7条擂目	指圧さえ後ナデ
108	XI	SD 2	瓦質土器	擂鉢	(22.8)	8.0残	−	密	多量	硬質	灰白色	灰白色	丁寧なナデ、7条擂目	指圧さえ後ナデ
109	XI	SD 2	瓦質土器	擂鉢	(26.0)	6.4残	−	粗い	多量	硬質	黒色	暗灰色	丁寧なナデ、擂目	指圧さえ後ナデ
110	XI	SD 3	土師器	埦	−	2.7残	6.1	密	やや多い	軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
111	XI	SD 4	土師質土器	足鍋	−	6.5残	−	やや粗い	多量	硬質	黄褐色	灰白色	丁寧なナデ	横ナデ、指圧さえ後ナデ
112	XI	不整形落ち込み	緑釉陶器	埦？	(14.2)	4.0残	−	密	含まない	やや硬質	胎土 灰白色	釉 緑色	回転ナデ	回転ナデ
113	XI	不整形落ち込み	須恵器	坏	(15.4)	5.1残	−	やや粗い	多量	硬質	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ
114	XI	不整形落ち込み	須恵器	小壺	−	7.2残	6.2	やや粗い	やや多い	硬質	灰色	灰色	回転ナデ	ヘラナデ？
115	XI	不整形落ち込み	土製品	土錘	径1.1	2.8残	孔径0.2	やや粗い	多量	硬質	橙色	橙色	指ナデ	指ナデ
116	XI	不整形落ち込み	土製品	土錘	径1.0	4.8残	孔径0.3	密	多量	硬質	にぶい赤橙色	赤灰色	丁寧なナデ	丁寧なナデ
117	XI	SX 3	土師器	坏	−	3.4残	(6.0)	密	多量	やや硬質	褐灰色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
118	XI	SX 6	瓦質土器	羽釜	(21.0)	4.6残	−	密	少量	やや硬質	灰色	暗灰色	横ハケ後横ナデ	縦ハケ後横ナデ
119	XI	SX 6	瓦質土器	羽釜	(19.2)	5.2残	−	密	少量	硬質	灰色	褐灰色	丁寧なナデ	横ナデ、指圧さえ後ナデ
120	XI	包含層	須恵器	坏蓋	(16.7)	1.6残	−	密	少量	硬質	青灰色	青灰色	回転ナデ	回転ナデ
121	XI	包含層	須恵器	坏蓋	(18.1)	2.5残	−	密	少量	硬質	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ
122	XI	包含層	須恵器	坏	−	3.9残	(5.8)	密	少量	硬質	灰色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切り
123	XI	包含層	須恵器	坏	(12.0)	5.1	(6.1)	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切り、板目圧痕
124	XI	包含層	白磁	碗	(16.0)	5.0残	−	密	含まない	硬質	胎土 灰白色	釉 灰白色	回転ナデ	回転ナデ
125	XI	包含層	緑釉陶器	皿？	−	1.2残	−	密	含まない	やや硬質	胎土 浅黄橙色	釉 灰白色	回転ナデ	回転ナデ
126	XI	包含層	緑釉陶器	皿？	(15.0)	1.6残	−	密	少量	やや硬質	胎土 浅黄橙色	釉 灰白色	回転ナデ	回転ナデ
127	XI	包含層	緑釉陶器	埦	−	2.6残	6.5	密	少量	やや硬質	胎土 浅黄色	釉 オリーブ黄色	回転ナデ、トチン跡	回転ナデ、トチン跡
128	XI	包含層	土師器	皿	7.3	1.3	6.0	密	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ、糸切り後ナデ
129	XI	包含層	土師器	皿	10.6	2.2	5.2	密	少量	硬質	灰赤色	明赤灰色	回転ナデ	回転ナデ、糸切り、板目圧痕
130	XI	包含層	土師器	皿	(11.3)	2.7	4.1	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、糸切り、板目圧痕
131	XI	包含層	須恵器	皿	(14.0)	3.0	(8.6)	密	多量	硬質	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切り？
132	XI	包含層	土師器	埦	−	3.2残	6.0	密	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナデ後丁寧なナデ	回転ナデ、糸切り後ナデ
133	XI	包含層	須恵器	坏	15.0	4.4	6.0	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切り、板目圧痕
134	XI	包含層	土師器	埦	(14.6)	4.2	(8.6)	密	少量	やや硬質	浅黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	磨滅
135	XI	包含層	土師質土器	鉢	−	7.5残	(11.2)	やや粗い	多量	やや硬質	灰白色	灰白色	指ナデ	磨滅
136	XI	包含層	土師質土器	足鍋	26.0	13.2残	24.6	密	少量	硬質	黄灰色	黄灰色	横ハケ後ナデ	ナデ、格子目タタキ

番号	地区	遺構	種別	器種	法量(cm)(復元値)			胎土		焼成	色調		調整	
					口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面	内面	外面
137	Ⅺ	包含層	瓦質土器	足鍋	(26.6)	17.1残	(24.4)	密	少量	硬質	灰白色	黒色	横ナデ	ナデ、ハケ目、指圧さえ
138	Ⅺ	包含層	土製品	支脚状土製品	厚さ4.6	11.5残	−	密	少量	やや硬質	灰白色	灰白色	指圧さえ後ナデ	指圧さえ後ナデ
139	Ⅺ	包含層	土製品	柱状高台付皿	−	3.8残	5.0	密	少量	硬質	浅黄橙色	浅黄橙色	丁寧なナデ	丁寧なナデ、回転糸切り
140	Ⅺ	包含層	土製品	土錘	径1.6	長さ3.6	孔径0.4	密	多量	硬質	にぶい橙色	にぶい橙色	丁寧なナデ	丁寧なナデ
141	Ⅺ	包含層	土師質土器	大鍋	(53.6)	11.5残	−	密	少量	硬質	にぶい橙色	褐灰色	横ハケ後ナデ	横ハケ後ナデ
142	Ⅻ	SB21(SP429)	土師器	皿	(8.0)	1.4	5.2	密	少量	硬質	淡橙色	橙色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、回転糸切り
143	Ⅻ	SB21(SP429)	土師器	埦	(13.0)	3.5残	−	密	少量	硬質	灰白色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ
144	Ⅻ	SP403	土師器	皿	(7.8)	1.3	(6.1)	密	少量	硬質	浅黄橙色	灰白色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、回転糸切り
145	Ⅻ	SP492	土師器	皿	(7.8)	1.1	(6.5)	密	少量	硬質	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、糸切り、板目圧痕
146	Ⅻ	SP435	土師質土器	足鍋(脚)	径2.6	7.8残	−	密	少量	硬質	褐灰色	褐灰色	指ナデ	指ナデ
147	Ⅻ	SP462	土師器	坏	−	2.9残	(7.4)	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、回転糸切り
148	Ⅻ	SP475	土師器	坏	(10.8)	3.7	(4.1)	密	含まない	硬質	にぶい橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、糸切り後ナデ
149	Ⅻ	SP475	土師器	坏	12.0	4.0	6.9	密	少量	やや硬質	橙色	にぶい橙色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、糸切り後ナデ
150	Ⅻ	SP475	土師器	坏？	(12.4)	2.9残	−	密	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ
151	Ⅻ	SD 6	土師質土器	鍋	−	4.2残	−	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
152	Ⅻ	SD 7	土師器	坏	−	1.3残	(6.0)	密	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
153	Ⅻ	SD 7	青磁	碗	−	3.5残	−	密	含まない	硬質	胎土 灰白色	釉 オリーブ黄色	回転ナデ	回転ナデ、鎬蓮弁文
154	Ⅻ	SD 8	須恵器	甕	−	4.3残	−	密	少量	硬質	灰色	灰色	横ナデ、同心円文タタキ	横ナデ、平行タタキ
155	Ⅻ	SD 8	土師器	坏	−	2.1残	5.2	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
156	Ⅻ	SD 8	土師器	埦	(16.2)	4.8残	−	極密	少量	硬質	灰色	灰色	ヘラミガキ、ナデ	回転ナデ
157	Ⅻ	SD 8	瓦質土器	足鍋	−	4.7残	−	密	少量	硬質	灰白色	灰色	横ハケ後ナデ	指ナデ
158	Ⅻ	SD 8	土師質土器	甕	−	2.6残	−	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	横ナデ	横ナデ
159	Ⅻ	SD 8	須恵器	大甕	(30.4)	6.6残	−	やや粗い	多量	硬質	青灰色	明青灰色	横ナデ、同心円文タタキ	横ナデ
160	Ⅻ	SD 8 ・12	土師質土器	足鍋	(34.6)	10.8残	−	密	少量	硬質	明黄褐色	明黄褐色	横ハケ後ナデ	縦ハケ後ナデ
161	Ⅻ	SD 8	土師質土器	足鍋(脚)	径2.2	14.2残	径1.7	密	少量	硬質	にぶい赤橙色	赤灰色	指圧さえ、ナデ	指ナデ
162	Ⅻ	SD 8	瓦質土器	足鍋(脚)	径2.2	15.5残	径1.5	密	少量	硬質	灰白色	にぶい橙色	指ナデ	指ナデ
163	Ⅻ	SD12	土師質土器	足鍋	(27.0)	6.4残	−	密	多量	やや硬質	にぶい黄橙色	灰白色	横ハケ後ナデ	横ナデ
164	Ⅻ	包含層	土師器	埦	−	2.4残	6.0	密	含まない	硬質	淡橙色	淡橙色	丁寧なナデ	回転ナデ、糸切り後ナデ
165	Ⅻ	包含層	土師器	埦	−	2.3残	5.8	密	少量	硬質	淡橙色	淡橙色	丁寧なナデ	回転ナデ、ナデ
166	Ⅻ	包含層	瓦質土器	甕	(24.8)	4.3残	−	密	多量	やや硬質	暗灰色	暗灰色	平行タタキ後横ナデ	横ナデ
167	Ⅻ	包含層	備前系陶器	甕	−	6.0残	−	密	少量	硬質	灰色	灰色	横ナデ	横ナデ
168	Ⅻ	包含層	土師質土器	足鍋	(27.8)	11.8残	−	密	少量	硬質	灰黄褐色	灰黄褐色	横ナデ	横ナデ、平行タタキ
169	Ⅻ	包含層	土製品	土錘	径1.1	長さ3.5	孔径0.4	密	少量	硬質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	指ナデ	指ナデ
170	Ⅻ	包含層	土製品	土錘	径1.6	長さ3.2	孔径0.4～0.5	密	やや多い	硬質	灰黄褐色	灰黄褐色	指ナデ	指ナデ

番号	地区	遺構	種別	器種	法量(cm)(復元値)			胎土		焼成	色調		調整	
					口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面	内面	外面
171	Ⅷ	SB27(SP603)	土師器	埦	(15.3)	3.9残	−	密	少量	硬質	灰黄褐色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
172	Ⅷ	SB27(SP603)	土師質土器	鍋	(21.4)	11.8残	−	密	多量	硬質	灰褐色	にぶい橙色	横ハケ後ナデ	横ハケ後ナデ、ヘラナデ
173	Ⅷ	SB27(SP604)	土師質土器	鍋	(34.4)	11.3残	−	粗い	極多量	極硬質	灰褐色	褐灰色	丁寧なヘラナデ	指圧さえ後横ナデ
174	Ⅷ	SB27(SP665)	土師器	坏	(12.2)	4.1	(4.2)	密	少量	やや硬質	灰白色	淡橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
175	Ⅷ	SB27(SP665)	土師器	坏	(15.0)	5.3	(6.1)	密	少量	やや硬質	灰白色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ
176	Ⅷ	SB27(SP665)	土師器	埦	(17.0)	5.6	(5.9)	密	多量	やや硬質	淡橙色	淡橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
177	Ⅷ	SP565	土師器	Ⅲ	7.6	1.3	5.1	密	少量	硬質	灰褐色	褐灰色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、回転糸切り
178	Ⅷ	SP565	土師器	Ⅲ	(7.9)	1.3	(5.3)	密	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、回転糸切り
179	Ⅷ	SP565	東播系須恵器	鉢	−	4.4残	−	密	少量	硬質	灰色	灰色	横ナデ	横ナデ
180	Ⅷ	SP566	土師器	Ⅲ	8.6	1.5	5.8	密	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、回転糸切り
181	Ⅷ	SP566	土師器	Ⅲ	8.7	1.4	5.8	密	やや多い	やや硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、糸切り、板目圧痕
182	Ⅷ	SP571	土師器	Ⅲ	(8.8)	1.5	(6.0)	密	含まない	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、糸切り、板目圧痕
183	Ⅷ	SP585	土師器	Ⅲ	7.9	1.4	5.2	密	やや多い	硬質	橙色	橙色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、糸切り、板目圧痕
184	Ⅷ	SP606	土師器	Ⅲ	7.5	1.4	4.7	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、回転糸切り
185	Ⅷ	SP622	土師器	Ⅲ	8.1	1.7	5.3	密	やや多い	硬質	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、糸切り後ナデ
186	Ⅷ	SP621	土師器	坏	(16.0)	4.7	(6.7)	密	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナデ、丁寧なナデ	回転ナデ、糸切り
187	Ⅷ	SP621	土師器	埦	(16.7)	5.5	7.0	密	含まない	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、丁寧なナデ	回転ナデ、回転糸切り
188	Ⅷ	SP649	土師質土器	羽釜	(29.2)	5.7	−	密	やや多い	硬質	灰褐色	にぶい橙色	横ハケ	指圧さえ後横ナデ
189	Ⅷ	SP680	土師器	坏	−	2.2残	7.2	密	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、回転糸切り
190	Ⅷ	SP680	土師器	坏	−	2.0残	6.5	密	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、糸切り後ナデ
191	Ⅷ	SP698	土師器	埦	15.8	4.9	7.4	密	極少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、丁寧なナデ	回転ナデ、糸切り後ナデ
192	Ⅷ	SP699	土師器	坏	−	1.3残	3.9	密	少量	硬質	灰白色	にぶい橙色	回転ナデ	磨滅
193	Ⅷ	SK33	土師器	坏	11.4	3.9	7.1	密	少量	硬質	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ
194	Ⅷ	SK33	土師器	坏	(11.6)	3.5	6.2	密	少量	やや硬質	灰白色	浅黄橙色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、糸切り後ナデ
195	Ⅷ	SK33	土師器	坏	11.3	3.9	5.2	密	少量	硬質	灰白色	浅黄橙色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、糸切り後ナデ
196	Ⅷ	SK33	土師器	埦？	−	3.1残	−	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
197	Ⅷ	SK33	土師器	埦	−	2.0残	(7.6)	密	極少量	やや硬質	灰白色	浅黄橙色	磨滅	磨滅
198	Ⅷ	SK33	土師器	埦	−	2.2残	(7.8)	極密	少量	やや硬質	灰白色	灰白色	磨滅	磨滅
199	Ⅷ	SK33	土師器	埦	−	1.3残	7.2	密	含まない	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、糸切り後ナデ
200	Ⅷ	SK33	土師器	埦	−	2.1残	7.8	密	含まない	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ
201	Ⅷ	SK33	土師器	埦	−	2.2残	9.1	密	含まない	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ
202	Ⅷ	SK33	土師器	埦	−	3.0残	7.3	密	含まない	硬質	浅黄橙色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
203	Ⅷ	SK33	土師器	埦	15.0	5.4	7.9	密	含まない	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、丁寧なナデ	回転ナデ、糸切り後ナデ
204	Ⅷ	SK33	土師質土器	甕	(22.6)	6.2残	−	やや粗い	極多量	硬質	灰白色	浅黄橙色	ヘラナデ	横ナデ

番号	地区	遺構	種別	器種	法量(cm)(復元値)			胎土		焼成	色調		調整	
					口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面	内面	外面
205	Ⅻ	SK33	土師質土器	甕	(22.4)	9.1残	−	やや粗い	多量	硬質	胎土 灰白色	釉 緑色	横ハケ後、 横ナデ	横ナデ 一部に釉付着
206	Ⅻ	SK33	土師質土器	甕	(18.6)	9.8残	−	密	多量	硬質	灰白色	灰白色	横ナデ	横ナデ
207	Ⅻ	SK33	土製品	三叉トチン	径 1.1×1.2	長さ 5.0残	−	密	含まない	硬質	胎土 浅黄橙色	釉 暗オリーブ色	指ナデ	指ナデ
208	Ⅻ	SK33	土製品	三叉トチン	径 1.2×1.0	長さ 2.8残	−	密	含まない	硬質	胎土 灰白色	釉 オリーブ色	指ナデ	指ナデ
209	Ⅻ	SK33	土製品	三叉トチン	径 1.1×1.2	長さ 6.2残	−	密	含まない	硬質	胎土 灰白色	釉 オリーブ褐色	指ナデ	指ナデ
210	Ⅻ	SK34	土師器	埦	(13.0)	5.3	6.9	密	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、 丁寧なナデ	回転ナデ、 ナデ
211	Ⅻ	SK34	土師器	埦	(14.8)	5.0	(7.2)	粗い	多量	硬質	灰黄褐色	にぶい黄橙色	回転ナデ、 丁寧なナデ	回転ナデ、 ナデ
212	Ⅻ	SD14	瓦質土器	鍋	−	5.7残	−	密	少量	硬質	灰白色	灰黄色	横ハケ、 横ナデ	横ハケ後 横ナデ

表３　出土石製品観察表

番号	地区	遺構	種別	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材
222	Ⅺ	SP352	玦状耳飾	3.4	2.8残	0.4	6.6	翡翠？
223	Ⅻ	包含層	玦状耳飾？	2.5残	1.6残	0.5	2.7	滑石
224	Ⅺ	包含層	石帯	2.6残	2.2残	0.7	8.9	黒色粘板岩
225	Ⅻ	包含層	扁平片刃石斧	4.8残	2.6	0.8	21.0	層灰岩系
226	Ⅺ	SP106	磨製石斧	9.8	4.2	2.2	142	安山岩系
227	Ⅻ	包含層	磨石	10.4	9.7	5.7	834	花崗岩
228	Ⅹ	包含層	石鍋	(14.2)	7.3残	−	−	滑石
229	Ⅻ	包含層	石鍋	(24.8)	3.2残	−	−	滑石

Ⅳ　まとめと考察

調査成果について

今回の発掘調査では、古代～中世を中心とする遺構・遺物を確認することができた。最後にこれらの成果についてまとめ、若干の考察を加えたい。

まず、遺構についてであるが、掘立柱建物跡を33棟復元することができた。このうち柱穴からの出土遺物などから年代を推定できるものがあり、SB ３·14·19は古代、SB １・７·15·16·27は中世に比定できる。全てに当てはまる訳ではないが、棟方向が東西を向き、規模が比較的大きな建物が古代に、棟方向が南北を向き、規模が比較的小さな建物が中世の所産として捉えられそうであり、過去の調査成果とも整合性をもつ。このほかの遺構としては、土坑が確認されているが、そのほとんどが廃棄土坑であると考えられる。こうした中にあって、焼土塊がまとまって検出されたSK14は、炉としての機能を有していた可能性もある。

次に遺物についてであるが、今回の調査では、良好な土坑一括資料には恵まれなかったものの、そうした状況下にあっても、Ⅻ地区のSK33からは土師器坏（193～195）、埦（177～203）、甕（204～206）、三叉トチン（207～209）といった組成を確認することができた。10世紀後半代に比定できる遺物群であろう。また、SK34では、図28：210·211に示したような土師器埦と、延喜通寶の共伴関係を確認することができた。延喜通寶の初鋳は907年であるので、少なくともこうした形態を呈する土器の年代は10世紀初頭を遡らないことが確認できる。延喜通寶と共伴する土器群については、平成８年度の調査でも確認されているが（Ⅳ地区SK08）、銅銭自体の残存状況が悪いため、確実な事例とは言えなかった。相対的な土器編年に実年代を付与するにあたり、貴重な資料を得たと言えよう。

また、遺跡の中心時期からは外れるが、Ⅺ地区で出土した縄文時代の玦状耳飾、古墳時代の土師器甕は特筆すべき資料である。玦状耳飾は２点確認されており、そのうち１点（図29:222）は淡緑色の美しい色調であり、翡翠に近い石材が用いられている。玦状耳飾は県下では、下関市宮ノ原遺跡、同市長門国府跡、長門市雨乞台遺跡、宇部市月崎遺跡などで出土しているが、こうした諸事例と比較しても、今回得られた資料は石材的に優品である。

古墳時代の甕については、その出土状況からみて、単に廃棄されたというよりは、何らかの意図をもって埋置されていたと考えるほうが妥当であろう。資料自体も肩部にヘラ記号を施し、一般的な日常土器とは一線を画す存在であり、この地で何らかの祭祀的行為が執り行われていたことを想像することができる。ただし、東禅寺・黒山遺跡における過去の調査では、古墳時代の遺構・遺物は全く確認されていないため、今回の事例をいかなる脈絡で解釈すべきか判断が難しい。

暗渠排水溝について

今回の調査によって、Ｘ地区（図版３:下段）やⅫ地区（図版14:右下）に見られるような礫石を充填した溝と、Ⅻ地区（図版12:中段）のような側面から底面にかけて笹や粗朶を貼り付けた溝が検出された。いずれも埋土は単一層でほとんど遺物を含まず、地山に酷似する土質であった。

溝に礫石や松の木を充填する暗渠排水溝は、文政５（1822）年に大蔵永常が著した『農具便利論 中』にも記載されているが、扇の骨を開いたような形に溝を数本掘り、溝が集中する基部に排水口を設け

ているので、今回検出された排水溝の敷設形態とは異なる。

そこで水田排水の歴史を調べた結果、明治初期頃までには本渠に対して支渠を直角に設ける方法が考えられており、さらに冨田式暗渠排水と呼ばれる排水法があることを確認した。考案者の冨田甚平（1848～1927）は明治８（1875）年、熊本県で地租改正担当用掛に任命され、各村の土地等級の決定任務中に、畦畔が接しているにもかかわらず水田の等級に著しく差異があることに気付き、その原因は湿田の地下水に基づいていることを認識した。そこで、大蔵永常の暗渠配置法を試みたが不備であることを発見し、その後、独自の暗渠配置の原則を確立した。この業績によって冨田は鹿児島県農業教師として招聘され､県下の農事改良､ことに暗渠排水の巡回指導をおこなった。さらに明治32(1899)年には山口県農業巡回教師・技師となり11年間山口県内の農事改良をすすめ、特に土壌の排水率を高め湛水田を乾田にすることを目的とした排水事業をおこない、その実績は着任後３年間で500町歩に及んでいる。また暗渠を排水溝から灌漑溝に変換できる冨田考案の留井戸と呼ばれる構造を改良し、明治36年に水閘（すいこう）土管を考案した。ちなみにこの水閘土管を最初に試作したのは、佐波郡牟礼村（現防府市牟礼堀越）の宮本（土管）工場である。この土管については、地元の年配者からも昭和の中頃まで使用されていたと聞き及んでいる。

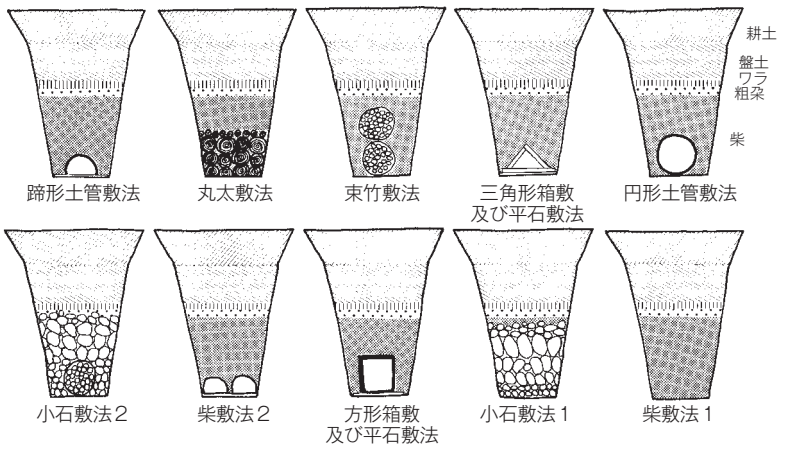


図30　冨田式暗渠工事方法

今回の調査では留井戸や水閘土管が検出されていないため、検出された溝が冨田式暗渠排水溝であると明言はできない。今後の発掘調査によって、典型例が検出されることを期待したい。なお、図30に示した冨田式暗渠工事用例は、明治期における暗渠排水溝の指標として紹介した。

参考文献：冨田甚平・建野 保 共著　『冨田式暗渠排水法』　熊本県 振農館　明治39（1906）年
江上利雄　「簡易暗渠排水技術の確立－冨田甚平の業績－」『日本農業発達史』　第４巻　昭和29（1954）年
須々田黎吉「冨田式暗渠排水法」解題　　『明治農書全集』　11巻　昭和60（1985）年

付編

東禅寺・黒山遺跡出土金属製品の分析

財団法人元興寺文化財研究所　川本耕三

１．分析対象

東禅寺・黒山遺跡出土古銭（No. １、No. ２）２点（図１）

２．分析内容

蛍光Ｘ線分析装置（XRF）を用いて、定性成分分析を行った。

３．使用機器

（１）エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（XRF）【SII ナノテクノロジー SEA5230】

試料の微小領域にＸ線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光Ｘ線を検出することにより元素を同定する。

測定は大気中でφ1.8mm のコリメータを用い、45kV の管電圧で300秒間行った。この条件は大気中でカルシウム（Ca）より重い元素を検出できる。なお、Ｘ線ターゲットはモリブデン（Mo）である。

（２）マイクロスコープ【ハイロックス KH－1300】

４．結果と考察

東禅寺・黒山遺跡出土古銭2点（No.1、No.2）は表面の細かい造形が失われるなど劣化が観察された（図１）。

No. １は完形で、青白色の表面を XRF で分析したところ鉛（Pb）を強く検出した他に、鉄（Fe）、銅（Cu）、ヒ素（As）、銀（Ag）、スズ（Sn）を検出した（図３）。No. ２には欠損があり、茶色い表面を XRF で検出したところ、ほぼ同様の分析結果を得た（図４）。次に、No. ２の破断面をマイクロスコープで拡大観察した（図２）ところ、芯の部分には表面と比べて健全と思われる青緑色の部分があったため、この破断面を XRF で分析したところ銅と鉛を強く検出した（図５）。

試料を採取せず遺物をそのまま XRF で測定する手法ではその表面しか分析できないので、土中で周辺環境の影響を受けて変化している古銭表面の分析結果は、本来とは異なるかも知れないことを考慮しなくてはいけない。

この２点の古銭の表面分析では鉛を強く検出したため鉛銭であると思われたが、No. ２については破断面の分析の結果、銅と鉛を強く検出したため銅や鉛等の合金製の可能性があった。また、鉄をやや強く検出した（図４）ことから、茶色い表面色は鉄成分由来の可能性が考えられた。（注：古銭 No. １は実測図213、古銭 No. ２は実測図214に対応）

５．分析データ

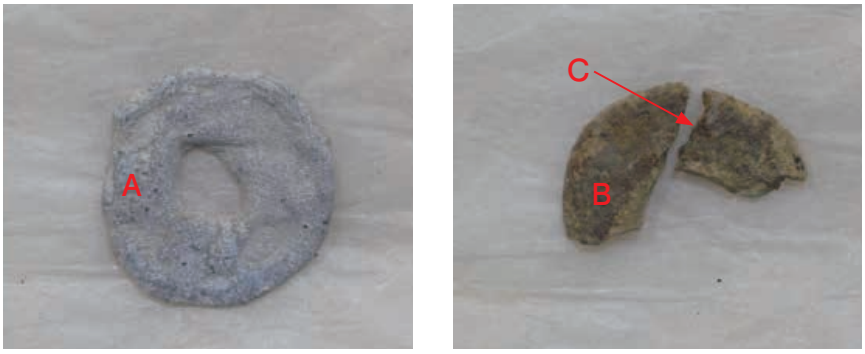


図１　東禅寺・黒山遺跡出土古銭（左：No １、右：No ２）とその分析箇所

図２　No.2　古銭破断面図の拡大像とその分析箇所

［No. 1古銭］

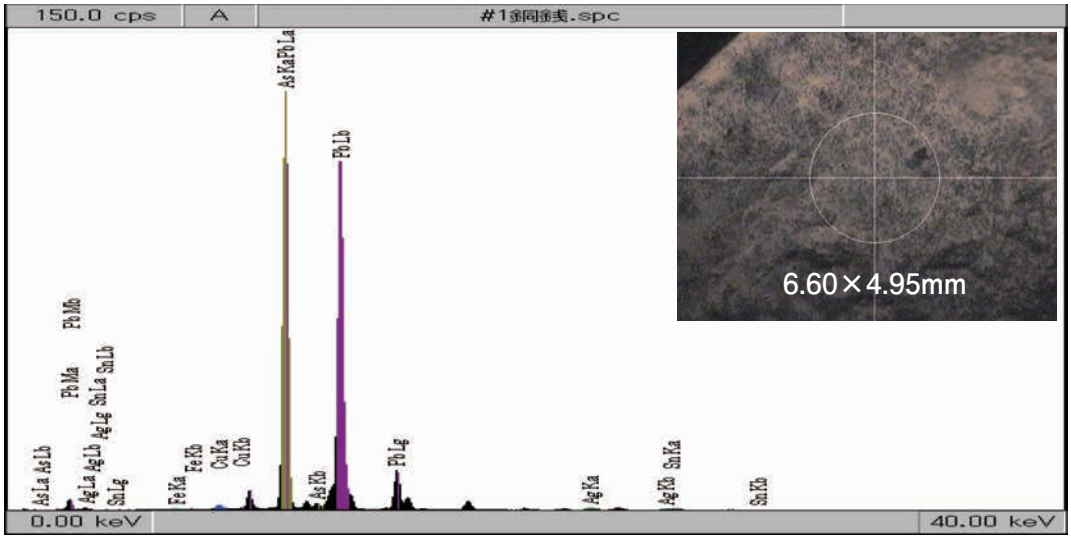


図3　No. 1古銭分析箇所のAのXRFスペクトル

［No. 1古銭］

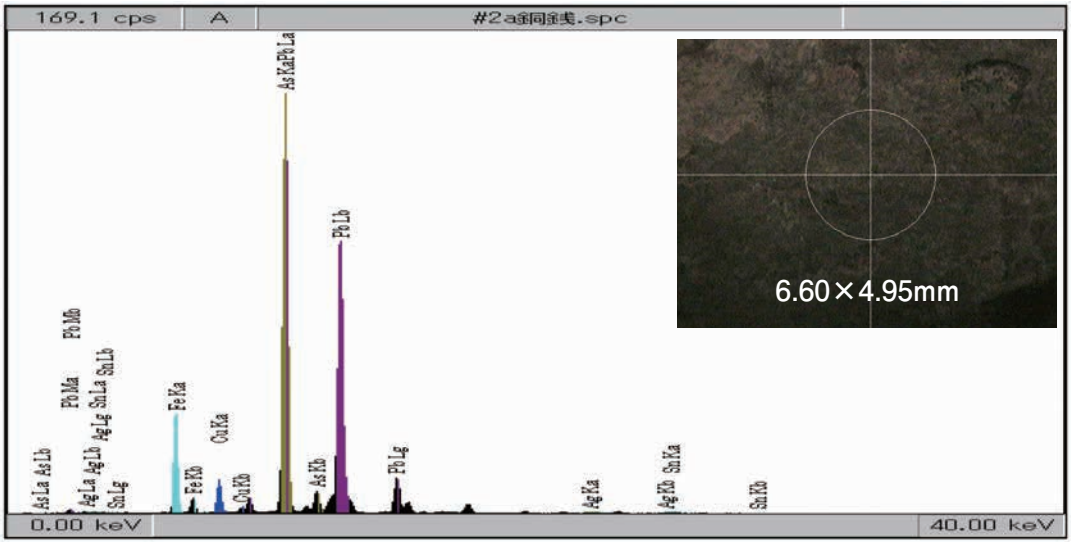


図4　No. 2古銭分析箇所Bの XRF スペクトル

［No. 1古銭］

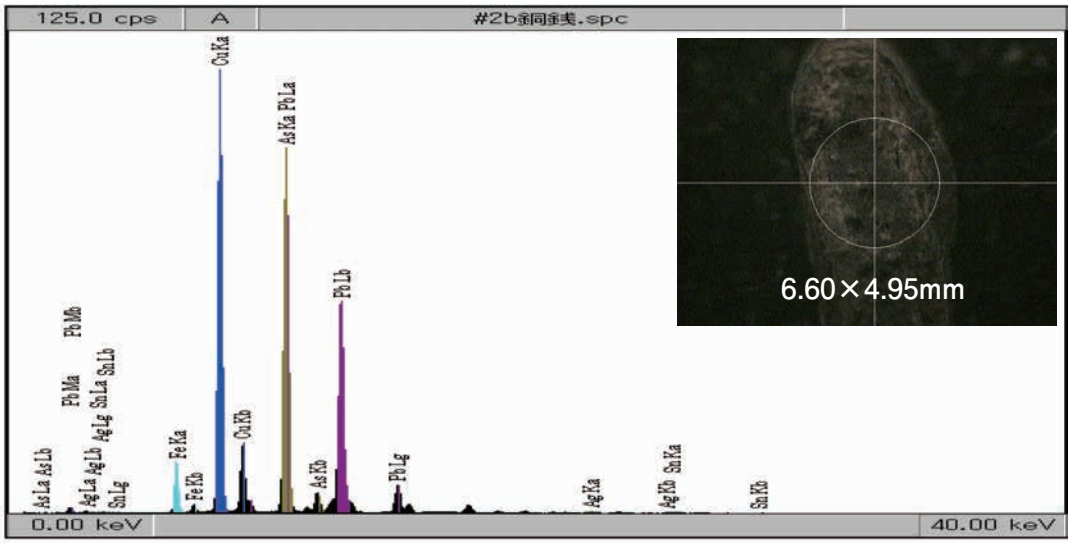


図5　No. 2古銭分析箇所C（破断面）の XRF スペクトル

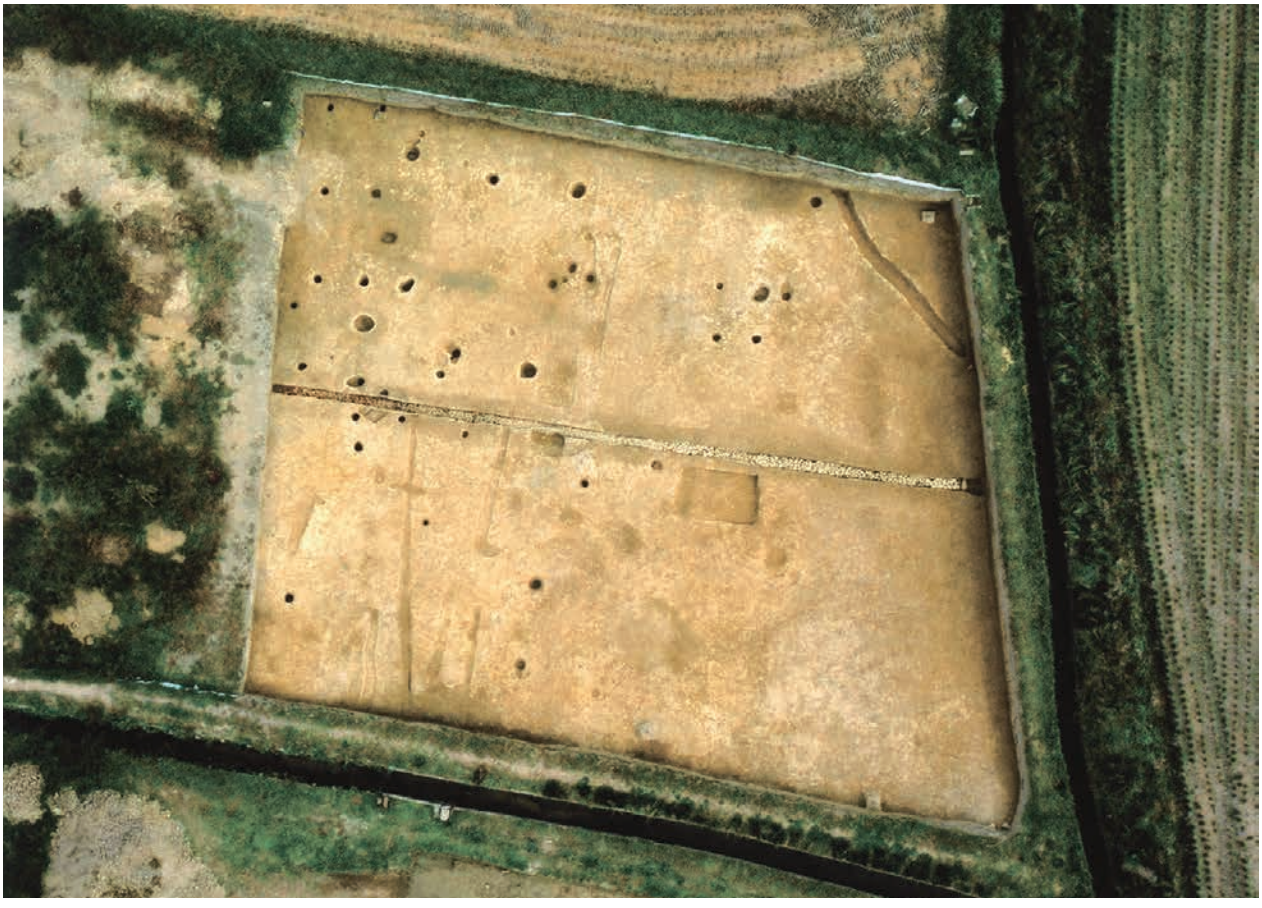
図　版

調査区遠景

図版２

調査区全景

Ⅸ地区全景（南から）



Ⅹ地区全景

図版４

XI地区全景

Ⅻ地区全景

ⅫⅠ地区全景

図版６

Ⅸ地区東壁土層断面（西から）

Ⅹ地区南壁土層断面（北から）

SB1・SB2完掘状況

SP6上層遺物出土状況（西から）

SP6下層遺物出土状況（西から）

SP6完掘状況（西から）

SD1土層断面（西から）

X地区暗渠１土層断面（北から）

SD1完掘状況（東から）

図版８

XI地区東半部掘立柱建物群

XI地区西半部掘立柱建物群

SP30遺物出土状況（南西から）

SP258遺物出土状況（東から）

SP301遺物出土状況（南から）

SP361遺物出土状況（東から）

SP352遺物出土状況（西から）

SP352玦状耳飾出土状況（西から）

SP702遺物出土状況（北から）

SP756遺物出土状況（西から）

図版10

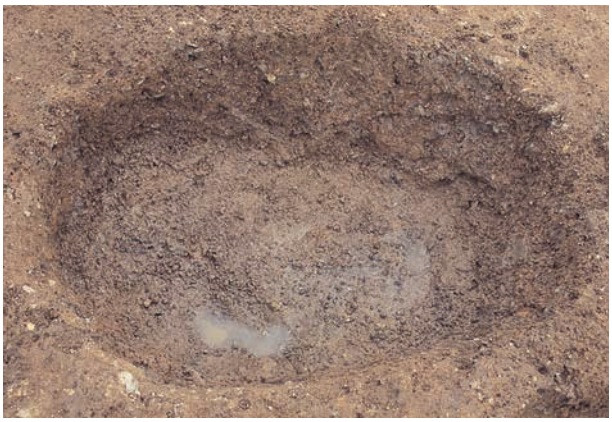
SK1遺物出土状況（南東から）

SK1完掘状況（南から）

SK14土層断面（東から）

SK14遺物出土状況（東から）

SK15土層断面（東から）



SK15完掘状況（西から）

SK16遺物出土状況（西から）

SK21遺物出土状況（西から）

SD2検出状況（北から）

SD2遺物出土状況（東から）

XI地区包含層遺物出土状況（南から）

SP429遺物出土状況（東から）

SP462遺物出土状況（南から）

図版12

SP475遺物出土状況（西から）

SP484遺物出土状況（南から）

SD7・SD8・SD9完掘状況（北東から）

SD7底面

SD7排水口出土状況（北から）

SD8・SD9完掘状況（西から）

SD10・SD11検出状況（南から）

XII地区包含層石斧出土状況（東から）

SD10・SD11杭列出土状況（西から）

SP585遺物出土状況（東から）

SP606遺物出土状況（北から）

図版14

SP621遺物出土状況（北から）

SP665遺物出土状況（南から）

SP680遺物出土状況（西から）

SP698遺物出土状況（東から）

SK34遺物出土状況（南から）

SK34完掘状況（南から）

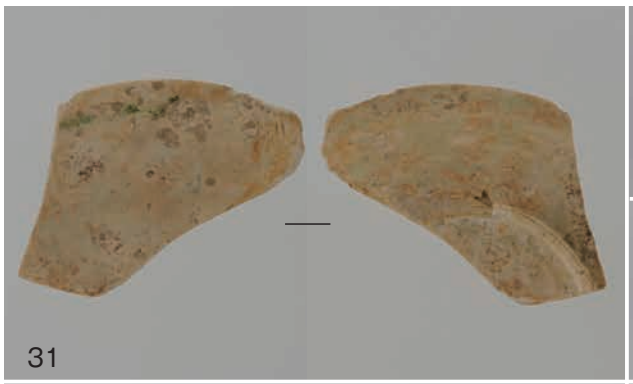
Ⅻ地区暗渠検出状況（西から）

SK33遺物出土状況（北から）

SK33遺物出土状況（拡張後東から）

図版16

出土遺物①


31

32

33

34

35

36

37

41

42

43

45

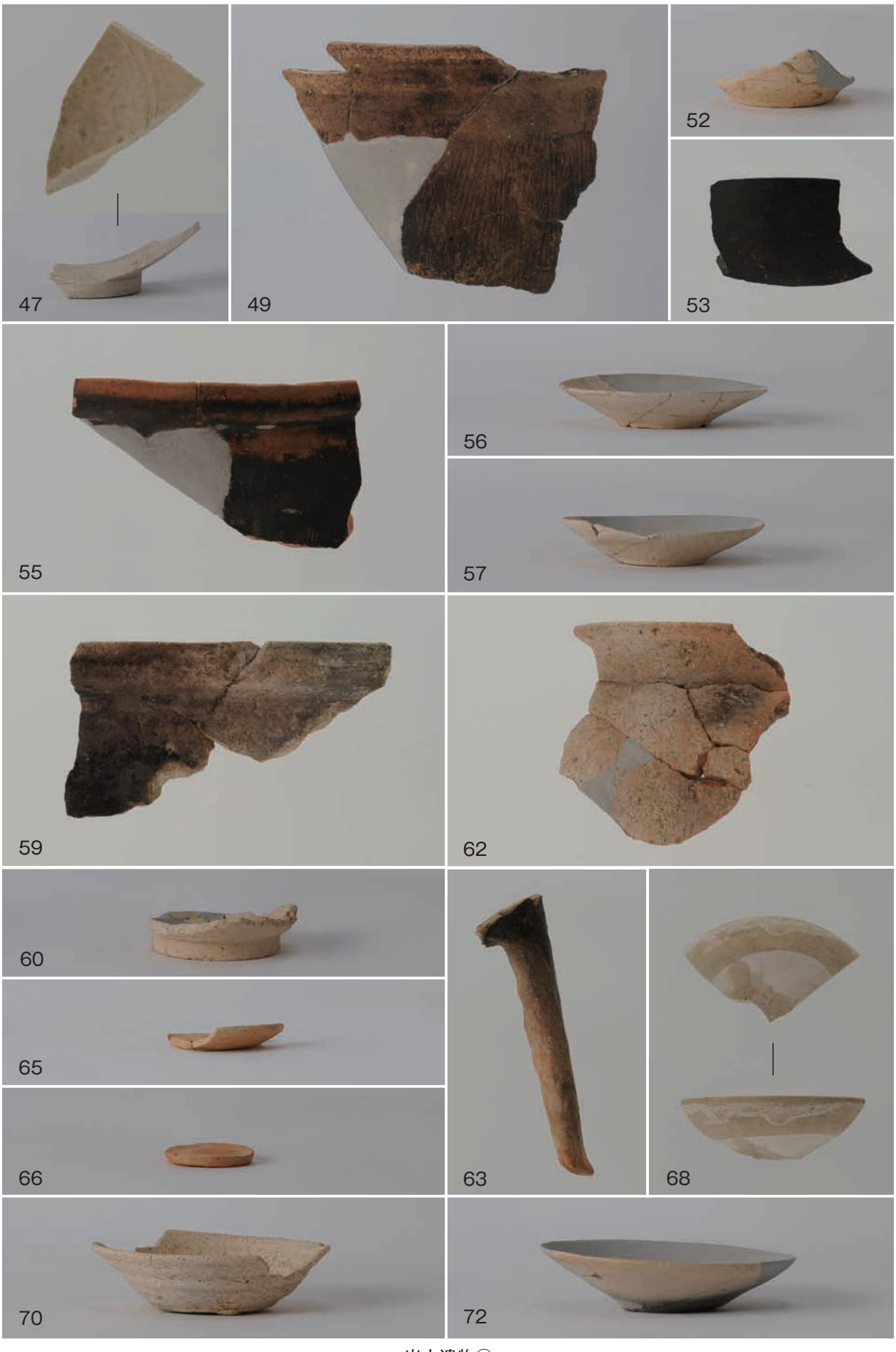
46

48

51

出土遺物②

図版18



出土遺物③

71

73

74

76

77

81

82

83

85

84

86

87

88

89

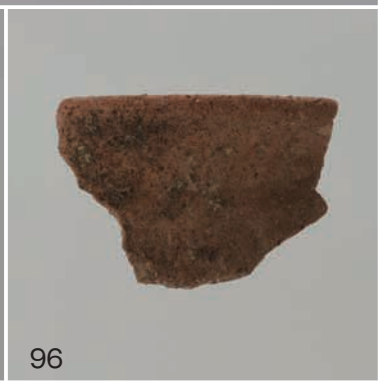
出土遺物④

図版20

91

92

95


96

100

101

肩部拡大

出土遺物⑤

103

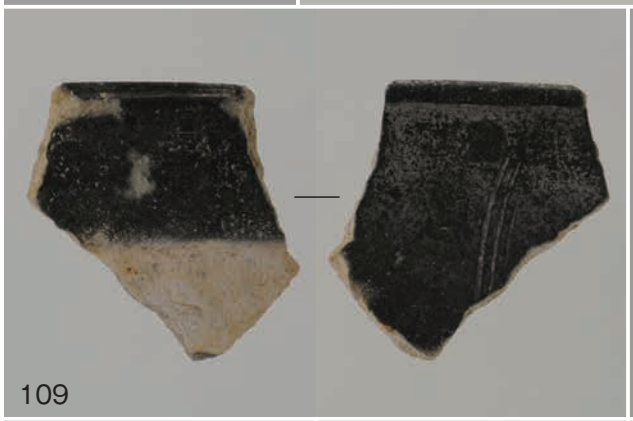
104

107

106

108

114


109

112

115

116

118

出土遺物⑥

図版22

出土遺物⑦

134

135

137

136

138

140

139

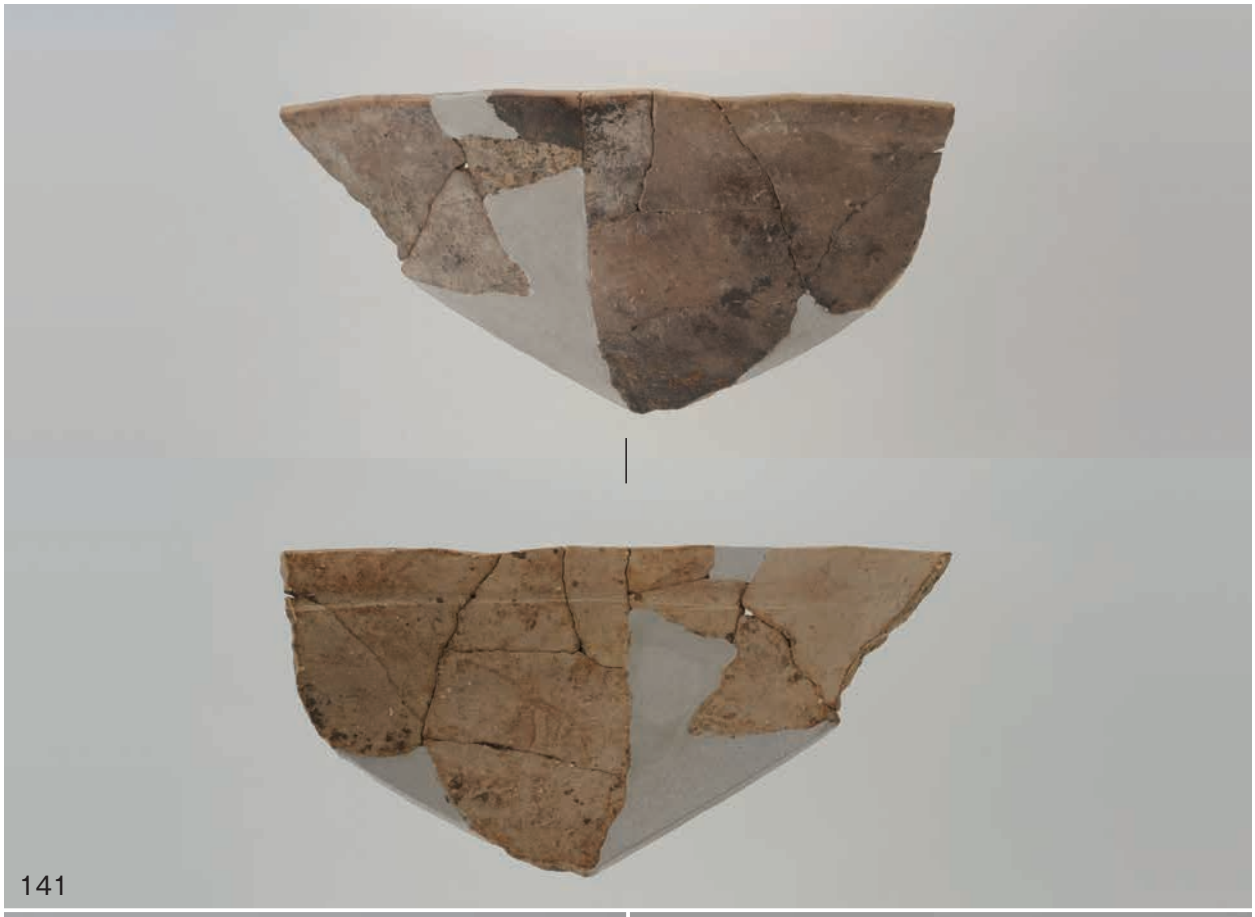
144

147

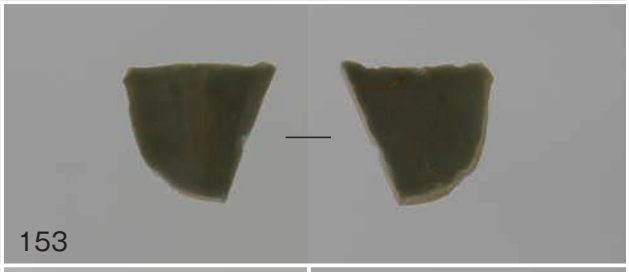
148

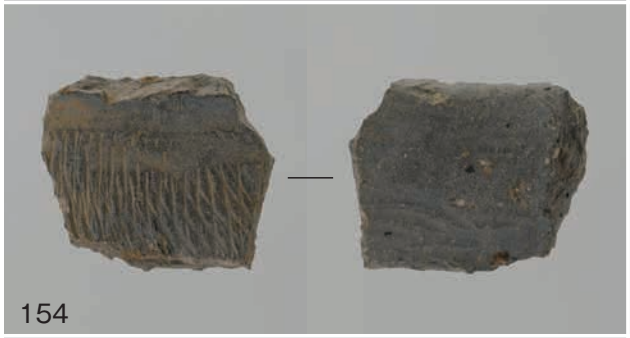
出土遺物⑧

図版24


141

149


153


154

157

158

155

164

159

出土遺物⑨

160

161

162

163

164

165

166

169

170

168

172

出土遺物⑩

図版26

173

175

176

177

178

180

181

182

183

184

185

186

187

188

189

190

193

194

195

198

出土遺物⑪

191

202

203

204

205

206

207

209

210

211

212

出土遺物⑫

図版28

出土遺物⑬

報 告 書 抄 録

ふ り が な	とうぜんじ・くろやまいせき６
書　　名	東禅寺・黒山遺跡Ⅵ
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第77集
編 集 著 者 名	小南裕一　石川　彰　米澤昭信　山田圭子
編 集 機 関	山口県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒753-0073　山口県山口市春日町３番22号　TEL 083-923-1060
発 行 年 月 日	西暦2011年３月24日（平成23年３月24日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東禅寺（とうぜんじ）・ 黒山遺跡（くろやまいせき）Ⅵ	山口県（やまぐちけん） 山口市（やまぐちし） 大字鋳銭司（おおあざすぜんじ）	35203		34°5′1″	131°26′49″	20100526 ～ 20101105	3,640㎡	遊水池建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東禅寺・ 黒山遺跡Ⅵ	集落跡	古　代 ～ 中　世	掘立柱建物　33棟 溝状遺構　18条 土坑　34基 柱穴約　1,800個	土師器 須恵器 土師質土器 瓦質土器 黒色土器 緑釉陶器 灰釉陶器 磁器 石器・石製品 金属製品	

要約	東禅寺・黒山遺跡は、古代から中世の時期を主体とする集落遺跡であり、今回の発掘調査でも９世紀以降と考えられる掘立柱建物跡や、土坑等の遺構を確認することができた。こうした遺構の一部は９世紀前半に設置された周防鋳銭司と年代的にも接点をもつものと考えられ、古代における鋳銭活動の実態を追求していくうえでも貴重な資料と言える。 また、今回の調査では縄文時代の玦状耳飾や古墳時代の土師器甕など、古代を遡る時期の遺物を検出することができた。周防鋳銭司設置以前の当地域を考えるうえで、断片的ながらも重要な資料を得たと言えるであろう。

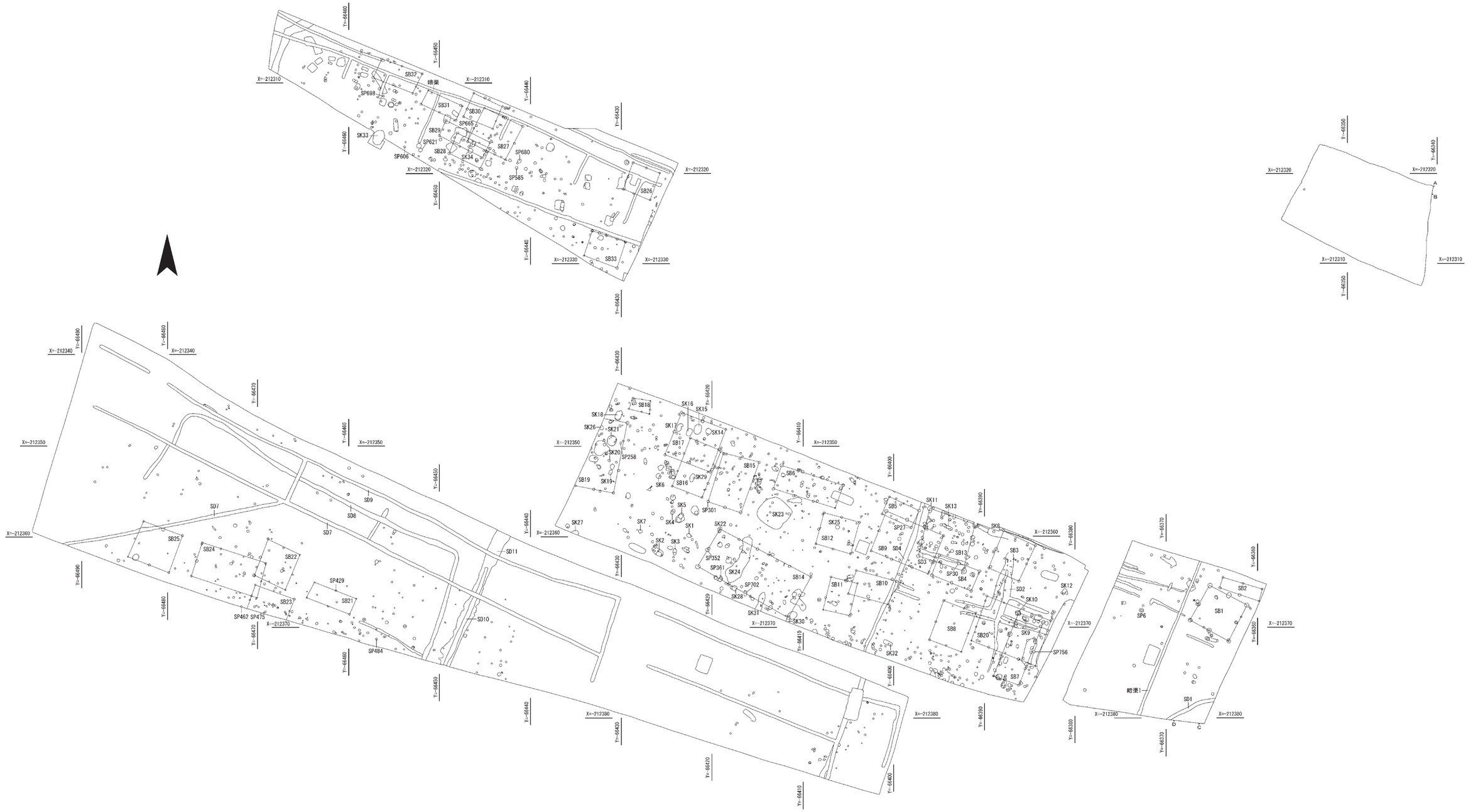
山口県埋蔵文化財センター調査報告　第77集

東禅寺・黒山遺跡Ⅵ

2011年３月24日

編集・発行　財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073　山口県山口市春日町３番22号

印　　刷　大村印刷株式会社
〒747-0849　山口県防府市西仁井令１－21－55



東禅寺・黒山遺跡遺構配置図